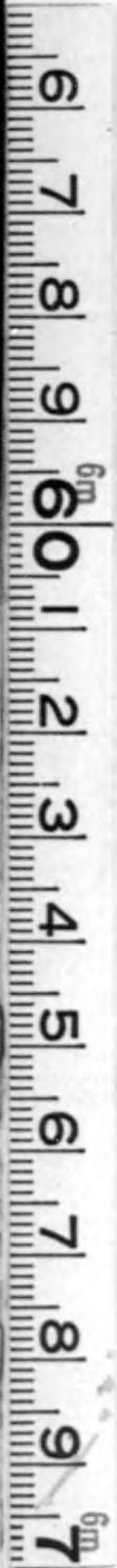


270-R38



1200500731298

270
38



始



258

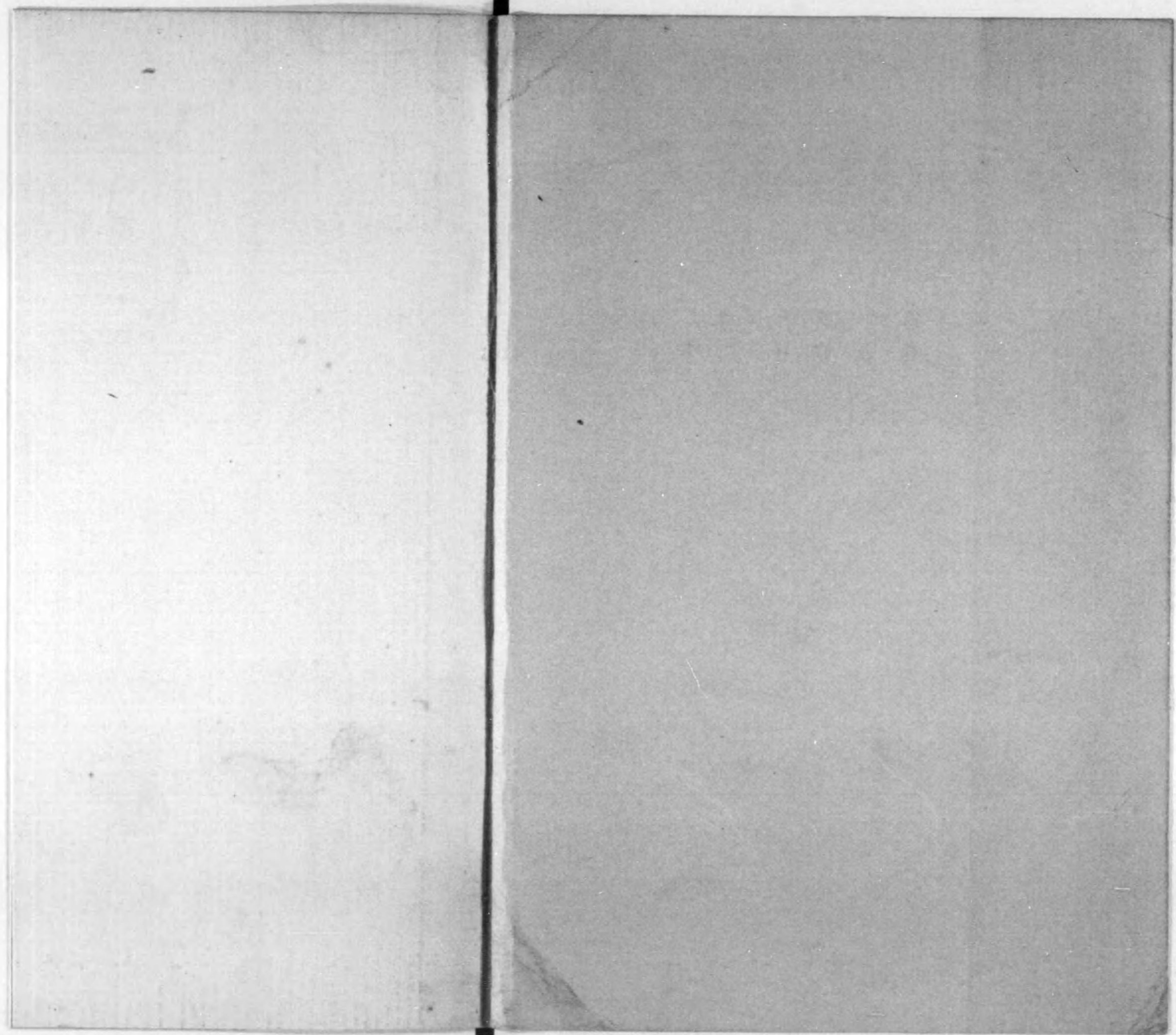
史洋平太

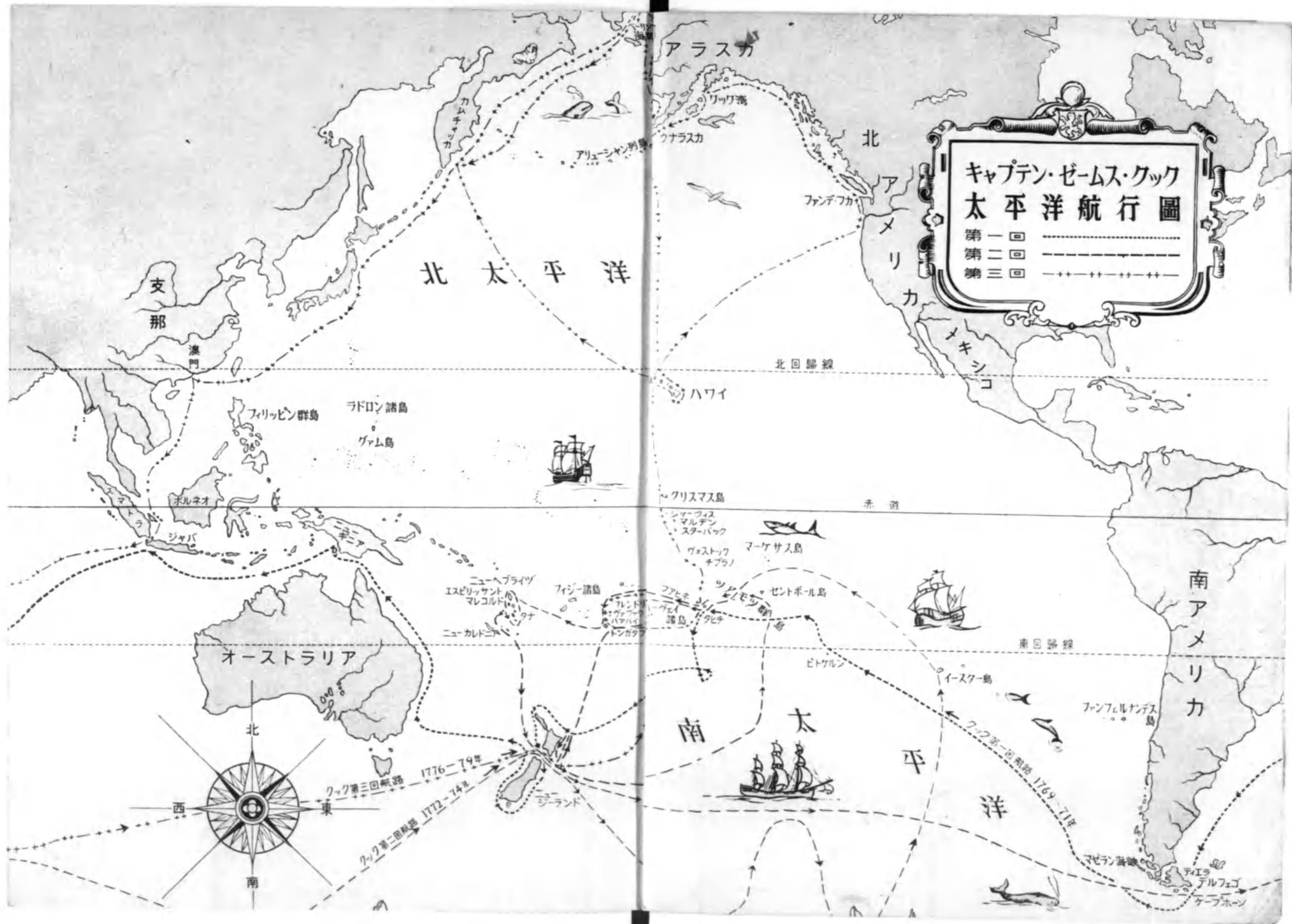
909
91

270
R38

著 グーバンゼーリ
譯 會協洋平太









史洋平太

著 グーバンゼーリ

譯 會 協 洋 平 太

發行所寄贈本



きはしが

譯者はしがき

本書はウトルシイ社編纂海洋叢書中の一卷 Felix Riesenbergs, The Pacific Ocean 1939 の全譯である。著者リーゼンバーグ氏は、本書脱稿後、校正半ばにして急死したのであるが、左記略歴の通り探検家として波瀾に富んだ生活を送り、海の權威者である。本書においても相當正確な資料に基づき、良心的に探検者、開拓者の業績を敘述し、これによつて太平洋史の全貌を明かにせんと苦心したる努力が窺はれる。今や西洋の没落と共に世界史の中心が太平洋に移行せんとする大勢顯著なる秋に當り、太平洋が如何にして世界史の上に登場して來たか、またその探検開拓に活躍したる歐米各民族が日本の太平洋國策に如何なる影響を及ぼしたかを明確に把握しておくことは、現下わが國民にとつての喫緊事であると信じ、こゝに譯出した次第である。

勿論この本にも多くの不満はある。太平洋の開拓と稱しつゝも、實はマゼラン海峡を通過して來た人々の事蹟を中心として描いてゐるが故に、例へばポルトガル人、オランダ人等のマラッカ海峡を據點としての活躍や、十九世紀における西歐諸列強の帝國主義的活動については觸れるところが少い。殊にこの書の最大の缺點は、ヨーロッパ人種の立場において書かれた歴史であるため、東洋人、即ち日本人、支那人、印度人等の東

南アジアを舞臺とする活動について全然觸れてゐないことである。しかしながら、これらの研究を中心にした太平洋の新しき歴史を書くことは日本を中心とする太平洋の新秩序の建設と共に、今後われわれに残された一大課題である。

これらの缺點に拘らず、この書は興味深く、且つわれわれにとり示唆するところ多い研究の一つであることを失はない。ヨーロッパ人が如何にして米大陸を越えて太平洋に進み來たつたか、しかしして如何なる動機で太平洋地域を支配するに至つたか等の諸點は、今日の問題としても考ふべき極めて多くの内容を藏してゐる。この巨大な海洋を征服したポルトガル人、スペイン人、オランダ人、イギリス人等の探検者の、探検の主觀的意圖の内容に於ては、黄金の誘惑、主君或は祖國への忠誠、或は科學的好奇心等多岐多端であつたに拘らず、これらの人々に共通する一點は、如何なる困難にも屈しない壯烈な英雄的な心情を持つてゐたといふことである。現在未曾有の困難に直面してゐるわが國民が、一切の國難を克服して太平洋の主人となるか、或は逆にまた太平洋の怒濤に漂盪せらるゝかは、一に懸つて國民的氣魄の有無にある。マゼラン、タック等の壯舉は、この意味においてわれわれに教ふるどころ極めて多しといふべきである。

なほこの書の翻譯は、本協會調査部の關嘉彦、中野弘、上原仁の三君が當つた。多端なる業務の餘暇を割き且つ時代の必要を思ふて急速力に行つたのではあるが、三君はその譯文を互に交換して相訂正し、以つて懸なからんことを期したのであつた。

最後にこの書の翻譯出版に對し種々の便宜を寄與して下さつた朝日新聞社出版部の諸氏に對し深厚なる謝意を表したい。

昭和十六年一月二十日

太平洋協會
常務理事

鶴 見 祐 輔

- Under Sail, 1915
 The Men on Deck, 1918
 Standard Seamanship, 1922
 Bob Graham at Sea, 1925
 P. A. L., (novel), 1925
 Vignettes of the Sea, 1926
 East side, West Side, (novel), 1927
 Red Horses (novel), 1928
 Shipmates, 1928
 Endless River, 1931
 Passing Strangers, 1932
 Clippership, 1932
 Log of the Sea, 1933
 Early Steamships, 1933
 Mother Sea (novel), 1933
 The Left-Handed Passenger (novel), 1935
 Living Again (autobiography), 1936
 The Pacific Ocean, 1939

著者フェリックス・リーゼンバーク氏略歴

一八七九年四月九日ウィスコンシン州ミルウォーキーで生れ、一八九六年より一九〇七年迄の間商船長として世界の海を周航した。變轉に富んだ略歴の持主で一九〇一—二年には士官として米國沿岸測量隊に加はり、一九〇六—七年にはウエルマン極地探検隊に従ふ。スピッツベルゲンのデーンズアイランドでは宿舍長として越冬したこともあり、一九〇七年九月には飛行船による第一回北極探検を企て、更に一九二三年九月には帆船サンタクルス號でスペイン領アフリカ、カナリイ島のテネリフから北米コネチカット州のニュー・ロンドンまでの間を二十六日間で渡航し、大西洋横斷の世界記録を作つてゐる。そのほか建築の方にも關係し、一九一六—七年にはニュー・ヨークのマンハッタンの建築局の技術部次長となり、一九二五—七年には、ニュー・ヨークのロンピアプリスピイテリアン病院の建築技師として活躍し、その後マルティン・モーター會社の副社長兼建築技師となる。なほ一九一一年にはコロンビア大學で「化學技師」の學位號を得、ロンドンのセブン・シイクラブの會員でもあつた。主なる著書は左の如し。

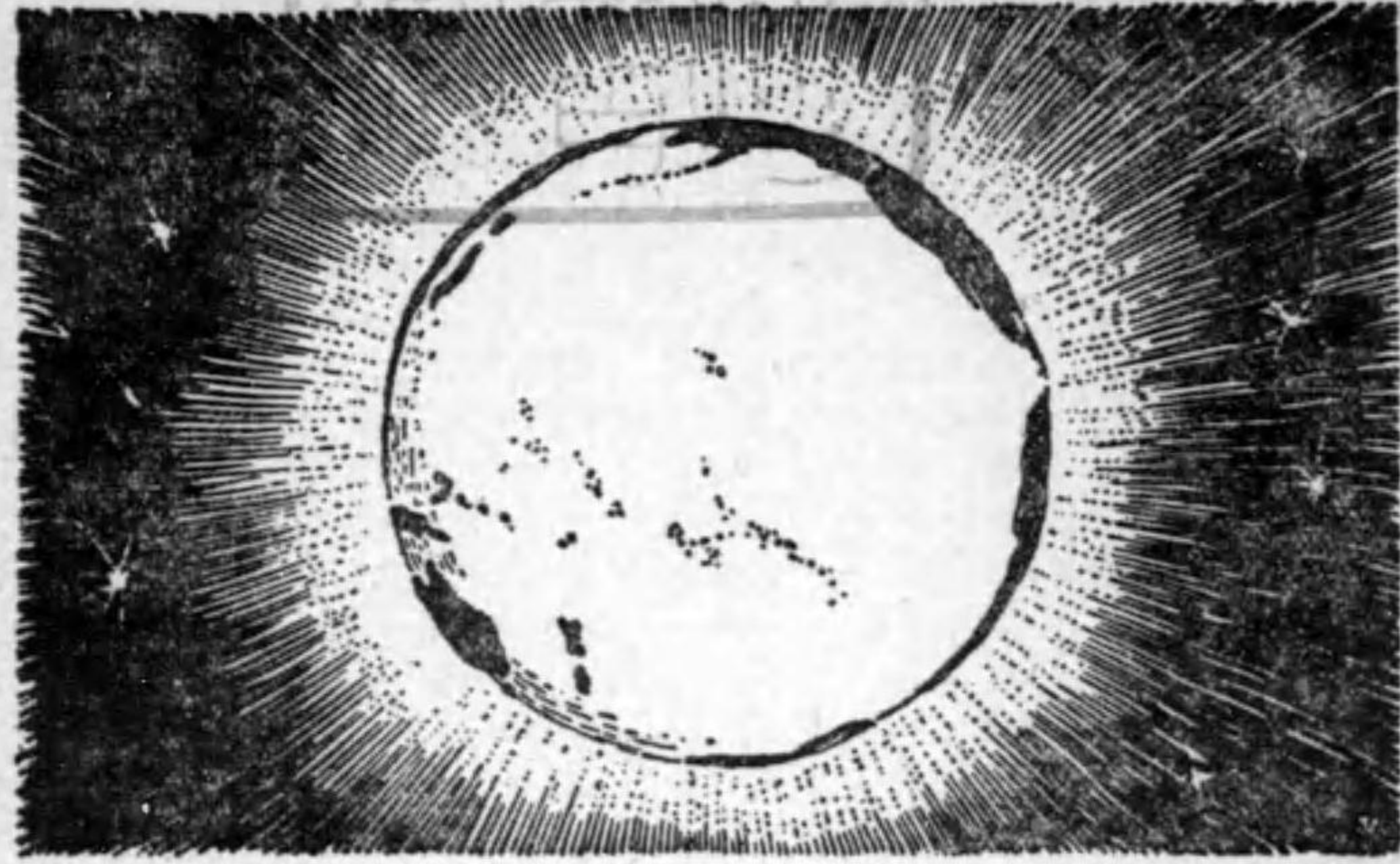
未知の海……………一
 バルボアの太平洋発見……………二〇
 偉大なる航海者マゼラン……………三三
 グアム島及び香料諸島……………六六
 スペインの海……………六六
 マニラガレオン船……………七六
 ドレークの登場……………一〇八
 サンタ・アナ・ノの捕獲……………一四一
 太平洋争覇戦……………一六二
 英雄アンソン……………一七九
 タヒチ島……………二二五
 稀代の探検家キャプテン・ジェームズ・クック……………二五九
 海豹船と捕鯨船……………三二〇
 アメリカの「キャプテン・クック」ウィルクス……………三三六

目次

日本の開國……………三六三
 太平洋周邊最後の開拓……………三九五

地圖

マゼラン太平洋航行圖……………三二—三頁
 フィリッピン及び香料諸島精圖……………四四—五頁
 (マゼランの航路及びその終焉の地)
 メンダニヤ及びキロス太平洋航行圖……………六六—七頁
 ドレーク太平洋航行圖……………一一四—五頁
 キャプテン・クック太平洋航行圖……………二六〇—一頁
 ハワイ諸島附タヒチ島クック船長第三回航海の順路……………三〇〇—一頁
 チャールス・ウィルクス大尉の太平洋航行圖……………三四—二頁



未知の海

太平洋は地球上最大の存在である。北の端から南の端まで、東の岸から西の岸まで、その全面積はたとひ寒帯地方と稱せられる部分を除いても、なほ世界の陸地面積を合計したより遙かに大きい。別言すれば、大西洋の二倍、アジア大陸よりも廣大な印度洋の三倍、實に地球表面積の三分の一を占めてゐるのである。然るに拘らず、不思議なことに、西洋の歴史は、最近までこの巨大な海に對して注意を逸して來た。歐洲人は、青史の上ではつい昨日のことに過ぎない。コロンブスの頃まで太平洋を知らなかつたのである。古代エチプトさへ、太平洋の遼々たる過去と比べれば、一瞬の昔のことに過ぎない。

太平洋が如何にして形成されたかは地球進化の上の一つの謎である。我々は大西洋の生成についてはほど推測し得る。アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ三大陸間に太古に存在してゐたアトランチス大陸が陥没し、跡に數千哩に亙る海が出来たのだといふ所謂アトランチス大陸埋没に關する神話も勿論知らないではないが、ドイツの有名な地質學者ウエゲナー (Wegener) の説の方がより合理的である。即ち太古においてはアメリカ、ヨーロッパ、アジアの全部を包含する一大大陸が存在してゐたのであるが、地球の冷却に伴ひ、地殻が割れ、南北アメリカ大陸は西方に移動したといふのである。その證據には、大西洋の地圖を瞥見すれば分る通り、兩大陸の兩側を接合して見ると、殆んどびつたりと合ふのである。この興味ある假説については、地理學者の間でも未だ論争が繰返されてをり、ウエゲナー自身はそれを證明せんとしてグリーンランドに赴き、その地で客死を遂げたのであるが、その後の長期間の觀察の結果は、大體においてグリーンランドは今なほ西方に移動しつゝありとのウエゲナーの豫言を裏書きしつゝあるやうである。今なほ假説ではあるが、大西洋を説明する合理的な説である。

然らば太平洋の生成については如何。地球の形成期に於て遠心力によりてか或は内部の爆發によりてか、一塊の物質が今日の太平洋に相當する部分だけでも離され、地球の衛星たる月になつたのだといふ説も唱へられて來たし、或はアトランチス大陸と對照させて今日の太平洋の中間に嘗つて存在してゐたムーア大陸が消失したのだと唱へる神祕論者も

ある。地質學の教へるところによれば太平洋と大西洋との間には多くの對應があり、双方ともその中央に火山脈が走つてゐることであるが太平洋の凹みは多くの火山の峯で四圍を取り巻かれ、海底に深い大峽谷が縦走してゐることを考へると、その半球が結局沈下して地球の冷却と共に生じた霧が水になり、現在の水面が出来たのだといふ説も成り立つが、しかし結局のところは分らない。

第一期若くはそれより後の氷河時代は、大陸の岩石にその痕跡を残したけれど、この時代の霧氷が海洋、特に太平洋と如何なる關係にあるかは明瞭でない。地理學者の推測によれば、大陸を蔽つてゐた氷帽が溶解して、その大部分の氷水が海に流れ込んだために海面の高さは一様に二百六十呎高まり、その結果、數代に亙る太陽の熱に温められて生物が繁茂してゐたと思はれる海岸一帯は、氾濫を起したとのことである。この時代の雨風雨、颶風の物凄さは、我々の想像を絶するものであつたに相違なく、氷が溶けて水の時代が來ると共に、月に起因する満潮は地球の大潮とも稱すべきほどの奔潮となり、その速力と其量とをもつて阿修羅の如く地球上の全大洋を席捲し、凡ゆるものを押し流して了つたと稱されてゐる。

現在の太平洋にしる、その他の海洋にしる、外觀上は原始時代の海と少しも異なるところはない。水の世界の外貌は萬古不易である。海洋のこの偉大なる永遠性をバイロンの詩に聞かう。

逆巻き打ち寄する紺青の大洋よ。

數萬の大船小舟が汝を征服せんと

企てたが、その努力も空しく、

陸地を破壊しつくした人間の力も、

荒れ狂ふ波打際までしか及び得ない。

誠に永遠なる海の眼から見れば、古代エジプトのピラミッドすらも、永き時の歩みにおける一泊旅行の一里塚位にしが見えないだらう。

ジョセフ・コンラッド (Joseph Conrad) は海の年齢につき最も明瞭に述べてゐる人であるが彼は曰く、

「春になつて大地が年若く見えると同じやうに、海も年若く見えることがあると断言し得る人はないだらう。海に對して理解と愛情とを以て接して來た我々には、海は恰かも底知れぬ海底からでも萬古の年數を湧きあがらせて來たかの如くに老けて見える。海を老けて見えさせるのは風のせみである。」と。

更にコンラッドの研究しあぐんだ末に吐いた次の言葉は、巧みに事物の眞を穿ち得てゐる。即ち「地球の年齢を知るためには暴れ狂つてゐる海を観るがよい。暗灰色の大海原や、微風にそよぐ波頭なみもと或はまた麻と亂れた白髪のやうに泡立ち騒ぐ荒海などを見てみると海は、艶のない、老いぼれた、前途に光明のない老人のやうな感じがするのみならず、生命そのものよりも更に昔から作られてゐたのではないかとさへ思はれるのである。」

太平洋とは正にかくの如きものである。太陽の光を受けた縹渺ひんまうたる大海原、——その起原は達々たる神祕の昔であるに拘らず、その發見たるやつい近頃のことであり、人類が嘗てその足跡を印したるや否や現在ですら審らかでない島もあるといふ状態であり、その縹渺たることは、島嶼の間或は船の航路を辿つて行つてすら、なほそれを横斷するに島及び船を見ざること數週間に及ぶこともあるほどである。太平洋こそは海神ネプチューンの跳梁の舞臺であり、俗人の迂散臭き眼を逃れてこの白髪の老爺おきな奴が隠遁するにふさはしき場所である。

歐洲人による發見以前の太平洋の航海者については單に想像を弄ぶ以外に方法はない。しかしながら、その起原につき研究家を一時憫ましたことのあるイースター島 (Easter Island) の珍奇なる彫像や、ポリネシア人の移住民、乃至は極東地方に傳はる傳説等を併せ考へると、コロンブスの頃より數世紀前に既に太平洋を横斷したものがあつたことは確實のやうである。しかし誰が、そして如何なる方法によつて横斷したかは遺憾ながら詳かでない。紀元前二百年前に支那海より漕ぎ出で、プーサン (Pu San) といふ陸地に到達し、百哩の距離に互つて海岸を探検したと稱せられる支那人の船乗りヘーリ (Hei Li) —— その名前は現代の支那語の發音法からは異國風なところがあるが —— についての物語もあり、彼の入港した灣ホンテー (Hong Tee) とはサンフランシスコ灣であらうといはれてはゐるものゝ、想像上の物語に過ぎない。

太平洋について歐洲人が最初に得た知識はマルコ・ポロ (Marco Polo) からである。彼は自分の訪ねたジバング即ち日本の東海岸に巨大なる海の存在してゐることを語つてゐるが彼の話はしかしかなり混沌としてゐる。彼はジバングは支那海 (Sea of China) にありそこには七千四百四十個の島々があるといつてゐるが彼のいつてゐるのは支那海に接してゐるフィリッピン群島のことではなからうか。また太平洋と支那海を間違へたのではないかと疑はれる。しかし彼が本當に日本に渡つたのであれば、古來遠洋航海に巧みな日本人のことであるから、日本人から東方に巨大なる海の存在することを恐らく學んだに違ひな

5。

しかしながら白人の知る遙か以前に、ポリネシア人——南太平洋 (South Sea) の全種族を含めてポリネシア人と呼ぶことにする——が太平洋に進出したことは疑ふ餘地がない。南太平洋の島々には數多くの移住民があるが、最初に移住して來たのは恐らくアジアからであらう。かれ等が航海に巧みなことは疑のないところであり、ド・ブーゲインヴィユ (De Bougainville) 譯註 一七六六—六九年にかけて世界一周したフランスの航海者(後出)の航海の時に、アントウルといふ一人の土人がオリオン座の肩に輝く星を指さしながら、あの星を便りに二日間航海を續けるならば、一行は必ず地味肥沃なる土地に到達するであらうし、その島には自分の友人達もゐると話したことがあつた。そしてブーゲインヴィユの一行は、その話に耳を傾けなかつたが彼は舵をとつてその方向へ進まうとした。

その土人はポリネシア人の丸木舟の方が白人の船より恐らくは早いだらうことを忘れてゐたため、二日で到達し得ると考へ違ひしたのであらう。土人の丸木舟は一種獨特の舟で、遠洋航海に用ひられるのは二隻の丸木舟を下駄のやうに組合せたものであり、大抵六十呎から八十呎位の長さがある。タヒチ島の戦闘用丸木舟は百人位の乗組員を收容し得るほどのものであり、ポリネシア人はこれらの舟に乗つて長い船旅を行つたのである。マオリ人を母として生れたペーター・バック博士 (Dr. Peter Buck) は南太平洋の移住民についての權威者であるが、彼はその地方の土人のある者は既に紀元十三世紀以前にマルケサス島 (Marquesas) よりベルーまで四千哩の航海をなし、今日南太平洋地方に廣く栽培されてゐる甘藷をベルーより持ち歸つてゐると唱へてゐるほどである。南太平洋地方に白人が到着した時には、既にその地に甘藷が栽培されてゐたし、當時において甘藷を持つて來得た所といへばベルー以外にはない筈である。

土人は、大體において貿易風や星座を頼りに航海したが、時として航海圖として有名な一種の地圖の如きものを用ひたこともあつた。その地圖は風の骨のやうなもので、細い織維で造つた紐で棒切れを結び合せて航路を示し、島や岩礁を現はすに貝殻を配してある。それを星または太陽の一定の方向に向けると、方角が分り、各季節における風の方向とか、潮流乃至は島々間の距離も自から分る極めて興味あるものである。

各島々はそれ／＼自己の航海圖を持つてゐた。ドイツ帝國海軍々人のウィンクラ

(Winkler) 大佐はかつてこれらの航海補助具を研究し、それらの用法を明らかならしめんとしたこともある。その他ポリネシア人は嵐の時碇泊するための錨や、潮流測定のための軽い錨をも用ひてゐたが、それらのものは十九世紀の中葉、アメリカ合衆國政府の派遣した太平洋探検隊が用ひたのと略同じ位に精巧なものであつた。しかも彼等は四、五週間分の食糧を携帯し、料理した食物を木の葉に包み、飲用水をも用意してゐた。そして老練なるポリネシア人の舟乗りが操る大帆走船は、今日の萬國ヨット競走に出場させても恐らく優勝するであらう位に速いものであつた。

従つて、海洋生活に巧みな種族が白人以前に島傳ひに太平洋を横断したとしても決して驚くに足りない。恐らく彼等はアジアからミクロネシアを通り、發展の中心地たるタヒチ島を経てソサイエティ群島に來たのであらう。そしてその移住の時期はキャプテン・クックの有名なる航海にさき立つこと千二百年前、即ち紀元五百年の頃と推定される。また今日のラトトンガン人は、その群島に到達した古代人種のうちの最後の人種たるタンギア人の子孫であり、タンギア人が移住したのは今を去る約二十六世代昔のことであるから、一世代を二十五年として計算すれば、紀元千二百五十年ごろのこととなる。或は更にラトトンガン人の祖先を、印度から移住して來たと歴史家が考へてゐるツ・テ・ガンギ・マラマ人 (Tu-te-gangi-marama) にまで遡るならば、その移住の時期は九十二世代前、即ち今日より二千五百年昔で、紀元前四百五十年頃となるが、バック博士はそんなに長い間のことを土人が記

憶してゐることが出來るとは聊か疑はしいと述べてゐる。

いづれにしても書かれた記録とてはないのであるから、最近の發見時代までの數世紀の間、太平洋で何が行はれつゝあつたかは全く一の謎である。しかし嘗つてのマゼランの一行や最近航海した人々が見た土人は、いづれも幸福な自由の民であつた。一部の人類學者が考へてゐるやうに、歐洲人の祖先はアジアから出たといふ説が正しいとすれば、歐洲人は同じくアジアに發祥した太平洋人種と太平洋において遭遇したのである。氣候の差により太平洋人種はその性格外觀において異つて來たのであるが、彼等の大部分は嘗つての太平洋探検家達が讚嘆したほど非常に聰明で、且つ優秀な外貌の所有者であつた。

太平洋とは正にかくの如き海であり、バルボアが山頂から始めてこの海を見て以來、相次いで探検した歐洲の先驅者等が出會つた未知の人種とは正にかくの如き人達であつた。



バルボアの太平洋発見

フロリダ地方発見に先立つ一年前のこと、スペインのクセレス生れの富裕な一武士が破産を宣告されたことがある。彼は名をバスコ・メネスデ・バルボア (Vasco Núñez de Balboa) とし、嘗てはコロンプスの最後の航海の跡を追ひインドの富を求める多くの人々と相携へて新大陸にも渡つた事のふる男であるが、今や執達吏や警察官から追廻される身の上となつた。彼は剣道の達人で、しかも怒りつばい剣士だといふ評判が高かつたため、執達吏等も手を出し兼ねてゐたが、一五一一年のこと、バルボアは「航海用食糧」とマークのついた桶の中にもぐり込み、桶もろともイスパニオラ (露註、カリビヤ諸島中の一島、キューバ島の東南にある) からニュー・スペイン

ン即ち新大陸行きの帆船に積み込まれた。

陸地が見えなくなつてから、帆船の船長のキャプテン・エルナンデス・デ・エンシスコ (Hernandez de Encisco) の前に丈の高い筋骨逞しい男が剣の鏗を鳴らしながら立ちはだかつた。それこそ、大膽なるバルボアである。そして「ある尊敬すべき僧正が余に向つて嘗て『ド・メネス・バルボアよ、汝こそは偉大なる事業を爲すやう神から使命を與へられてゐる男だ』と語つたことがある」と乗組員に對して大膽に宣告したところが、一同は歡呼の聲を以て彼を迎へた。

かくて世界で最も有名な密航者はダリエン (Darien 露註 中米カリビヤ海に面する一灣、パナマ及びコロンビアに圍まれる) に上陸したのである。上陸するや、大膽にして冒險心に富む野心家バルボアは、直ちにその廣大なる地域の支配に成功し、彼より二年前にオエダ (Ojeda) が建設したサンタ・マリア・デ・アンチガ (Santa Maria de Antigua) の街の廢墟を修繕した。そして移住者達から統治者に選ばれたバルボアは、コイバ (Coyba) の有力なる酋長の美しき娘と結婚し、酋長の部下を引きつれて近隣の土侯の軍を攻めた。そしてその轉戦の途中、戦利品として金の器と共に四千オンス金を没收したが、彼はその五分の一を國王フェルディナンドに、更に五分の一を自分のものに保留し、残りを平等に彼の部下のスペイン人に分ち與へた。

しかしその分配方法につき争がもち上つた。その時、財産をとり上げられて捕虜になつてゐたインディアンの土侯がそれを見て嘲笑して曰く、「一體君達はなんでそんなちつば

けなことで争つてゐるのだ。君達は家を捨て、他人の平和な土地を荒らしてまで黄金を探し求めてゐるが、それほどまでに黄金が欲しいのなら、君達がもう要らないと云ふほど澤山黄金のある地方を教へてやらう。」と。

そして西の方雲のかゝつた山嶺を遙かに指さしながら、「あの高い山々の彼方に、君達が渡つて来た海よりもつと廣い大きな海がある。その海には、君達の船と同じ位大きい、しかも帆と舵とを備へた船が通つてゐるが、あの山からその海に注いでゐる河には黄金が捨てるほどにある。その沿岸の人間共は黄金の器で飲食してゐる位で、そこに行けば黄金は君達スペイン人の間における鐵位の値打しかない」と語り續けた。

大きな海や船や土侯の話はバルボアの興味を惹いたが、中でも彼の冒險心に油をそゝいだのは、腐るほどあるといふ金のことであつた。彼はその海及び寶庫まで行くのは困難かどうか尋ねた。

インディアンは彼に警告して、「それは極めて困難で且つ危険な仕事である。有力な酋長共が全力をあげて君達に反抗するであらうし、食人種共も君達を襲つて喰つてしまふだらう。ドン・バルボアよ、この仕事を果すには、君が今引具してゐるやうな兵士が千人位必要である。彼方の海に住む酋長は私の長年の仇敵であるから、もし君が行く氣なら、私も私の部下を引きつれてお伴しよう」と答へた。

これがコロンブスの發見したインドの更に西に海があるといふことを歐洲人が聞いた

最初の言葉である。それまでは彼等はアジアの東邊インドの近くの大汗の國にゐるものとばかり思つてゐたのである。

バルボアは、測り知れない富と大發見といふ名譽が眼前に横はつてゐる事を聞かされて、くれた褒美として、インディアンの土侯に洗禮をしてやり、イエスといふ名を與へてやつた。彼の魂を救つてやる代りとして彼の援助を要求した譯である。そしてバルボアはグリーン灣のモスキト(Mosquito)海岸に引き歸して、大事業にとりかゝる準備に着手した。

彼は使者に黄金を持たせてイスパニオラに行かせ、そこで人と食糧とを求めさせたが、その使者の乗つた船はジャマイカ(譯註 イスパニオラの西にある島)に打ち上げられてしまつた。

そこでバルボアは、サント・ドミンゴ(Santo Domingo)の統治者ドン・ディエゴ・コロンブス(Don Diego Columbus)に書を送り、黄金のこと西の方の新しき大洋のことを知らせると同時に、それを新しく發見するため千人の人を調達して欲しいと頼んだ。そして國王用として別にとつてあつた五分の一の財産即ち一萬五千クラウンの黄金をフェルディナンド王に渡してくれるやう送り届けた。バルボアの従者達もスペインの債權者等にそれぞれ金を送つた。しかしながら、金の效目もなく、フェルディナンド王は殊のほかバルボアに對し御機嫌斜めで、一舉にして輝かしき功績でもあげない限り、王室の寵愛を取り戻すことは困難であつた。バルボアは最早猶豫しなかつた。部下のうちから最も勇猛果敢な者百九十八人を選び、それに一隊の土人の兵士と、一群の獵犬を引き具して六十哩の地峽横斷の壯

途に上つた。サンタ・マリヤ・アンチガを出發したのは一五一三年の九月一日のことである。

一行は一隻の帆船と九艘の丸木舟に乗つて行つたが、コイバで船を捨て、密林の中に分け入つた。絡み合つた密林に包まれた険しい山や、毒ガスを吐いてゐる沼また沼の低地。或る時は激流岩を嘔む大谿谷につき當つて後戻りせねばならぬこともあり、夜は夜で執拗に食ひ下つて来る蠻族に應戦せねばならなかつた。

カラガ (Quirigua) と稱する酋長の一隊との戦闘では六百人のインディアンが殺された。バルボアの部下は鎧を着て剣と槍をもつてゐたが、傷ついて倒れた土人は獵犬の餌食となつた。こんな辣猛な指揮官をその地方のインディアンはまだ嘗つて見たことがなかつた。毎日見る地理學上の收穫や話に聞いた賈の山の誘惑が彼をせきたてた。野心や貪慾や名譽慾で頭がのぼせ上つたバルボアは、負傷した部下を後に残して、魔の地帯を遮二無二前進した。前方に横はつてゐる青々とした山は涼しさうであつたが、それを眼前に見ながら熱病で倒れる者も多かつた。しかし高地まで達した生存者は冷たい空氣で再び元氣を回復した。かゝる難行軍のため最後の丘まで到達し得た者は僅かに六十七人、しかもその大部分はスペイン人で、土人は大抵殺されたか、そうでないものはこの剛膽な主人に恐れをなして脱走してしまつた。

最後の上り坂を越す前に一同はキャンプを張つて、獵犬のほかは皆眠りについた。明く

れば九月二十六日、未明にキャンプを起き出でた一行は最後の坂道を登りつめて、あと禿山を残す處まで前進した。

バルボアは一同に休息を命じ、自身は疲れてはゐたが、單身頂上まで登つた。その時昇る旭日を受けて金色に輝く廣大なる大洋が彼の眼に映つた。彼は部下を呼びつゝ、敬虔に膝まづき、神に感謝を捧げたのである。部下は夜明けの西空を凝視しつゝ、彼の周りに集つた。既に高く上つた太陽を彼等は額に手をかざして仰ぎながら驚喜の叫びを上げた。バルボアは生存者及び獵犬を前にして一場の演説を始めた。「諸君、我々の熱烈な渴望の的であつた榮光あるあの光景を見給へ。さあ祈禱しよう。」

一同は膝まづき、十字を切つて感謝の祈りを捧げた。バルボアは續けて曰く、「神は今後我々を導いてこの新に發見された陸と海の征服を助け給ふであらう。未だ嘗つて一人のキリスト教徒も聖書の教へを弘めたことのないこの地方の征服を。」

聖なる務めのために神がその生命を守り給ふた一人の僧侶の唱ふ讚美歌につれて、日に焼けて瘠せ衰へ傷痕だらけの一同は心からこれに和するのであつた。

引きつゞき獻身を誓ふ部下に取り巻かれてバルボアは「神の御恵により諸君は嘗つて西インド諸島に來たスペイン人達の誰よりも金持になるであらう」と續けていつた。

「フェルナンド國王萬歳、イスパニア萬歳、バルボア萬歳」一同は感激してこれに答へた。それからバルボアは、この大海島嶼並びにその四邊の岸一帯をカステイラ (譯註、スペインの

一王侯領の名の領主の名において領有する旨を宣し、一同にその證人たることを要求した。遠征隊の隊員達は證人としてこのことを記録し、その終りに六十七人の名を署名した。バルボアは木を切り倒して十字形に組合せ、それを彼が初めて大海を見た場所に打ち立て、その横に標石を積み重ねた。そして周囲の木にフェルディナンド國王及びファナ王妃の名を彫りつけた。

バルボアはキャンプを張つて一日を休息させておき、その間にフロンゾ・マルティンデベイト (Alonso Martin de Beito) に一隊を率ゐて黄金色の海岸に降る道を發見して來るやう命じた。それより二日の後偵察隊の一行は海に着いたが、その時潮が驚くべき速さを以て満ちて來たので、マルティン隊長は砂濱に引きあげられてゐた丸木舟の一隻に飛び乗つた。歐洲人が新大洋に乗り出したのはこの時をもつて最初とする。

マルチンが歸つて來るや、バルボアは一同を率ゐて海岸に降りた。その時もまた、くち潮がさして來て、彼等が休息してゐた場所を一面の水溜りとしてしまつた。恰も太平洋が一同に歓迎の挨拶を述べるかのやうに。

英雄バルボアはその時土人と戦ふために鎧に身を固め、劔と楯を持つてゐたが、カステイラ及びリオンの武器で飾られ、マリアとキリストとの繪の書かれた絹の旗を手にとりながら、海水中に膝まで浸つて、身を以つてこの大洋を領有する旨宣言した。パナマ灣から吹きつける温い南風に向つて、この發見者は歴史上最大の領有宣言を行つたのである。

「カステイラ、レオン、アラゴンの主權者たるドン・フェルディナンド國王及びドン・ファナ王妃萬歳!!」

海岸の方からも萬歳の聲がこれに和した。熱した聲で彼の宣言は續く。「これらの海陸岸港並に南方及びそれに接続するすべての諸島、これら一切のものは國王及び王妃の名において余の領有に歸したり。しかもこれら一切のものに關係をもつてゐる王國及び地方——如何なる方法によるかを問はず、如何なる資格によるかを問はず、そしてまた過去、現在、未來を問はず、これら一切のものに關係をもつてゐる一切の王國及び地方は、無抵抗裡に余の領有に歸せり。もし將來、キリスト教徒たると異教徒たるとを問はず、他國の國王或は武將が法、宗教、その他の力により、これら海陸に對し所有權を主張することあらば、余は直ちにカステイラ領主の名においてそれに應戰するであらう。南の極から北の極に至るこのインディ地方の島嶼や大地や海洋は赤道の南北を問はず、そしてまた南北兩回歸線の内外を問はず、すべてカステイラ領主の所有なり、——永久に、世界のつゞく限り、人類審判の最後の日の至るまで!!」

岸に上つたバルボアは萬歳の聲で取り圍まれた。彼の顔は大事業完成の喜びで眞赤に燃えてゐた。

證人として一同は羊皮紙に法律用語で事の顛末を書き誌し、それに再び署名した。彼等は水をなめて見たがそれは鹽辛かつた。更に一同は海邊に聳立する巨木に十字を刻み込

んだ。バルボアは一撃の下に枝を切りとり、それをトロファイとして掲げ、部下に引き上げを命じた。

時恰も彼岸の頃に當り、インディアンどもは嵐の季節だと警告したが、スペイン人達は、そこに捨て、あつた丸木舟に乗つて海に乗り出した。果然海は荒れ出し、彼等の舟はある低い島に押し流された。夜になると潮が満ちて来て、腰の邊まで水浸しになつた。明方、潮が引くと共に彼等は苦心慘憺して陸地に歸りついた。

しかし、その地方の酋長を相次いで征伐して見たが、彼等は殆ど黄金を持たなかつた。そこでバルボアは再び山を越えて引き返した。グリーン河に歸りついたのは一五一四年一月十九日である。今やバルボアは歴史的發見を完成し、未知の大洋を白日の下に齎らしたのみならず、地球の半分をスペイン領としたのである。

一五一三年九月二十六日、正にこの日こそは大洋即ち未知の半球の端から南西に向つて擴がる南太平洋を歐洲人が初めて發見した日として歴史に深く刻みこまれた。バルボアは彼の發見のもつ深い歴史的意義を幾分見透してゐたに違ひない。古代、暗黒時代、中世、ルネッサンスを通じて、歐洲人の争つた世界は地球の半分に過ぎなかつた。バルボアの見た水平線も、他の小さな海のそれと全く同じやうにしか見えなかつたとはいへ、彼の眼前遙か西に擴がつてゐる荒海の中から、何か巨大なものが生じて来るやうに思へたのである。

大西洋發見の時期については何等の記録がない。また古代エチプト人なり支那人なり

乃至は古代の海洋民族——恐らくはフェニキア人でもあらう——なりが太古において印度洋を最初に見た時の経緯についても吾人は何も知らない。北極海の發見についてもスカンディナヴィアの漠然たる傳説以上に詳しいことは判らないし、南極洋もフランシス・ドレークの發見と稱してよいやうなもの、本當に發見したのは古代コマルゴの無名の船であつたらしい。しかし地球上最大の海たる太平洋に關しては、その發見者は酒吞で野心家で貪慾な騎士バスコ・ヌネス・バルボアであることは疑ひないところである。

國王フェルディナンドはバルボアを必ずしも愛してはゐなかつたが、それでも彼に南太平洋の支配者(Adelantado)の稱號を與へ、パナマ及びコイバの領主の地位を授けた。寶の源を發見したバルボアが、巨大な物質的富を得たことは茲にいふまでもなからう。バルボアも豪膽な男であつたが、彼の部下も皆、大將を見習つたし、彼の部將等も一筋縄で行かぬ連中であつたので、皆それ／＼においてインディアンの黄金を掠奪して富を築いた。

その後暫らくするうちに本國スペインにおいて幼帝チャールス一世が即位したといふ知らせが風の便りでインド(譯註、西インド諸島地方のこと)にも分つて來た。グラナダを征服し、モール人を撃破し、カステイラにおいてはフェルディナンド五世と稱され、アラゴン及びシビリーにおいてはフェルディナンド二世、ナポリにおいては同じく三世と稱せられたコロンブス時代最大の君主、強毅英邁にして且つ貪慾なれども、新大陸發見時代における世界最大の帝國建設者だつたフェルディナンド老帝も遂に死んだ。時正に一五一六年、バルボア

の發見並に歴史的宣言の年より四年目のことである。しかしカステイラ領の首都バラドリド (Valladolid) ではバルボアが海の彼方で巨萬の富を貯へ、その勢力も日増に盛になるといふ噂が擴がり出し、幼帝チャールス一世及びその側近者の耳にも達した。

神がバルボアを嫉んだのであらうか。彼は餘りに長く生き過ぎた。バルボアの勢力を恐れた王は彼をダリエンの領主ペドラーリアス・ダビラ (Pedrarias Davila) の支配下に移したのみに止まらず、チャールス一世の即位と共にバルボア逮捕の勅令がペドラーリアスの許に届いた。

釵を振つて暴行を働き、女を蓄へて放蕩に耽つてゐたこの大發見者及びその部將共は反逆罪の廉で、何等の警告もなしに足枷くわをはめられ、領主の指圖により町奉行から有罪の判決を受けた。勅令に忠實な、ペドラーリアスは王領纂奪者としてバルボア及び部將達に死刑を宣したのである。

斬首の執行は直ちにダリエンに近い町の四辻で行はれた。一五一七年、チャールス一世治世最初の年のことである。ダリエンの領主は斬首臺から十二歩と離れてゐない所にある小屋の葦の間から死刑執行を覗いてゐた。バルボアが非常に大きな勢力を持つてゐたので、民衆の叛亂が起りはせぬかと心配したのである。四人の部將も相次いで熱帯特有の夕暮を仰ぎながら打首された。

ペドラーリアス・ダビラは國王の名においてバルボアの財産を沒收し、彼の首は柵に突刺し

て曝し首にするやう命じた。

大發見の完成を見届けた運命の女神は、その功業の終末に終止符を打つことを忘れなかつたのである。



偉大なる航海者マゼラン

世界歴史の繪巻物を繰展げて見ても、世界最大の海の横斷の物語ほど英雄的な、しかも光彩に満ちた話はない。バルボアの太平洋發見後更にこれを征服せんとすの決意をもつた男が現はれて来るのは極めて當然のことであらう。経度も明らかでない恐ろしき未知の海を、大膽にも航海せんとした企てこそ、マゼラン（フェルナード・デ・マガラエス）の世界周航物語中の華である。それに比すればコロンブスの航海の如きは一些事に過ぎない。

マゼランは一四八〇年頃ポルトガル人を両親として生れ、早くから海で育ち、有名な遠洋航海にも参加した經驗を數多くもつてゐた。一五一五年に世界一周したいと彼は申出でたの

であるが、ポルトガル國王エマヌエルは、その申出を却けた。マゼランは世界一周の航路があるといふことは知らなかつたが、バルボアの發見のニュースは聞いたに違ひない。偉大な船乗りである彼は、アフリカを廻る道がある以上、それと同じやうにバルボアが上陸した大陸を廻れば、バルボアの發見した大洋に到達出来ないはずはないと考へた。本國で容れられなかつたマゼランはスペインに行き、チャールス一世の家來となつた。チャールスはエマヌエルよりも理解をもつてゐて、彼にトリニダダ三位一體號（Trinidada 三位一體號）サンアントニオ號（San Antonio）コンセプション號（Concepcion 受胎號）ヴィトリア號（Victoria 勝利號）サンチャゴ號（Santiago 聖ヤコブ號）の五艘の船からなる一艦隊を與へた。しかしそれらは一、二番大きなものでも百十噸位の小船であり、長途の航海に堪へない如き代物であつたので、マゼランはこれに改造を施した。そして一五一九年九月二十日（火曜日）サン・ルカル（San Lúcar de Barrameda、スペイン南西海岸にある町）を出帆して世界最大の航海に乗り出したのである。

しかしマゼランの部下は出帆後幾許もなくして彼の命に反抗しだした。出帆後六ヶ月にして南米の海岸の南方の沖に到達した時には、や一、二の船は食糧の不足から、命令に違反して勝手な行動をとつたので、それを追掛けるなどの活劇があつた。行けども行けども西方へ通ずる海峡は見當らず、乗組員は飢えと寒さに疲れ切つた。サンアントニオ號、コンセプション號、ヴィトリア號の三船は叛亂を起したので、マゼランはその首謀者を刺し殺して暴徒を鎮壓した。船の修繕をしてゐる時にバタゴン人と呼ばれる土人——マゼランはこ

れを長足人と呼んだ——の船が隊を組んで現はれたので、それを捕獲した。とかくするうちに冬が来たので、一行は大陸のとある灣で冬籠りした後更に南下し一五二〇年十月二十一日(聖ウルスラ日)には西のかた地平線に横がつてゐる廣い海峡に到達した。岬は「一萬一千人の處女の岬」(Cape of the Eleven Thousand Virgins)と命名され、海峡には「聖徒海峡」(Channel of the Saints)と云ふ名が與へられた。しかし現在ではその海峡はマゼラン海峡と呼ばれてゐる。また一行はこれらの地方の上空に漂よつてゐる星雲をマゼラン星雲と呼んだ。

フェルディナンド・マゼランがこのやうにして初めて太平洋を見た時、彼は齡四十歳であつた。彼は元來サンチャゴ及び聖ゼームス教會の騎士であり、傲慢な指揮官であつた。嘗つて傷を受けたことがあつて少し跛引きであるが、中背の頑丈な體格をしてをり、眼はドス黒く、黒い髭には所々灰色が交つてゐた。舉措外貌飽くまで舟乗りらしかつた。二隻の舟は脱走して歸國したり、難破したりしたため、残りのトリニダダ號、コンセプション號、ヴィトリア號の三隻を率ゐてティエラデルフエゴ島(譯註、マゼラン海峡を隔て、南米大陸に對してゐる島)の西方の岬を廻つたのは實に一五二〇年十一月二十八日のことである。歐洲人として太平洋に乗り入れた最初の人である。

未知のこの海の踏破の偉業については學者達によつて多くの物語が數世紀の間書かれて來た。そのため反つて眞實のことが臆になり、大略だけしか分らなくなつた。現在まで殘つてゐる當時の記録のうちで、ヴィセンサ(Vicenza)の貴族にしてロードス島の騎士であつたアントニオ・ピガフエッタ(Antonio Pigafetta)の日記の拔萃は有名ではあるが、大洋横斷の超人的な苦勞については餘り觸れてない。マゼランの水先案内長であつたフランシスコ・アルボのは舟乗りにふさはしい簡単な記録であるが、觀象儀で太陽の高さを計つて得た緯度や、航路や、日々行程等を記録したものである。想像以上に正確なこの航海日誌により、マゼラン艦隊の通つた航路やその經過等も今日に傳へられてゐるのである。

彼等の測つた緯度は正確であつたが、経度は明瞭でない。マゼランの持つてゐた地圖は横切つた大洋の距離について正確な記録を缺いてゐる。一萬哩の海が横はつてゐたのであるが、マゼラン及びアルボは自己の測定器により少くとも一萬二千哩位西方へ横斷しただらうと計算した。南北については、南はデセアド岬、即ち南緯五十度まで、北は北緯十度までの間で數回赤道を横切りながら進んで行つたのであるが、運命の女神のいたづらからか不思議にも多數の島を見逃してしまつた。

マゼラン自身の日記が消失したため、彼等一同を襲つた災難とか、マゼランの内心の苦慮とか、その計畫等については皆目分らない。マゼランは太平洋横斷の前に既に死の喜望峰を四度も往復したことがあり、モルッカス群島にも渡つたことがあるので、ポルトガル領インドのことや、その地の経度のこととも大體知つてゐた。従つてデセアド岬についても、その大略の経度は計算して知つてゐたはずである。また當時有數の地理學者であつた彼は、地

球の大圖についても大體のことは知つてゐた。それ故に、彼が南太平洋横斷の手筈を定めた時にも、その廣大さについても、決して見くびつてゐた譯ではなかつた。他の人はどう考へてゐたにしろ、少くともマゼランだけは彼の事業の如何に雄大なるものであるかを諒解してゐた。彼は充分熟慮を重ねた上で最上の時機を選んだのであつた。

ティエラデルフエゴを出發した日の夕方、灰色の積雲のうちに太陽が沈むと同時に、一陣の疾風が南西から吹いて來た。トリニダダ號を先頭とする一行の船は、小さな帆と斜檣しか持たなかつたが、左舷の帆索で強風に調子を合せようと努力した。白い髭をくねらせながら船の兩側に押し寄せた潮は、前甲板に躍り込みながら、中部甲板から瀧の如く流れ込んだ。夜中いつ岩や陸地が暗黒の前面に飛び出して來るかも知らない惧があつたため、錨は船首に縛りつけてあつた。マゼラン隊長、各船の船長、水先案内人や、その他の主だつた人々は細心の注意を拂つて前方を監視してゐた。これらの人々が卓越した舟乗りであることは、岩礁だらけの未知の「聖徒海峡」を通過し得たことにより明らかである。一行の船のうちで脱走した船はあるが、暗礁に乗り上げたり錨をとられたりした船は一隻もなかつた。それ以來既に數世紀を経てゐるが、マゼラン海峡を通過する航海者達で、これらマゼランの一行が如何に卓越した航海術を持つてゐたかに感嘆しない人は少いであらう。

この大膽な遠洋航海の冒険について、歴史家らは、おきまりの遭難談を繰返すだけで、指揮

者や船員等の行動については明白に分つてゐることすら見落してゐることが多い。残存してゐる三艘に積込んであつた最初の貯藏品は、サンルカル出發以來の十四ヶ月間の長途の旅行で費消し盡されたが、各船に分けて積まれてあつた航海用具は大部分そのまゝであつた。ヌニョガルシア(Nunyo Garcia)の用意してゐた羊皮紙の地圖や、羊皮紙に書いた航海案内書は、濕氣や乾かし過ぎのために破損し盡し、航路についても殆ど役に立たなかつた。彼等の前途に横はつてゐるインド、モルッカス等の東方諸島や、或は古代日本の海岸等についての記載も大部分信頼がおけなかつた。日本の海岸線についても、當時の製圖家はマルコ・ポロやその部下等の書いた以上に殆ど何等の知識も持たなかつた。彼等は殆ど舟乗でもなければ航海専門家でもなかつたから、それも止むを得ないことである。

マゼランや部下の水先案内人は磁針の偏倚についても知つてゐたし、晴れた日には毎正午、大きな羅針盤上に磁針が投ずる太陽の影を測定することも缺かさなかつた。羅針盤は少くとも一つだけは常に舵の前方の羅針箱の中に保管されてゐたし、豫備品として一、二個は持つて行かれた。磁針は屢々狂ひを生じたため天然磁石で摩擦して磁力を強めた。マゼラン自身は約三十個の特別製の鐵針或は鐵棒を携帯してゐたらしい。艦隊はまた水時計をもつてゐたし、各船もカディス(Cadiz、譯註、スペイン南西岸、サンルカルの東南方にあり)出發以來ベルナルディノ・デル・カステイロ(Bernaldino del Castillo)の提供した時計を少くとも一つ宛は持つてゐた。ベルナルディノ・デル・カステイロといふ名が製作者の名であるか、それとも昔

の船商の名であるかは詳でないが恐らくその時計はバケツ位の大きさの大時計で餘り信用のおけないものであつたと思はれる。昔も變らず正確なのは太陽で、彼等はこれによつて時間を測つたのである。

マゼランはまた地球儀をも携帯してゐた。恐らくマルチン・ベハイム (Martin Behaim) の作つた有名な地球儀を模したものであつたらう。彼は地球が球形であるといふことの貴重な證明材料を入れる皮の箱を三百四十マラヴェディ (譯註、一マラヴェディは約六圓) も出してセヴィラ出發前に購つてゐる。

距離測定器については全然記録がない。しかし驚くべきほど正確な勘の持主である當時の海員達は、勘で距離を測つた。その單位はリーグで、一リーグは通例三乃至四哩位であつたやうである。

曖昧である當時の事情をよく調べて見ると、彼等の航海術は極めて簡單なものであつたことが分る。往時の天體觀測器は「度」及び更に細分して「分」までも目盛をつけた大きな圓環であつたが、マゼランの持つてゐたものはマルチン・ベハイムの製作にかゝるものといはれ、青銅及び木材で作つた最も精巧なものであつた。そしてそれらは輪によつて釣り下げられ、軸のある指方規で太陽の光線を把へ、周邊をなしてゐる圓環により太陽の高度と天頂の角度を測るやうになつてゐた。

赤道のことを當時晝夜平分線と呼んでゐたが、その上下いづれの方にあるかを問はず

太陽の傾斜度は傾斜盤により測定された。察するに當時一般に用ひられた傾斜度表は、ドイツのニュルンベルグの天文学者ヨハン・ミュラー (Johann Müller) が命名したレギオモンタナス製のものであつたらしい。赤道の北或は南における太陽の角度で測つた距離は非常に正確なものであり、太陽の軌道に對する地球の傾斜度もそれにより諒解せられた。コペルニクスはマゼランより三十歳ほど若い、略同時代の人であつた。しかしコペルニクスの著書「天體運行論」(De Revolutionibus Orbium) が法王バウル三世に獻呈されたのは十六世紀の四十年代のことであり、マゼランの歴史的航海よりすつと後のことである。

彼等の航海術は全く紀元一世紀頃のアラビア人が用ひた天體觀測儀に依存してゐた。

紀元後十四世紀にチオフレイ・チョウサー (Geoffrey Chaucer 譯註、一三四〇年ロンドンに生れ、一四〇〇年同地に死す。宮廷に仕へ、或る時は使節としてゼノアに行き、ある時はロンドン塔の僧正に任ぜらる。英文學上重要な人物で著書「カンタベリー物語」は有名なり。) はその用法を明快に説明してゐる。即ち「天體觀測儀の輪を右の親指にかけ、太陽の光線を自分の左側に受ける様に立つ。そして太陽の光線がルーウエルの兩端の孔を通るやうになるまでルーウエルを上下に動かせ、その時のルーウエルとエストライン上の小十字とのなす角を読みとれば、それが太陽の高度である」と。かやうにして或る時は速度と距離とを計り、羅針盤の度盛を読みながら、また或る時は見なれない南十字星が毎夜低く沈み行くのを望遠鏡で見守りながら、また或る時は彼等の神である星を仰いでコースと距離を計りながら、唯一つ残つた距離測定器を持つてゐるフラ

ンシスコナルボの水先案内で北へ北へと進んだ。マゼランは荒海から早く脱出することを考へて、最初のうちは殆ど西へは進まなかつたのである。

十一月二十九日の朝、艦隊は海峡を通過する時別れて来た荒涼たる陸地が既に見えなくなる地帯まで到達してゐた。怒濤は彼等の足下でくだけてゐた。夜明けと共に満船の帆を張るやうとの信號が出された。捲かれてゐた中樞帆は一面に擱けられて高く揚げられ舵手は夜明けの當直 (La Diana) のものと代り二人になつた。旗艦を先頭にして三角形をなして進んだが、風が強かつたので、小さな僚船は旗艦の船尾にくゞりつけて行つた。船はお互にくつつき合つて進み、夜の間はトリニダダ號の後甲板で焚火をたいて僚船への目印にした。

船員や士官らが目前の危険に對してどんな感情をもつてゐたかは知るよしもないが、ともかく船の日課は嚴重を極め、甲板洗ひ、極く僅かな朝食の準備等で、感情をもつ暇もなかつた。木材は澤山積込んでゐたので、厨房からはいつも煙が出てゐたし、魚或はペンギンのソップや、僅かながらもビスケットが分け與へられたが、スペインから持つて来たうまい食糧は殆ど残つてゐなかつた。五百八個の壘に詰めた無花果の實やチーズ或はクセルス産の葡萄酒も殆どなくなり、四百二十樽あつた普通の葡萄酒等も蒸發してしまひ幾許もなかつた。スペイン産のアンチョウビー(鰯類の魚)も残つてなかつたが、鰻河 (River of Sardis) で取つた魚は鹽漬にして保存されてゐた。マゼラン隊長は食糧及び飲用水の不足を

知つてゐたので、大洋横斷の途中で失敗する危険性も充分あると思つてゐた。

西の方に向けて新大陸の海岸線が走つてゐると考へてゐた彼等は、右舷の方に陸地が見えなくなつた時には驚いた。風が後方から吹きつけるので、北に進路をとつた。船は横板を捲いて、海豚のやうに浪に浮き沈みして進んだ。溫度が少し昇つたやうに感じたが、レオミニール(譯註、烈氏)の寒暖計の發明はそれより一世紀後のことであり、彼等は正確な溫度を計る術をもたなかつた。しかし確に暖くなり、風がおだやかになつたので、進路を北東にかへた。南米大陸はどうなつてゐたのか。彼等は既にそれを廻つてゐたのであるが、今ある處は何處だつたらうか。

十二月十六日の朝、彼等は再び陸地を見た。東の方に鯨の齒のやうにきり立つてゐる青色の大山脈の彼方に太陽が登りはじめた。歐洲人としてはじめて仰ぎ見るその緯度邊りのアメリカの西海岸が殆ど南北に一直線に走つてゐる。太陽が登るにつれ、氷や雪が輝き出した。段々貯藏品が少くなる上に、前途に遙か廣大なる大洋を控へてゐることを考へてマゼランは北西に進路を變へるやう命令した。はじめに南部アンデス海岸を見たのは彼だと主張する歴史家もないではないが、この北に走つてゐる海岸について彼が何と彼自身の航海日誌に書いたか、そしてまたそれは何であつたかは唯想像してみるよりほかに方法がない。

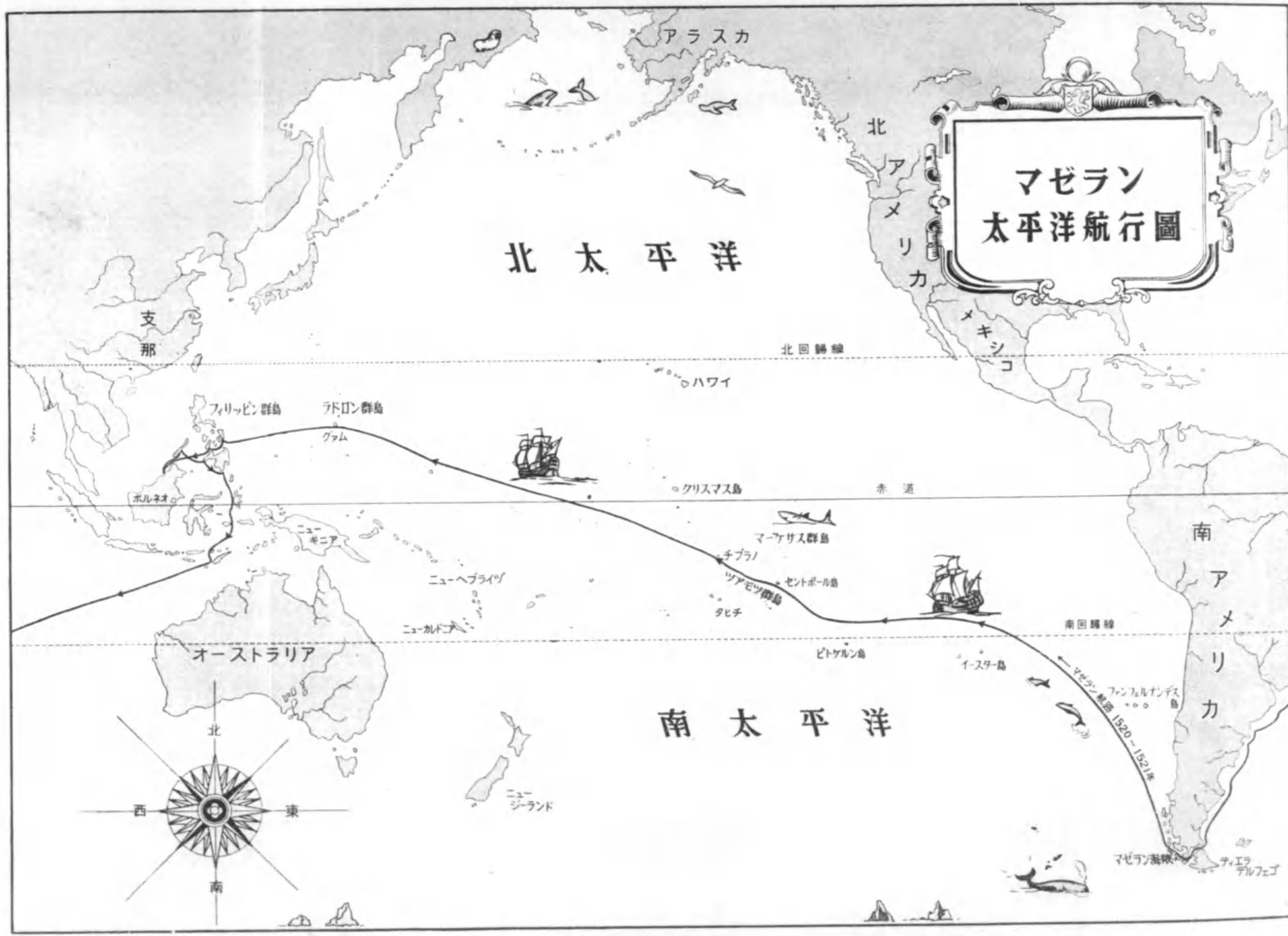
しかしマゼランがもう少し西の方に進路を辿つたか、或は風向きがもう少し變つてゐたら、彼

は必ずや海拔四千呎のファンフェルナンデス群島(Juan Fernandez 譯註、東南太平洋上、チリ沖の島)を發見したに違ひない。そしてこの群島さへ發見してゐれば、樹木や水は豊富にあり、野菜や動植物にも富み、且つ投錨するにも便利で安全なこの群島は、必ずや彼を助けること多大なものがあつたであらう。彼は結局その島の北東百哩位の處を——太平洋の幅一萬二千哩に比べれば誠に剃刀の齒位の距離に過ぎない——その島の見えるか見えない位の所を通過した譯である。マゼランに遡ること四十三年、一五六三年にファンフェルナンデスにより主島二つよりなるこの群島は發見された。

南緯三十四度の線の少し北の處で、幸にも「南の海」(Mare del Sur)の空模様が變つて來た。南東の風が絶え間なく吹き、微風吹き渡る晝と、平和なピロロドのやうな星夜が幾晝夜も続いた。見慣れぬ南十字星が段々沈みはじめると、流星が火の槍のやうに天穹を走る。満面に張つた大小の帆に、飛魚——それを彼等は海燕と呼んだ——が飛び込んで來た。

船は船尾に釣針の代りに索網を繋いで進んだが、獲物は少かつた。索網の上に鰭を結んでおいたが、陸地から餘りに離れた大海の眞只中まで出かけて來る魚は少いのであらう。大きな怪物が盛に水を噴いてゐたが、當時は未だ海洋捕鯨時代ではなかつた。海豚は船の近くまでからかひに來たが、直ぐ逃げ去つた。太陽の降りそゞぐ晝と無言の星の輝く平和な夜が幾日も續いたが、一片の陸地すら見えなかつた。海鳥がまだ飛んでゐるので、彼等は希望を捨てなかつた。——海鳥の巢の珊瑚礁が何處かにあるに相違ない。ツアモツ群島





に張つた大小の帆に、飛魚——それを彼等は海燕と呼んだ——が飛び込んで来た。船は船尾に釣針の代りに索網を繋いで進んだが、獲物は少かつた。索網の上に鰯を結んでおいたが、陸地から餘りに離れた大海の眞只中まで出かけて来る魚は少いのであらう。大きな怪物が盛に水を噴いてゐたが、當時は未だ海洋捕鯨時代ではなかつた。海豚は船の近くまでからかひに來たが、直ぐ逃げ去つた。太陽の降りそゞぐ晝と無言の星の輝く平和な夜が幾日も續いたが、一片の陸地すら見えなかつた。海鳥がまだ飛んでゐるので彼等は希望を捨てなかつた。——海鳥の巢の珊瑚礁が何處かにあるに相違ない。ツアモツ群島

(Tuamotu) 即ち低群島 (Low Archipelago) の直ぐ北を通つたが遂にそれを発見しそこなつた。椰子樹で縁とられた無数の環礁 (環状珊瑚礁) からなるこれらの群島は直ぐ後に幸運なる後継者らにより発見されたが、マゼランの一行は廣漠たる海のほかは何も見出し得なかつたのである。殆ど嵐らしい嵐もない静かな海を、いつ果てるともなく航海し続けながら、マゼランはこの廣漠たる「南の海」を太平洋と名付けた。海や陸地や岬や島に對する彼の命名の巧なことは遺憾なく彼の天分を證明するものであるが、マゼランの付けたこれらの名前は、現在までも生き残つて來たし、今後も永久に残るであらう。——地圖とそれを見る人間が存在する限り永久に。

しかし程なく恐ろしい恐怖感が一同に湧き上つて來た。依然として静かな風に包まれて青波は漣を打つてゐたが、空と波のほかには何も見えない日が幾日も幾日も果しなく續いた。温度は益々高まり、海に映る月影が眞丸になり再びかけて行くほか何等の變化もなかつた。

小さなすんぐりした船上の焼けつくやうな生活が既に二ヶ月も續いてゐた。荷物一杯積んだ甲板は地獄の釜のやうに見え、船底からは妖氣が立ち昇つて來た。その上、板の継目から洩れて來る水のために益々濕つて來た。葬式の鐘のやうに聞える古ぼけたポンプの疲れ切つた單調な音や、風の合間に死人のやうに垂れ下つた帆等は益々彼等の恐怖心を強

め、遠方に盛り上る雷雲は氣を焦だたせるばかりであつた。龍巻も見えたり、帆で雨水を受止めたことも數回あつた。もし雨が降らなかつたら彼等は渴のため死んでしまつたかも知れない。

ピガフェッタはマゼランに就いて書いた中で彼を稱讚して曰く、「マゼランを飾る幾つかの美德のうちでも最も賞讃に値することは、彼が如何なる不幸のうちにあつても常に毅然たる態度を失はなかつたことである。彼位飢えの苦痛を堪へ忍んだ人はほかにない」と。

しかし飢えを忍んだのはマゼランだけではない。上は隊長から下は最年少者のファン・デ・スピレタ(Juan de Zubiate)に至るまで全員が「グロッキーになつた」のである。しかもこれら船員は大部分二十歳そこそこの青年で食ひたい盛りである。

落凹んだ眼、既に幾度か死地に直面して衰弱しきつた眼は、飢と渴のために狂つたやうに燃えてゐた。體はむくみ、脚や脚首は脹れ、齒は弛み、齒ぐきからは血が出て來た。既に虱のわいてゐる頭や體には潰瘍が出來た。手足の指は朽木のやうになり、彼等の吐く息はドブのやうに臭く、鹽水で行水する元氣のあるものは殆ど残つてゐなかつた。

三人の見張人は病氣で倒れて行つた。腕さへあげ得ない程の重病人も殖へて來た。艦隊の船員名簿は残つてゐないので、最後まで生存した者及びピガフェッタの物語に記述してある人の名前しか分らないが、海洋横断後に三艘の船に生き残つてゐた強い人々といふ

より、弱り果てた人の數は約百五十人位である。出帆の時は船荷の重量二噸につき一人位の人數がゐたのであるが、途中の變事のためその人數は半分になつたのである。

當時の防腐劑たる醋を、サンルカル出發の時二千ポンド程積込んで來たのであるが、とつくに使ひ果してしまつた。しかし、風、太陽及び鹽水の御蔭で彼等は生き延び得た。太平洋を横断した他の人々と異つて、彼等は、人肉を喰はずに濟ませ得た。マゼラン、セルラノ(Serraano)、バルボサ(Barbosa)のこの三人の首領の訓練よろしきを得たため、彼等一同は信仰と祈禱を失はなかつた。

帆船で長途の航海をしたことのある人々は、科學的進歩がどの程度のものであるかを知つてゐるが、マゼラン以後數世紀の間は船員等は瘧血病に悩まされた。飲料水を入れてゐる木製の樽、乾燥した物を入れておく丸い樽、葡萄酒を入れたコルク附きの壺、これらが彼等の使つた容器であつた。

船員達は毒虫と戦ひ、木喰虫を驅除しなければならなかつた。照りつけられて半餓死の状態にある一同はこの嫌なゲームを忍ばねばならなかつた。腐りかけたビスケットに鋸屑を混へたり、焼いたゴミや熱で死にかゝつた蛆や蚯蚓を食べたりして榮養の足しにした。船が貿易風帯と他の貿易風帯の中間の無風帯にはいつて手がすいた時には、一同は帆桁や支索についてゐた擦り切れた皮や、固くなつた革を刳いだ。しかしそれは長い間、鹽水にかゝり、太陽熱に焙られて乾燥して固くなつてしまつてゐるので、それを切つて餓死しかゝ

つた船員の食糧とするためには、海水に浸して柔らかにする必要があつた。かゝる困難にも拘らず、一同はこの航海中、絶えず集合しては鐘を鳴らし、彌撒を唱へ、祈りを捧げた。しかも罷だらけの隊長及び水先案内人等は、あてどもなき陸地を求めて進んで行つた。

これまで聞いたことも見たこともない環状珊瑚礁の間を彼等は通りながら、しかも不思議なことにそれに気がつかなくつた。そして西經一五八度の線で赤道を横断して、一年振りに、眞暗な水平線上低く輝いてゐる北極星を見たのである。その後間もなく、一五二一年一月二十四日のこと「オー、陸だ」といふ喚聲が旗艦のマストから聞えて來た。陸地を見たといふ信號の銃聲が続いて聞え、船は進路を變へた。それはまがひもなく島であつた。船を停めて衰弱しきつた一同はやつとのことのでポートをかゝへ降した。そしてオイルに跳びかゝつてくる鯨を拂ひながら、海岸に辿りついた。しかしそれは僅かに風に翻られてゐる二、三本の棕櫚の木があるばかりの島で、一滴の水さへない荒地であつた。彼等はその島を聖パウロ島 (St. Paul) と名付けた。それから十一日の後彼等は再び鯨に圍まれた砂島を發見し、それにはティブラノ (Tiburano 譯註、鯨島) といふ名を付けた。一同は非常に衰弱し熱気があつたので、その島に泉や果實や休息所があるやうな幻覺に襲はれた。

ピガフェッタは當時の失望の状態を書き誌してゐる。「人一人ゐない慰安になる如きものも食糧となるものも何一つないこの島々に、われは「不幸なる群島」(Desavechuradas) といふ名を與へた」と。この二つの島は本來は數哩離れてゐるのであるが、マゼランは二

つを一緒にして群島と呼んだのである。

それから一同は水平線上十六度のところに北極星を見ながら、強い北西の貿易風に抗しつゝ、一直線に西に向つた。死に瀕した一同は、指揮する人も舵取る人も捨鉢な氣持であつた。マゼランはこのまゝでは一同は恐るべき死の海、恐ろしく靜かな海、太平洋を、あてどもなく漂つて行くばかりだと間もなく気がついたが、しかしその時は恐らくもうどうにもならなかつたのであらう。



グアム島及び香料諸島

第二の無人島「鮫島」が船尾に没した時、即ち二月四日の夜、艦隊は北極星を眞横に見ながら僅か北寄りに西方に進んでゐた——太陽と最も確實なる目印である北極星により方向を定めながら。緯度は十五度のところであつた（昔の計算法では北緯十六度）。恐らく眼は焼け切り、眼瞼は脹れ上つてゐたので、前のやうに正確な計算が出来なくなつてゐたであらう。少しでも雨が降れば彼等を生き上らせることが出来たに違ひない。——彼等を辛くも死から救つてゐたのは不屈の信念のみであつた。隊長マゼランは、どこか遠くないところに陸地か、人の住む島かがあるに違ひないと考へてゐた。拷問でも受けてゐるやうな一ヶ月と二日

の間が彼等にとつて如何に長く感ぜられたことであらう。さすがのピガフェツタさへ、その間のことは日附のほかは殆ど記憶に残してゐない。船は千鳥足になり、水洩りは益々甚しくなつたが、特に旗艦とコンセプション號に於いて甚しかつた。船員等は舵を取る以外には何もする元氣がなく、破れた帆も修繕されずに放つておかれた。帆桁から垂れてゐる帆幕もいゝ加減の所に垂れ放しであつた。胸の悪くなるやうなビスケットの粉末も、とつとなくなつてゐた。

顔には光澤のない髭がぼう／＼と生え、關節は脹れて痛み出し、死が一同の間を彷徨し出した。彼等に希望を與へるものは、船側を打つ絶え間ない波の私語のみであつた。恐らくは静かなる波の上——北東貿易風帯のはずれにおいては静かな風は決して珍らしいことではない——には屍を積んであてもなく漂ふ三隻の船のほかには何もものも残らなくなる日が間もなく來たことであらう。「もしも我等の主なるキリストと聖母マリアが好天氣を我等に恵み給はなかつたならば、……我等は皆この廣大なる海上にて餓死してしまつたであらう。そして恐らくは今後かゝる航海を企てるものは永久に現れなかつたに違ひない」とピガフェツタは書いてゐる。

ロードス島の騎士ピガフェツタが最も恐しい言葉である「渴」といふ字を書いてゐない所を見ると、雨が降つて彼等の命が助かつたことは疑ひない。マゼランの艦隊は最初から忍耐すべく運命づけられてゐたが、船が東經百四十五度の線を横切つた時、位苦痛が激しか

つたことは後にも前にもなかつた。疲勞し切つた船員等は誰が當番だが分らなくなり、皆半死半生の状態で甲板の上に伸びて死にかゝつてゐた。船の頂上に登つて見張りを續けてゐる者は、最も頑健なもの二三人にすぎなかつた。三人の船長はそれ／＼の船尾樓にゐた。船はいつも進路を外れながら、ものぐささうに方向を變へた。帆桁は左舷の索により釣合をとられてゐたが、朝の微風が北東の方から吹いて來た時に、風を受けて一杯に脹れ上つた麻の帆布は乾き切つた舷牆の滑車の上を動きながら切なさうな軋り聲をあげた。

北極星が薄れて、コバルト色の海は再び執念深くもその虚ろな青みを加へはじめた。一條の薄緑の線が夜の帳を破り、陽の光が船尾から擴がりはじめた。しかし見張人は空しく過ぎ去つた幾日かと同じやうに西の方を睨んでゐた。橙色に輝く帆を張つて僚船の先頭に喘ぎつゝ進んで行くトリニダグ號は、その時突如呼び覺まされた。「陸だ！陸だ！！」弱々しい叫び聲が大橋樓から降つて來た。半信半疑の叫びが船中に傳はつた。飢えかゝつた人々は舷檣につかまつて立ち上り、二三人の少年は網具に攀ち登つた。右舷の船にあたつて黒いものが見えた。

「砲手！大砲だ！！」マゼランは命令した。ブリストル生れの老アンドリュー(Andrew)は疲勞困憊してゐたが、それでもマツチを擦る元氣はもつてゐた。旗艦の船側から煙が吹き出すと同時に、鈍い音が海上に響き渡つた。僚船も目を覺して目を見張つた。陸が見える？——確かに蜃氣樓ではなかつた。砲聲に答へてヴィトリア號及びコンセプション號も

大砲を打つた。旗艦が王室旗を掲げるに應じて、他の船はそれ／＼の船旗を垂らした。舷窓遙かに幾つかの島が現はれた。太陽の光線が數を増すにつれ、次第に新しき光景が見えて來た。頂上の尖つた三角帆が敏捷に走つてゐるのが見える。しかもこれらの奇妙な舟は狭い船臺のほかに張出した支架で中心をとりつゝ、帆の許す限り風に向つて、飛ぶやうな速さで近づいて來た。船が平らでつきたつてゐて、まるで錨のやうな船であつた。そしてそれらの船を操つてゐる船員は褐色の裸人で、何か譯の分らぬことをベチャ／＼喋つてゐた。長く待たされた芝居の幕でも上つて行くやうに、この世の樂園を擁して陸地が浮び上つて來た。

まる九十八日間、船員等は全く希望のない暗黒の水平線しか見なかつた。一五二一年三月六日、正にこの日こそは疑もなく海洋史上最も劇的な上陸の日である。マゼランは太平洋を横斷したのだ。——少くとも東インド諸島の最東端の島に到着したのである。

甘美な香りのする濱邊には人が群がり集つてゐた。一同は丸木舟や小舟の雜沓してゐる中をかき分けながら、人里近くの安全さうな碇泊地に入つて行つた。疲れ切つた船は最早碇泊の儀禮をする元氣もなかつた。錨を降ろしてからも帆桁は擴げたまゝで風に翻られ帆はだらしなく垂れ下つてゐた。

何もかもいゝ加減になされた。しかしともかくも命令により、トリニダグ號の中部甲板よりボートが降された。彼等は非常に疲れてゐたので、ボートを舷側越しにかゝえ上げて

丸木舟の群がる波の上に落した。

奇妙な猿のやうに譯の分らぬことを喋りながら野蠻人共が舷楫を越えて乗り込んで来た。そして甲板上にあるもので持てるものは何でも、——索に止めてあるビンやバケツ、ナイフ、さては布の切れ端に至るまで持つて行つた。何もかも彼等を止めさせることは出来なかつた。一同はつかれきつてゐたが、野蠻人共を海の中または丸木舟の中へ押し戻した。ところがこの盗賊等はボートの繋ぎ索を叩き切つて、ボートに飛び乗り、手で水をかいて濱邊に漕ぎ去つた。

マゼランはこの貴重なるボートが奪はれて行くのを眺めてゐた。しかしヴィトリア號とコンセプション號では關入者を撃退するため、舷側に船員が並んでゐた。そして僚船からやつとのとでボートが降ろされて、旗艦に近づいて来た。マゼランは殆ど立上ることも出来ない位に疲れてゐたが、甲冑に身を固め、四十人の部下を率ゐてボートに乗り込んだ。

一方沖に碇泊してゐるトリニダダ號は、引上げる野蠻人の背を狙つて大砲を發射した。彈丸は水中に水柱を立て、飛び込んだり、濱邊の草小屋に躍り込んだりして破裂した。砲聲が島中に轟き渡るのを合圖に、四十人の飢えかゝつたスペイン人は海岸めがけて突進した。

鬱蒼たる森の上で鳴き叫ぶ鳥や、驚愕の悲鳴をあげてゐる土人を尻目に、一同は運を天に任せてボートから降りて、絶えて見なかつた黄金色の砂地に躍り上つた。土人の逃げ去つた小屋に近づき、蓆を掲げて、薄暗い内部を覗き込んだ彼等の眼に映じたものは何であつ

たか。黄色い長いうまさうな無花果——これを彼等は堪へかねて飢えた猿のやうに食り喰つた。そのほか、そこには彼等がはじめて見るバナナや、人間の頭程もある胡桃もあつた。胡桃を割るのには大變な苦勞をしたが、その甲斐あつて、その中の蜜——椰子乳や白い肉の美味さには一同も全く驚嘆してしまつた。

七人程の土人が大膽にも小屋に這ひ戻つて来たが、容赦なく殺されてしまつた。盜まれたボートも海岸にあつた。豚もそこにゐた。一同は大意でバナナや椰子の實や或は甘蔗の束や乾魚をボートに積込み、泉から汲んだ冷水を水樽に充した。

一同はこれら戦利品を積込んで船に戻つた。彼等がこの果實や水に飛びかゝるのを何もが阻止し得たであらう。一人當りの分前は多くなかつたが、幸ひにも百五十人の一同に分ち與へるだけの量はあつた。屠られる豚の悲鳴が灣中にひびき渡つた。旗艦の炊事室からは煙が燃え上つた。隊長は彌撒の信號を掲げて騒ぎを静めた。朝の薄明りの中で一同は脆いて祈りを捧げた。

彼等が入港した時、マゼランは航海日誌に、その島のことを“Las de las Velas Latinas” (大三角帆の島) と書いた。しかし彌撒が終つて、彼等がこの灣を出發した時に、これらの島々を彼等は罵倒して「盜賊島」(Ladrones) と呼び直した。そしてその後數世紀の間、その名が續いてゐたが、現在では、マゼランが上陸した島はグナム島と呼ばれてゐる。

辛くもそれまで生きのびてゐた人々は再び元氣を恢復して、臭い水桶を洗ひ修繕して、新

しい水を充した。今後何哩位航海しつづけるのかは勿論知る由もなかつた。彼等は濱邊を襲つては出来る限りの食糧を船に積込んだ。しかしすつと前から病氣してゐた人で死んだものも数人ゐる。彼等にはそれ／＼キリスト教の葬ひが行はれた。

一方、盜賊等は丘の上に集合した。群島の眠りが覺まされたのである。戦ひの太鼓が鳴り渡り、快速船が北から走り集つて來た。土人等は嘗つて弓矢を見たことがないので、唯大舉して船の上に乗つて來るほか爲す術を知らなかつた。餘りに蒙昧な彼等は、弓矢で射られて、矢が背中に突き通した時でも唯吃驚して、死ぬまでそれを呆然と見守つてゐるのみであつた。

とかくするうちに日は經つた。三月九日、船は再び帆をあげて西の方に——一二度程前より南の方に向きながら進み始めた。

新鮮な果物、豊富なる水、そして毎日絶えず島影の見えるこの一週間は、彼等のうちの最も虚弱な人達にさへも健康を恢復させるに充分であつた。三月十六日土曜日、均勢のとれた島が前方に霞んで見えて來た。右舷に見えるこの小島をビガフェツタはフムヌ島 (Humunu) と呼び、マゼランは「善き前徴の島」(Isle of Good Sign) と名付けたが、現在ではマロウ島 (Malhou) と呼ばれてゐる。それは明らかに無人島であつた。マゼランは碇泊するやうに信號を出し、三隻の船は靜かな入江に入つて休息した。



こゝこそは艦隊が入港した最初にして且つ最後の安全な避難所であつた。強い香料の香が濱邊から漂つて來た。三日月型をした海岸に寄せ波の打ち寄する音を聞いて一同は靜かな氣持になつた。綺麗な羽の鳥が涼しい森の中で愉しさうに歌つてゐた。ボートが濱邊に着いた時に、木の葉はサラ／＼と音を立て、歓迎の意を表した。こゝは全く永遠の平和そのものであつた。

フムヌ島碇泊中におけるマゼランの行動は、如何に彼が部下想ひであつたかを遺憾なく證明するものである。帆でテントを二つ作り、擔架にのせて病人をかつぎこんだ。泉も探し出され、果實も澤山集められた。嘗つては彼等を苦しめた大洋も、今や涼しい微風を送つて元氣を回復させてくれた。

日曜日には祈禱の休息の中に過ぎた。月曜日になると、遙か沖の方から碇泊してゐる船の船長めがけて一隻の帆船が現はれて來た。一同は隊長の許可なしには一語も發せぬやう、また銃も打たぬやうに命令されて、濱邊に立つて見守つてゐた。彼等の船は大砲に彈丸をこめてその小さな舟の方に備へた。ボートが白濱に着くと、その中から九人の男が上陸して、マゼランの立つてゐる方に歩み寄つて來た。そのうちの五人は立派な服装をしてをり、彼等に歓迎の身振りをした。残りの四人は直ちに小舟に引返したが、間もなく沖で釣をしてゐる他の土人を引きつれて引返して來た。この會見は全く友好的な團氣のうちに進行した。一同は打ち連れて船に引き返した。スペイン人はこの來訪者に鈴や鏡や赤い帽子

等を與へ、土人は魚のほか何も持ち合せがないことをしきりに辯解しながら、恐る／＼一瓶の棕櫚酒を差出し、また引き返して来るからと約束して立去つた。

その週間こそは天國の生活にも等しいものであつた。木曜日には例の小舟がまた引き返して來た。今度は奇妙な入墨をして、耳環をはめ、黄金の腕環をはめた一人の長老が中にまじつてゐたが、彼は悉々しく彼に歓迎の挨拶をした。そして遙か西の方にもつと廣い立派な島があることを身振りでも示しながら、幾許かの贈物を差出した。そしてそのほかに、椰子の實やオレンヂや棕櫚酒や雞等を満載した丸木舟二艘を歓迎の印に贈つた。これらがこの酋長の國の提供し得る品物であるが、このほかに香料も澤山にあるし、また金もあるのだといふことを腕環を示しながら仄かした。マゼランは彼を旗艦の甲板上に伴つた。酋長及び従者等はその船の大きさに愕き、砲臺等を物珍らしさうに觸り廻つた。敬禮の印として大砲を發射した時は一同は全く腰を抜かさばかりに驚き恐れた。

病氣の治療も大いに捗つた。眼は治り、眼は輝きを増して來、病人の皮膚の色も元通り健康色にふつた。歌聲も聞えて來、皆はしやぎ廻つた。隊長及び士官等は彼等の大業の成就を悦び、且つこれら遠隔の未開ではあるが人なつこい土人達を感服せしめ得たと感じた。マゼランは既に自分の發見した島であることを證明するに足るだけの島を幾つか發見してゐた。月曜日即ち三月二十五日には、テントをたたんで宿營地を引き拂つた。修繕すべきものは甲板上で行ひ、直ちに出發した。一同はやがて現はれて來るであらう珍らしきも

のを早く見んものと急いだのである。

大太平洋を横斷したマゼランは殆ど彼の使命を完成し終へんとしてゐた。マキシミリアントランシルヴァヌス(Maximilian Transylvanus)の有名なる言葉を引用すると、彼は「地上の人間の殆んど想像し得ない程に廣大なる海」の英雄的踏破を完了し、全く地上の樂園とも思はれた新しき世界に到達した。「そこでは凡ゆるものが——平穩さも娛しきも、はたまた香料に至るまで皆簡單に得られた。それらの中でも最上のもので、そしてまた恐らくは地上にあるあらゆる寶の中で最高のものたる平和——舊世界の人間の惡業を逃れて新しき隠れ家を求めてゐた平和がこゝに憩つてゐるやうに思はれた。」

船は島々の間を縫つて進んだ。そのうちに水曜日夜の夜のこと、遙か西の方にあたる海岸に火が見えた。彼等は帆を短くして用心深く海岸に着いた。人の棲家らしきものが見えた。そして彼等が錨を降ろしてゐる時に、丸木舟を操つて八人の土人が近づいて來て、彼等が帆を疊んでゐるのを呆然と見てゐた。

マゼランは彼の召使たるマレー人のエンリク(Enrique)といふのを呼んで、土人等と話すやうに命じた。マレー語で話しかけたエンリクに對して彼等もマレー語で答へた。彼等スペイン艦隊がモルッカス群島に到着したことは疑ひなかつた。従つて少くともマレー人たるエンリクは彼の古巢に立ち戻つた譯である。

一五二一年三月二十八日、この日こそは今一つの重要な出來事が、青史の上に刻まれた日

である。即ちマラッカよりスペインに連れて行かれ、マゼランの一行に加へられた褐色人の一人たるマラッカヘンリー——船員等は彼のことをさう呼んでゐた——が完全に世界を一週した最初の間であることを自ら確認した日に當るのである。

彼等が到着した島はフィリッピン群島中の一島たるマッサヴァ島(Massava)であつた。使者として上陸したエンリクは、贈物として生姜や黄金の棒を持ち歸つた。しかしマゼランは金を受取ることを拒絶した。彼等スペイン人は友人として來たのであり、掠奪をしに來たのではない。彼等が願つたことは唯、食物を買ふ許可を得ることだけである。マッサヴァの酋長はトリニダダ號の甲板に上つて來て、綺麗なサンチャゴ州の官服を來てゐるマゼランを抱擁した。王室旗は陽に輝きながら、ゆるやかに波打つてゐた。その他の船もカステイル、レオン、アラゴン諸領の旗やその他の小旗を全マストに張つて満艦飾をほどこした。髭だらけの船員等も一番白いそして上等の服に着更へた。そしてエンリクはセヴィラの町の壯大さや、彼等の主人たるチャールス王の偉大さについて、楽しげに土人等に話して聞かせた。

海岸に歸らんとする土人の酋長及び従者等にマゼランは莊嚴なる大彌撒を行つて見せた。そして甘美な香のする水を彼等に振り掛けてやり、十字架を出して接吻せしめた。それから聖餅を高く捧げ奉じて、それに敬意を表するやう命じた。彼等は掌を組合せながら——

その通りにした。なほ大きな十字架を船から運び出して、それに釘を諸所に打ち、頂上に茨の冠をつけてキリスト像として丘の上に立てた。マッサヴァにおいてそれが見られることは、將來渡航して來るであらうキリスト教の航海者によき目印として役立つことであらう——。

大いなる太平洋を横断して西の端まで到達したマゼランは、陸地発見よりも更に偉大な冒険を試みたのである。即ち彼の発見した東洋の新帝國の偶像崇拜者共にキリスト教の祝福を與へんとした。ピガフェッタはマゼランを眼前に見て、感激しながら、その時の驚嘆すべき事件を書いてゐる。多くの世の征服者等が最も價値あるものと考へてゐた黄金は、この大遠征軍の隊長にとつては塵芥に過ぎなかつたのである。

一五二一年の四月七日より同二十七日に至る二十一日間のマゼラン位探検家として多くの未知の海岸を航海し廻つた人は今日までない。

牧歌的な憩場マッサヴァを出帆して、四月七日一行はセブ島に着いた。しかしこゝの酋長アマボンはスペイン國王チャールスの家來になるといふ幸運を理解し得ずして、マゼランに普通の入港の貢物を要求した。ところが丁度その時港にゐた親切な回教徒のシヤム人が酋長に忠告していふには、このマゼランといふ男は嘗つてゴア島に上陸して銃劍で暴れ廻つた一味であるから、この船の人々を怒らせると危険であると。このシヤム人はかの

アルブケルク (Albuquerque) を想ひ出したのである。そこで酋長は、入港の買物を免除したばかりでなく、トリニダダ號を訪ねることを承諾した。そしてトリニダダ號の甲板に來た酋長は、全甲板から打ち出す轟々たる禮砲の音に怖れをなして、總司令官が語るスペインの威力や神の御力についての話に神妙に耳を傾けた。

セブ島の事實上の王である酋長フマボンは、キリスト教徒マゼランから蒙を啓かれた。艦隊は未だ手をつけない荷物を澤山もつてゐたので、活潑な商取引が始まつた。フマボン酋長の目の前であの奇妙なる金屬たる鐵を焼いて兵器やその他の品物を作つて見せた。そしてその出來上つた鐵を一人のスペイン人が着て、刀や槍で突いたり切り切らしたりしたが、少しも傷つかないのを見て、土人等はその兵器の威力に感心した。大酒宴も開かれた。豪華さと威力の前には土人達もおとなく兜をぬいだ。

四月十四日の土曜日に、この純朴な人々の住む安樂淨土で盛大なる儀式が行はれることに定められた。艦隊に乗り組んでゐたデ・ヴァルデルランサ (De Valderranza) 僧正は、彌撒の準備をした。マゼランはサンチャゴの騎士の服装を着込み、大事業完遂の祈禱と懺悔とを行ふ用意をした。海に面して圓形の高棧敷が棕櫚の木で作られ、その中に階段舞臺がおかれ、祭壇は棕櫚の葉で飾られた。群衆は感激して舞臺の周りにつめ寄つた。マゼランは、キリスト教を信仰すれば多くの利益が得られるのみでなく、敵を打ち破る力も與へられるであらうとフマボン酋長に確約した。酋長は、たとひさういつた力を與へられなくても、キリ

スト教徒になりたいと恭々しく答へた。

帆桁を擡げたり船側を掃き清めたり、或は新しく塗料を施して磨かれた三艘の船は、あつただけの旗を掲げて禮砲を發射した。帆索や吹き流しの間から立昇る煙は、まるで神前の香のやうに濱邊に漂つて行つた。酋長とその妻は洗禮を受け、妻の方はスペイン國王の母と同じ名のファナといふ洗禮名を與へられた。そして彼女は、今までの偶像を捨てて、代りにイエス様の肖像をくれるやうにピガフェツタに頼んだ。マゼランは、酋長の名付親になつて、彼にスペイン國王チャールスにあやかつてチャールスといふ洗禮名を與へてやつた。

續いてセブ島の多くの土人等にも洗禮が行はれた。二千人——ある人は三千人とも稱するが——近い人がキリスト教に改宗したが、酋長の親戚等は、その中でも最も熱心であつた。隣村の酋長等も不思議の洗禮の水を撒りかけて貰ふためにやつて來た。

しかし未だ破壊されない偶像も残つてゐた。口がきけなくなる不思議な病氣にかゝつて寝てゐる酋長の弟のために、二、三の偶像が残されてゐた。マゼランは、もし凡ゆる偶像が破壊され、その王弟も洗禮を受ければ、直ちに彼の病氣は治るだらうと主張した。「もしその通りにならなかつたなら、私の首を進呈しよう」と彼は誓つた。

エンリクは言葉通りにこの約束を通譯した。澤山の偶像が毀された。そして儀式の途中で王弟、その二人の妻及び十人のその娘の洗禮が行はれた。

ピガフェツタはその時のことを書いてゐる。「マゼランが氣分はどうかと問うたところ

王弟は突然に口を開いて、主の御力により病氣は全快したと答へた」と。

マゼランは、そこで、誰よりも熱心に神を讃へて祈禱を捧げた。その後幾百といふ偶像は皆火に燃やされ、スル海(Sulu)の濱邊に建てられてゐた異教徒の寺は改宗者等の手により取り拂はれた。そして新しきキリスト教徒等は聲限り「カステイラ萬歳！カステイラ萬歳！！」と叫びながら、島中を踊り廻つた。

しかし改宗を背けない異教徒の部落も一つだけあつた。マゼランは武装した部下を引きつけて、そこに赴き、その家々を焼き拂つた。そしてその廢墟の上に十字架を打ち立てた。

四月二十六日は船員等の忌み恐れる金曜日(忌日)に當つてゐた。トリニダダ號は、チャールス酋長の統治するセブ島の遙か沖合に碇泊してゐたが、その金曜日に一人の土人の來訪を受けた。その使者は近くのマクタン(Mactan)といふ島を支配してゐて、セブ島の酋長の命に服しないチラブラブ(Chilapulapu)といふ名の首領の家來であつた。一つの奇蹟をやり終つたマゼラン隊長は、今や更に彼の信仰の偉大さを確證する必要に迫られた。それは勿論簡単なことで野蠻人と戦つてこれを屈服せしめれば、それで足りた。

チャールス酋長は、彼の部下を送らうと申出でた。その島にはマゼランの部下の船員等がその直前に行つたことがあつたが、彼等は土人の魂を救つてやるどころか女獵りと掠奪の限りをつくして荒らして來た。彼等は嚴格な指揮官たるマゼランに内密にその島に行つたらしかつた。マゼランは直ちに出帆することにした。彼はチャールス酋長に彼の直

接統治してゐるセブ島のみならず、その周圍の島をも完全に統治させてやらうと思つたのである。

夜半に隊長とマゼラン僚船の船長たるデュアルテ・バルボサ(Duarte Barbosa)、ファン・セルラノ(Juan Serrano)及び占星術家サン・マルティン(San Martin)、忠實なピガフェッタ並に召使エンリク等は甲冑を着た六十人の兵士と共に三艘のボートに分乗して出發した。セブ島の酋長も王弟をはじめとして千人の部下を引きつけてそれに従つた。そのほかに回教徒のシヤム人の商人もゐた。軍隊をのせたボートや丸木舟は島蔭の内海を通つて夜明前三時間前にマクタン沖に到着した。

シヤムの商人が使者として謀叛人チラブラブの下に送られた。「酋長及びスペインに歸順せよ」といふマゼランからの傳達に對して、「われ／＼にも槍がある」といふのがその返答であつた。

實際馬鹿げた挑戦である。マゼランは酋長及び酋長の部下は丸木舟に残つてゐるやうに命じた。それは戦士の仕事であり、そしてまた新しく改宗したこのキリスト教徒達に眼の當りスペイン人の戦闘方法を見物させるためにも船に残しておく方がよかつた。回教徒の商人は首を振つて囁いた。——アラアの神よ、マクタン島の不幸な暴徒を憐み給へ。

小島の森の頂から夜明けの薄明りが差し始めて來た。ボートを漕いで岩礁に到着したマゼランは、十一人の兵士をボートに残し、残りの四十九人を自ら率ゐて淺瀬を徒渉した。

彼等は皆甲冑に身を固めてゐた。石弓の射手は弦を張つた。遂か彼方から千五百人餘りのマクタン島の戦士が押し寄せて来たが、続けざまに飛んで来る弓矢に辟易して後退した。チャールス酋長は彼の守護者を頼母しく思ひながら、また回教徒の商人は土人のことを心配しながら——土人だつて結局彼等の好きな宗教を信仰する権利をもつてゐるはずだから、攻められる理由はないはずであると彼は考へた——眺めてゐた。

野蠻人等は侵入者を徐々に遠巻きに包圍した。矢は固い木の楯を突き刺した。段々勇氣づいて来た野蠻人等は前進して来た。

「打ち方止め」マゼランは繰返し叫んだが、少しもその命令は徹底しなかつた。スペイン側の射手は敵の軍勢の餘りに多いのにおぢけづいて、狙ひをもよく定めずに無茶苦茶に射た。小銃も効果的に使ふことが出来なかつた。彼等は大恐慌を來した。襲撃の喚聲をあげながら三方から押し寄せて来る敵の槍部隊の勇敢さに彼等は膽を冷やした。背後は海で、敵の石弾の擁護射撃を沈黙せしめる大砲もなく、従つて大砲の轟音で味方を激勵する術もなかつた。

しかしこゝで戦鬪の様相をロードス島の騎士ビガフェツタに語つて貰はう。彼も戦鬪中矢に當つて傷つたが、一番身近かでその戦を目撃した人である。

「われ／＼は腰まで達する海中に飛び込んだ。岸まではまだ二射程距離位あつたが、ボートが岩礁のために進めないで徒渉せねばならなかつたのだ。岸には千五百人餘りの敵

が三軍團に分れて待構へてをり、その中の一團はわれ／＼の正面に對峙し、他は側面から攻撃せんとした。そこでマゼランは防禦に適した方法を考へて一同を二つの隊に分つた。銃兵と射手の一隊はボートの上から約半時間餘り打ち續けたが、餘り距離が遠いので弾丸も矢も敵兵の木の楯を突き抜くことが出来ず、殆ど効果なかつた。せいぜい敵兵の腕を傷つける位のものであつた。隊長は射手に打ち方止めと命令したが、混亂してゐる味方にはその命令も徹底しなかつた。敵はわれ／＼の銃が殆ど打撃を與へることが出来ないのを知りや、退却を中止した。そして漸次鯨波をまして、右に左に駆け廻り、われ／＼の射撃目標をくらしながら、楯で身を防ぎつゝ、同時に三方から進撃して来た。弓、投槍槍——その尖端には火や石やさては汚物までもつけてゐた——で三方から取り圍まれたわれ／＼は、殆ど身を防ぐ術とでもなかつた。敵の一團はわれ／＼の隊長を狙つて眞鑄色の槍を投げ始めた。

「敵に恐怖心を起させるために、隊長は部下に命じて、土人の小屋に火を放たしめたが、それは反つて彼等の敵愾心に油をそゝいだけだに過ぎなかつた。二、三十軒の小屋が火に包まれた。そしてそれを消すために駆け出して来た敵の一隊のために、その場に居合せた二人のわれ／＼の部下は殺された。残りの敵は怒りを新にしてわれ／＼を攻撃して来た。われ／＼の體軀は冑で護られてゐたが、脚はあらはであつた。敵はそれに氣がついてわれわれの脚を狙つて来た。隊長も右脚に毒矢を受けた。そこで隊長は徐々に撤退するやう命

令したが、大部分の部下は我勝ちに逃げだした。數年前から跋で早く逃げることの出来な
い隊長を守つて踏み止つたものは、六、七人に過ぎなかつた。今やわれ／＼は槍や石で四面
取り圍まれ、敵の爲すまゝになつてしまつた。ボートからの大砲も餘りに距離が遠過ぎて
われ／＼を助けることが出来なかつた。そこでわれ／＼は抵抗しながら、濱邊から一步一
歩後退した。既にわれ／＼の膝まで水が達する所まで後退したが、敵は頑強に追撃を止め
なかつた。そして既に一度使つた投槍を拾つてそれを使つたので、一本の投槍で續けさま
にわれ／＼の五、六人に傷を負はせることが出来た。隊長を認めた敵は、それを狙つて攻め
て來た。二度までも隊長の兜は飛ばされた。そしてそこに踏み止つた數人のものに助け
られながら、彼は勇敢なる騎士の名を恥しめず、それ以上一步も後退せず部署を守つて戦つ
た。

「かやうにしてわれ／＼は一時間以上も闘つたが、遂に隊長は顔をインディアンの竹槍で
突かれた。最早これまでと観念した隊長は、彼の槍をそのインディアンの胸に投げつけ、銀
を引抜いて闘はうとした。しかしいかにせん、前に右腕に受けた槍傷のために、銀は鞘から
半分しか抜けなかつた。これを見た敵は、隊長の上に折重なつて押寄せ、遂にそのうちの
一人は、鎌のやうな形をした蠻刀で、隊長の左脚に切りつけた。隊長はうつぶせに倒れた。イ
ンディアン共は槍や蠻刀やその他彼等のもてる凡ゆる武器でもつて、彼の上のしかゝり
遂に隊長を殺してしまつた。——われ／＼の鏡であり光明であり慰安者であり、そして眞

の指導者であつたわれ／＼の隊長を。」

マゼランの死と共に、この第一回太平洋艦隊はその中心を失つた。マクタン島の蜂の巢
を突ついたばかりに、悲劇的な結末を齎らしてしまつた。セブ島を出帆するに當り、上級指
揮官たる船長カラバロ(Carballo)は船員の人員點呼をした。が、返事をしたものは百十五人
であつた。早くからもはや航海に堪へなくなつてゐたコンセプション號は、今やポンプで
汲み出すよりも早い速度で浸水し出したので、ボホール(Bohol)の岸に引上げられ、解装
された。乗組員、船具、積荷は他の二艘の船に積替へられた。

エスピノサ(Espinosa)の指揮するトリニダダ號及びカラバロの指揮するヴィトリア號は
最早や目標を失つた。そして海賊的行爲をしながら巡航を續けて行くうちに、ボルネオの
海岸に到着した。折角のマゼランの崇高なる意圖も今や破廉恥な企業に取つて代られた。
ブルネイの郊外に碇泊した時に、五人の船員が岸に派遣されたが、酋長に捕へられてしまつ
た。そして二百艘の舟が攻めて來た時、彼等は網を落したまゝ逃げ出した。しかし武装し
ない四艘のジャンクが沖に現はれた時には、早速それを追撃して二艘を捕獲した。分捕品
の中にはルソンの酋長、その従者、三人の綺麗な女及び寶物等があつた。海賊等は——もは
や彼等はスペイン艦隊ではなかつた——掠奪品を山分けした。酋長は釋放されたが、女達
はカラバロのものとなつた。

それから彼等は前に一度行つたことのあるペラワン(譯註、フィリッピン群島の西南部、ボルネオとの間にある島)で船を引くりかへして、木喰虫の喰つた孔を詰め、粉を塗りつけ、接目に鉛をつめた。そのほか羅針盤の箱を新しく据ゑつけたり船底を整備したりした。六週間の滞在の間、氣分の向いた時は働き、夜は部落で泊つた。その珊瑚灣には彼等を抑へ得るほどの有力な酋長はゐなかつたのである。

しかしその小船隊の中にも誠實さが全然なくなつた譯ではなかつた。即ちトリニダダ號の船長は依然誠實なゴメス・デ・エスピノサであつたが、ヴィトリア號の船長カラバロは免職されて獄に投ぜられ、その代りとしてセバスチアン・デル・カノ(Sebastián del Cano)がヴィトリア號の指揮をすることになつた。十一月六日に船は幸運群島(Fortunate Islands)のテルナーテ(譯註、蘭領印度ヘルマヘラ島の西岸にある島)とティドールに着き、そこで香料を積込んだ。しかるにこゝでトリニダダ號は接目が開いて浸水し出した。そこで濱に引上げて荷物を降ろし、やつとどうやら航海に堪へ得るやうにした。

今やスペインに大丈夫歸り得ると思はれる船はヴィトリア號のみとなつた。——恐らくその船は比較的小さかつたから頑丈だつたのだらう。後のことであるが、セバスチアン・デル・カノの指揮の下にヴィトリア號は世界最初の世界一周船としてスペインに歸りついたのである。積荷の香料は全艦隊の總費用を償つて餘りあり、デル・カノは國民的英雄として歓迎された。ティドールからサン・ルカルまでの間の航路も太平洋横断の時と殆ど變ら

ぬ位恐ろしいものであつたが、大體において巧く切抜けて來た。

それはさておき、テルナーテを出てから二ヶ月の間彼等はティモールに閉ぢ込められた。バンダ海で非常な暴風雨にあつたのである。ティモール滞在の二ヶ月間は船の手入れを行つた。そして重い荷物を積んだ船は再び大海に乗り出し、印度洋に出たのである。しかしこの間のことは、アフリカとオーストラリア(Australia)——最初はかう綴つてゐた——との間の廣漠たる海の物語りであり、茲には觸れない。強い風に逆ひながらおそろしく遠廻りした話は大西洋の叙事詩に譲らう。

二月十三日にこの小さな二本マストの帆船——ある信憑すべき記録には二本マストと書いてある——はティモールを出發した。その時にはデル・カノのほかにはフランシスコ・アルボヤ優秀な記録係のピガフェツタ等を含めて六十人の乗組員が乗つてゐたが、そのうち十三人は東洋の土人であつた。しかし、回教徒は全部途中で死んだり、方々の場所に置いて來たりしたので、スペインに到着した時は、回教徒は一人もゐなかつた。スペインに歸りつた歐洲人は十八人であつたが、後に、ヴェルデ岬においてけぼりを食らつた十三人もスペインに歸りつた。(譯註、ヴェルデ岬に着いた時、水と食糧を求めに上陸した十三人のスペイン人はポルトガル官憲に逮捕された。)

今一度敬虔なるピガフェツタの言葉を引用しよう。「死體を水中に投げ込むとキリスト教徒は顔を仰向けにして流れて行くが、回教徒は俯向きになつて流れる。」

印度洋と大西洋を渡つてサンルカルに到着したのは、それから七ヶ月の後の一五二二年九月六日のことである。船員等は結局三年と二十七日間スペインを離れてゐた譯であり、一萬四千六百リーグ以上の航海をしたことになる。

ヴィトリア號よりも大きい航海能力で劣つてゐると考へられたトリニダダ號は、親切なティドールの島で修理された後、かのバルボアがはじめて「南の海」を發見した地點たるパナマの海岸に向つて太平洋を東方へ出發した。エスピノサ船長は、この地方の風向きについて全く無知であつたため、この恐ろしい凄い逆風のコースを選んだのである。——この未知の海の吼ゆる四十度線(譯註、南緯四十度と五十度の間の浪荒き地帯をいふ)を困難と闘ひながら東に向つて。

トリニダダ號はモルッカス群島を離れて太平洋の眞只中に乗り出した。彼等を海賊として拿捕すべしといふ命令をポルトガル人が出してゐることは、ティドールにゐる時に既にエスピノサの耳に入つてゐた。しかし、微風を受けてしか進めない程の貧弱な裝備のこの船が、向ひ風に抗しながらどの程度まで東の方に行き得たかは誰も知らない。唯、歴史上重要なことは、トリニダダ號がポルトガル人に捕獲されたことと、その時に、マゼランの唯一の信憑すべき記念品たる日課表が——それは星運の悪い占星術家サンマルチンが寫してもつてゐたものであるが——甲板上で發見されたことである。

ス ペ イ ン の 海

マゼラン航海後の一世紀の間は太平洋はスペイン人の海であつた。しかしながらその間に太平洋を横斷したドレーク(Drake)カヴェンディッシュ(Cavendish)スピルベルゲン(Spilbergen)の徒は、唯荒らし廻り掠奪したのみで未開拓地方の、いはゞ白晝強盜に過ぎない。大洋も、その齋らす好機會も、凡てスペイン人が専有し、三世紀間に互つて多くの島と海岸はスペインの支配下にあつた。尤も後になるにつれスペインの支配力も漸次弱まつて來、且また今日においては、最初に發見されてスペイン王室の植民地として最後まで残つたフィリッピン群島もマゼランの發見から三百七十七年後、一八九八年デューイにより奪回されてしまつて、スベ



ン領土は全く消失してしまつてゐるが。

さすがこの廣大な海も、その後の相次ぐ多数の航海者に對して、惜しみなくではあるが、その秘密をあかして行つた。十六世紀の後半から十七世紀の前半にかけての數十年間の航海は、地理的發見に成功したものの以外には、大して記述するに値しない。しかしともかくこの期間の終りには、船の行き得る場所で白人の見ない海は太平洋には殆ど残らなくなつた。しかしスペイン華やかなりし頃の政治家は、現在の膨脹時代の政治家程ガツガツしてゐなかつた。ヴィトリア號が、香料の積荷と立派な報告を携へてサンルカルに歸港してからこの「南の海」を横斷して海路香料諸島との通商を發展せしめようと企てるまでには、なほ三年の月日経つてゐるのである。

一五二一年にガルシア・ホフル・デ・ロアイサ (García Jofre de Loaysa) が提督となつて、スペインを出發し、マゼランのコースを辿つた。若年ではあるが、最初の世界一周者としてスペインに歸つたセバ스티アン・デル・カノは、一船の船長兼副提督としてその艦隊の水先案内の役を引受けた。しかし、ロアイサは東洋に止まり、モルッカス群島の統治者となる豫定であつたので、それ以後はデル・カノが艦隊の總指揮官を引受けることになつてゐた。

太平洋に乗り出すことは、マゼランの恐ろしき經驗の後であるから、容易に企てらるべきことではない。大艦隊はサンルカルを出帆した。積載噸數百七十噸のアモンシアダ號 (Anunciada 戒律號) は、大西洋の藻屑と消え、百三十噸のサンガブリニル號 (San Gabriel) は嵐に

襲はれ、恐ろしい凶兆におじけつた。その船の乗組員は、艦隊を脱走してスペインに急ぎ歸つた。そしてその船の消息についてはその後再び聞かれなくなつた。デル・カノの指揮する二百噸のサンテイ・スピリツス號 (Santi Spiritus) は、マゼラン海峡で坐礁し、デル・カノは旗艦のサンタ・マリア・デ・ラ・ヴィトリア號 (Santa Maria de la Victoria 勝利のサンタ・マリア號) —— 三百噸 —— に移つた。老いたるロアイサと勇敢なるデル・カノの二人の指揮者は、二艘の帆前船と一隻の大形短艇を従へて太平洋に乗り出した。

二回目の太平洋横斷たるこの航海が如何なるものであつたかは、マゼランの時の航海から想像する以外に方法はない。一行にはピガフェツタの如き堅忍不拔の記録係がゐなかつたのである。彼等は遙か彼方の東洋の島々でポルトガル人に對抗してスペインの權益を伸展するやうな仕事を澤山にしたが、しかし旗艦はモルッカ海峡の東方、ティドールの小島で沈没し、ロアイサ提督もこゝで死んでしまつたし、セバ스티アン・デル・カノもその後間もなくインド諸島で死んでしまつた。

中部太平洋における初期の大きな陸地發見は一五五五年の航海中に行はれた。その他の多くの發見の場合と同じやうに、この時の記録も漠然としてゐて詳細は不明である。その出來事が當時注目されたといふことと、ファン・ガエタノ (Juan Gaetano) といふ男が西の方に航してゐる間にナヴィダードの千リーグ程西方北回歸線の南方にある一大火山島群に

辿りついたといふことのほかわれ／＼には分らない。

ガエタノの船或は艦隊はどういふものであつたか。何時か將來になつて、セヴィラにおいてか、或はもしかしたらメキシコ邊りで、當時の航海日誌がインド諸島年誌の中に収録されて世に出ることがあるかも知れない。大規模な調査、分類、編纂の事業が行はれて、その時にガエタノの発見が確證される日が来ないとも限らない。いづれにしろ、ガエタノの発見はバルボア以後半世紀間の太平洋の歴史に屬する事件である。そしてそれはともかくとして、太平洋は餘りに廣大なるが故に、ハワイはその後も暫らくは発見されなかつた——ガエタノ以後二世紀以上の間も。

太平洋に通商路を開拓して香料諸島に植民地を打ち建てようといふ試みの中で最初に成功したのは一五五九年である。即ちバスク人にしてメキシコ市の官吏たるミグエル・ロペス・デ・レガスベ (Miguel López de Legaspe) の指揮の下に五艘の艦隊がナヴィダドを出發したが、その年に四百人の乗組員と共に聖ラザルス群島 (Islands of St. Lazarus) に到着した。聖ラザルスといふのは、マゼラン一行が文字通りにラザロの復活の奇蹟をその島で経験したので、マリー皇后の兄弟のためにマゼランが命名したのであるが、一五四二年にこの群島は、皇太子フィリップ二世——後のフィリップ二世——の名をとつてフィリップピン群島と改名された。

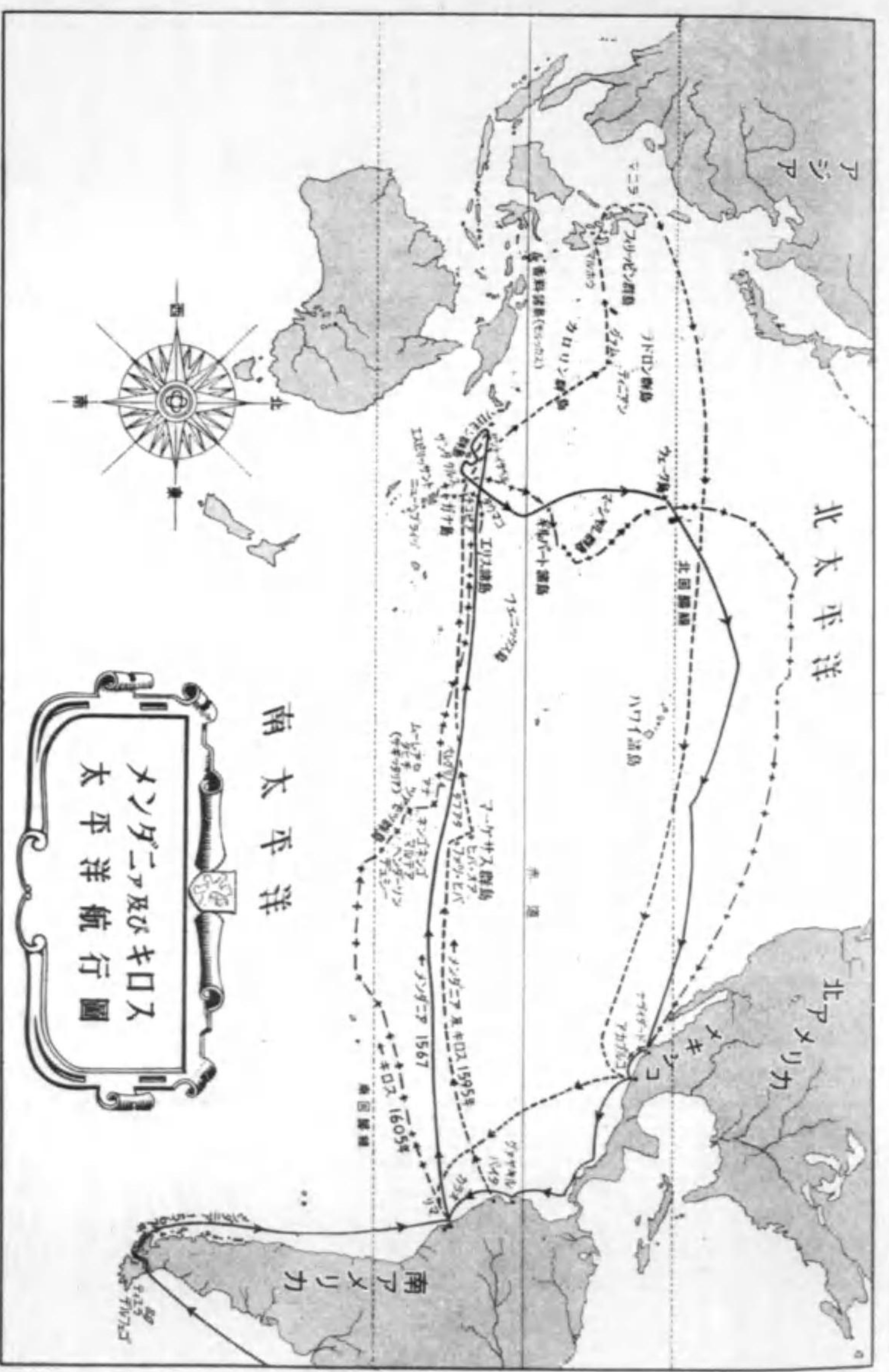
レガスベの船は西に向つて進んで行つたが、その艦隊には二十二年前ロアイサの時の水先案内としてモルッカス群島に行つたこともあり、その後はアウガスチン派の僧として聖職にあつた老僧アンドレス・デ・ウルダネタ (Andrés de Urdaneta) も随行した。フィリップ二世の訓令書には、香料取引路を確保すべく飽まで努力し、しかも通商は遲滞なく行ふべしといふ矛盾した指令、或は寧ろ訓戒が書かれてゐた。このやうに急いだ理由はフィリップ二世が早く報告を聞きたがり、且つニュー・スペイン大陸への最上の歸路を確かめたがつてゐたからである。「歸路に際しては遠征隊のニュースと共に出来るだけ多くの財貨を持ち歸るべし」ともその訓令書には書いてあつた。王はまたレガスベに、フィリップピンの近邊にある全部の島或は陸地を占領し、土人をキリスト教に改宗さすべく努力し、且つ歸路を發見すると共に、取引或はそれから生じた利益は残らずスペイン王室のために保留すべしとも命令した。

一五七一年老レガスベは苦難の運命を背負つたマニラ市を建設した。そして貪慾なる商人がフィリップ王のために持ち歸る香料を船艙一杯積込むに際して、人間の飽くなき貪慾な心は、遂にレガスベをも掠奪者の一人たらしめずにはおかなかつたのである。

ペルーが征服されてから次に西太平洋の植民地が建設されるまでの間に、ずつと掠奪船を指揮してゐたのは驚嘆すべきスペイン人の航海者二人である。そのうちの一人たるベ

ドロサルミエントイ・ガムボア (Pedro Sarmiento y Gamboa) はインカ帝國の歴史を研究して、嘗つてインカツバク・ユパンキ (Inca Tupac Yupanqui) が西の方から金銀や銅冠や黒人奴隸を持ち歸つたといふ傳説の陸地のことを學んでゐた。またインカツバクは馬に似た動物の皮を持つて歸つたともいはれてゐたし、またその時の航海の途中驚くほど豊穡な島を二つ発見したとも傳へられてゐた。しかしその島は——或は陸地は一體何處にあるのか、サルミエントは傳説の島はティエラ・デル・フエゴから緯度十五度以内に擴がつてゐる一大大陸の離れ島のことであり、それは太平洋中の何處かにあるといふ確信をもつてゐた。この巨大なる太平洋大陸に關する傳説は、その後も先入觀念となつて約二世紀の間人々の頭に頑強に残つてゐた。それは明らかに遙か古代にその起原を有する太平洋傳説の一部をなすものであり、マゼラン以後もなほ數世紀の間、航海者達はこのありもしない陸地を發見しようとして努力し續けた。

サルミエントは單なる一介の船乗りではなくして、數學者であると同時に發明の才能にも恵まれてゐた。そして彼の太平洋大陸に關する豫言は危險思想として宗教裁判所の注目をひいたが、幸ひにもベルーの總督の配慮により、彼は遠征隊を組織して出帆することとなり罰を免れた。司令長官にはベルー總督の甥にして當時僅か二十五歳の若冠であつたアルヴァロ・ロデメンダニャ (Alvaro de Mendaña) がなつた。ロス・レイエス號 (Los Reyes 諸侯號) といふ二百五十噸の船とトド・サントス號 (Todos Santos 全聖者號) といふ百七十噸の船の



メンダニャ及びキロス
太平洋航行圖

二艘が装備され、百五十人の乗組員——うち半数は兵士——が乗組んだ。なほ四人のフランスカ派の僧侶と多数の奴隸が行を共にした。かくて一五六七年、西の方に横はる未知の海に挑戦して行つた。彼等は、話に聞く太平洋大陸に着いて、凡ゆる異教徒を改宗させ、植民地を建設する積りであつたのである。

メンダニャは生來の航海者ではなかつたが、特徴ある人間味のある若い紳士であつた。

——紳士といふ言葉が野蠻人に對してもなほ何等かの感情を持ち得る人を指すものとすれば。艦隊はカラオ(Callo)を一五六七年十一月十九日に出帆したが、最初の二十六日間は何等變つたともなく西に向つて走り續けた。尤も出帆後二日目に旗艦カピタナ號が安眠中の鯨にぶつかつたことはあつたが。しかし間もなくメンダニャは船の進路についてサルミエントと意見が合はなくなつた。水先案内達は海鳥の飛んでゐる方向に陸地があるに相違ないと主張した。飲料水は段々少くなるのみでなく不味くなり、飲むに堪へなくなつた。二、三の見慣れない島が現はれた時、メンダニャの第一水先案内人で經驗あり才幹の士であるエルナン・ガレゴ(Hernán Gallego)は、それは陸地に違ひないと主張した。かくて海上を航行すること六十二日の後、赤道以南の地において彼等ははじめて陸地を見た。即ちイエス島(Isle of Jesus)である。メンダニャはそれに近づくやうに命令したが、ガレゴはそれは無人島に違ひないと考へて反對した。しかし遂に丸木舟が見えて來たが、一行の艦隊は強い潮流のために押戻されてしまつた。加ふるに颱風により更に南に流されたため、再

び十九日間海上を漂ふ始末になつた。その間海面を走つてゐる白い岩礁の線を横切る時危く遭難を免れたやうなこともあつたが結局ソロモン群島(Solomons)に辿りつき星の灣(Bahia de la Estrella)に投錨した。この島を彼等は聖イサベル(Sr. Isabel)と命名した。そして周囲の群島で仕事をするための小さな帆船を造つた。

メンダニャはガレゴ及びサルミエントを従へて更に北上したが、逆貿易風に遭ひ、東に轉じて南カリフォルニアに向ひアカプルコ(Acapulco)灣に入港した。今や彼等ははじめてインカ帝國の傳説の傳へる大陸を見たのである。彼等の困苦もマゼラン等のそれに劣らないものがあつた。それから更に南下して一五六九年九月には「帝王の街」の港たるカラオに投錨した。西へ向つて出帆してから二十二ヶ月目である。それは大がかりの航海であつたが、嵐に襲はれたり飢饉に攻められたりした以外には別に變つたこともない平凡な航海であつた。

メンダニャは「南の海」を横断して珍らしい島々を發見した青年として、一五六九年以來約十五年間はその功績を語り傳へられながら榮光の生活を送つてゐた。その後も度々更に探検を続けさせてくれるやう王に嘆願した。その結果ある時は王の御意に適つたこともあるが、ある時は御不興を蒙り暫らく牢獄生活をすることもある。その間イギリス人ドレーク(Drake)は既にチリやペルーの海岸を荒し廻り、更にニュー・スペインにも向つてゐる。

だが、スペインでは暫らくの間は赤道以南の西太平洋への横断事業熱は忘れられてしまつたかのやうであつた。しかるに一五九五年になつてアルヴァロ・デ・メンダニャは再び四隻の船に四百人の乗組員を乗せて航海に乗り出したのである。今度の水先案内長は色の淺黒い丈の高い瘦せた夢想家のペドロ・フェルナンデス・デ・キロス(Pedro Fernandez de Quirós)である。

メンダニャはイサベル・デ・バレットス(Isabel de Barreto)と呼ぶ若い妻を伴つて行つた。彼女はその舉措から考へて、あばずれ女であつたやうに思はれる。メンダニャの三人の義兄弟並びに不必要なほど澤山の士官等も隨行した。結婚した男五十人、その妻君等及び家族もそのうちにゐた。そして移住する積りで、財貨や什器類を船艙に澤山積込んだ。既に出發の時から食糧に不足してゐたので、メンダニャは途中一隻の船を攻撃してこれを捕獲し、それを妻の名に因んでサンタイサベル(Santa Isabel)號と改名して艦隊の中に加へ、古いボロ船を一隻捨てた。

メンダニャの最初の計畫では新しい地方に三つの城塞都市を建設し、牛、馬、羊、山羊、豚等を持つて行つて牧畜を行ひ、且つ彼の死後も二世代に亙り新しい植民地の排他的統治權を譲り受ける積りであつた。その計畫通りに行けば、恐らく彼は多數の奴隸を擁し、十年間は買納を免ぜられ、金銀貨を鑄造する權限を與へられ、その上に侯爵の位を得たことであらう。しかし昔の發見家の多くの例に洩れず、これも取らぬ狸の皮算用に終つた。かゝる皮算用

は多くの太平洋遠征隊の人々に極めてありがちなことである。老獺なこの大洋は、大賭博者の賭金を奪ひ取つて、別の人にそれを拂ひ戻すことが多い。

扱て一五九五年六月十六日にこの大艦隊は東貿易風の來るに先だつてペルーのバイタ(Payta)を出帆した。七月二十一日彼等は一つの島を發見し、これにメンダニヤはラ・マダレナ(La Magdalena)と名を付けた。そして一同はソロモン群島に至る道が意外に近いのには有頂天になつた。島の土人に對しては最初は親切にやさしく取り扱つたが間もなく一人の船員が土人の娘を犯したことから、土人の暴動を惹起し、これに對する復讐として多くの土人を慘殺してしまつた。

これらの島はソロモン群島でないやうに思はれた。投錨して一週間の後、そしてまた哀れな土人達に罰を加へてから數日の後、メンダニヤはポルトマドレ・デ・ディオス(Port Madre de Dios)に於いてこの群島を正式に領有した。祈禱、嚴肅な大彌撒、莊嚴なる禮砲の後、この群島はスペイン王のものとなつた。メンダニヤはこれら群島をメンドカ侯爵の名をとつてラス・マルケサス・ド・メンドカ(Las Marquesas de Mendoca)と命名した。そのほかタフアタ島(Tahuata)はサンタ・クリスチアナ(Santa Christiana)と、ヒバ・オア島(Hiva-oo)はラ・ドミニカ(La Dominica 日曜島)と、またフツ・ヒバ島(Fatu-hiva)はサンタ・マダレナ(Santa Magdalena)と、それぞれメンダニヤにより改名されたが、今日までその名が残つてゐるのはマルケサス島のみである。

陸の女達についてメンダニヤは「こゝの女達は非常に綺麗だ。彼等をリマの女等と同じやうに美しいと思つた人も多かつたが、リマの女のやうに赤くなく、寧ろ白い。リマに連れて來ても非常に美しい部類に屬する女共だ。」と語つたことがある。

太平洋の大きな地圖を擴げて見ても、この群島の位置は判然としない。一五七〇年より十七世紀の終りに至るまでの間、「南の海」の境界——といふより水界——については殆ど知られてゐなかつた。サルミエントが何を考へ何を希望してゐたかは前述の通りであるが、メンダニヤの今度の航海の時には、既に傳説のことも大分擴まつてゐた。一五七〇年に出來た有名な地圖によればマゼラン海峡はエテピクス海(Oceanus Aethiopicus)に始まり、芋の形をした南アメリカ大陸と、南半球一帯に擴がつてゐる「未知の南の大陸」(Terra Australis Nondum Cognita)の一部たるティエラ・デル・フエゴ(火の陸)との間を通つて、北西に抜け、「南の海」の太平洋に入り、以てこの巨大な海を劃つてゐるものとして畫かれてゐる。全ヨーロッパ大陸よりも大きな大陸に分け入り、その奇蹟を曝かうなどといふことは全く厚かましい限りである。

太平洋の歴史を繕いて見ても、これほど野卑で淫蕩な連中が、棕櫚の木茂る島々を荒し廻つたことは嘗つてない。老メンダニヤは種々の煩雜さに堪へかね、就中凄いほど美しい女ざかりのドナイサベルの罵詈に打ちのめされて、肉體的にも精神的にも完全に參つてしまつた。

そのうち彼等は周囲が百哩もあり「非常に綺麗な形をした山腹の頂から火を吹き上げ時々轟音を立てゝゐる」かなり大きな火山島に到着した。彼等はそれにサンタクルス島(Santa Cruz 聖十字島)と云ふ名を與へたが後にその島はカルテレット(Carteret)によりエグモント島(Egmont Island)と呼ばれるに至つた。彼等が到着した時五十人程の土人をのせた小さな帆附のボートが、一同の船の方にやつて來た。彼等は色は黒色で、羊毛のやうな髪を白赤青に染めてゐた。齒も赤く染め體にも色々な色の入墨をしてゐたが、皆臆病な人間共であつた。その島には黄金は出なかつたが、それらの野蠻人等は腕に黒色の藤の腕環をはめ、頸には珠數や魚の齒を巻いてゐた。そしてスペイン人等の方から何等怒らせるやうなことをしなかつたのに、野蠻人等は矢の雨を降らして來た。艦隊は直ちに火繩銃でもつて應戦し、一人を殺し、多數の野蠻人を負傷させた。

しかし直ちに友好關係が恢復され、マロペ(Malope)と名乗る瘡せた「小麦色の皮膚をした」白髪の老酋長がメンダニヤの友人になつた。そして恐らくはスペイン人の作つた城塞の最初のものかも知れないが、海岸に村落が作られた。その中には井戸も掘られてあり共同集会所や寺院や神殿等も建てられた。キリスト教會も建てられ彌撒も定期的に普通の方法で行はれた。しかし植民者の亂行を阻止せんとした土人等は突き刺されたり射殺されたりした。

移住者等は、この殺風景なところを早く引き上げて、キリスト教徒の街たるマニラに赴き

たいと思つてゐたし、船員等もそれを望んだ。然しキロス(Quitos)はこれと反對にこゝに踏み止まり、仕事をなすべきだと考へた。陸の移住者等の宿舍長は暴動をおこしたが、ドナイサベルの命令で殺されてしまつた。陸の者の生活はキロスの心配した通り放蕩を極めてゐた。二人の兵士が殺され、その首は切斷されて曝物にされた。ドナイサベルは陸にかけつけて、震へてゐるメンダニヤを嘲笑した。老酋長マロペも殺された。それを殺しに行つた一隊の旗手も殺され、首を取られた。三人の首は櫓の上で並べられたまゝ腐つて行つた。やがてスペイン人等に病氣が襲つて來た。天の呪ひである。メンダニヤは重態に陥りド・ロレンゾ(Don Lorenzo)が隊長の事務をとつた。毒を盛られた鼠のやうにバタ／＼仆れて行くものが増へた。牧師が宿舍中の人に懺悔するやうにいつて廻つた。數年間一度も懺悔をせず、罪を背負つたまゝの人が多かつたのである。中には生れてから一度しか懺悔したことのないものもゐた。土人はマロペを葬たむかふために、殺されたスペイン人の旗手の首を先頭に攻め寄せて來た。そして遂にメンダニヤはそこで死んでしまつた。

ドナイサベルは若い綺麗な情夫ドン・フランシスコ・デ・カストロ(Don Francisco de Castro)と直ちに結婚した。ド・ロレンゾは足に傷を受けて死に、遠征隊について來た牧師もその後五日して後を追つた。記録の中では婦人や子供の事については何等言及してゐないので分らないが、男で残つてゐるのは僅か十五人になつた。すれからしの下女等は船中に残つてゐた。十一月十八日に遂に彼等は「惡魔に掴まれてゐる」サンタクルス島を去つた。

病人や瀕死のものを乗せて逃げ去りながら、彼等はそこを「地獄の八丁目だ」と罵つた。

副旗艦は既に群島中を漂つてゐる時になくなつてしまつてゐた。右の年誌編纂家は一行はサンタ・クルス島からマニラへの航海を試みたとだけしか書いてゐない。——メンダニヤの遺骨の側にありながらもドナ・イサベルにとつては新婚旅行であり、食糧はなく水は缺乏しつゝも淫蕩な生活を續けて行つた。

イサベルは船の貯藏所の鍵をもつてゐた。キロスに殆ど決定権をもたず、せいぜい一同のために油壘二瓶をイサベルに出してもらう位のことしか出来なかつた。彼は極力水を節約しようとしたが、イサベルは自分の着物の洗濯に水を使つた。「妾のものを妾が使つていけないのですか」と彼女はキロスに喰つてかゝつた。船員等はイサベルが俺達の血で下着を洗つてゐると不平をいつた。

遠征隊はマニラに到着した。ドナ・イサベルと老メンダニヤの後継者デカストロとはベルーに戻つた。キロスはガレオン船(譯註、往時スペインで使はれた三層甲板の大帆船)に乗つて東へ航海を續け、アカプルコに一五九七年十二月に到着した。そしてそこからベルーのリマ市に戻つた。

キロスについては詳しいことは分つてゐない。一五六五年にポルトガル人として生れたが、一五八〇年フィリップ二世によりポルトガルがスペインに合併された時から、スペイン國に仕へた。少年時代はリスボンの貧民街で育ち、後貨物取扱商人となつたが、更に轉じて船員となり、水先案内となり、有能さを發揮した。しかし彼の人格を知るにはドン・キホーテの物語りを讀むのが一番早道である。キロスは船乗りであり、セルヴァンテスは騎士であつたが、共に同時代の人間であり、この世にあつて次の世を夢見てゐた人々である。實行不可能な明瞭ならざる、しかも打勝ち難きことを夢みた人である。キロスの探し求めたものは存在せざる巨大なるもの——太平洋大陸であつた。

キロスを招き寄せたものは、かのインカの傳説が教へ、サルミエントが信じ、そしてかのオルテリウスの大地圖に書いてあると同じ一聯の西方の海洋である。キロスは、大太平洋の何處かに廣大な大陸が存在するに違ひないと考へ、そこに住む數百萬の異教徒を救ふ積りで來た。財寶に充満してゐるこの大陸、否何にもましてイエス・キリストの血により救はれずんば必ず地獄に墜ちて行くにきまつてゐる幾百萬の偶像崇拜教徒の棲家たるこの大陸を大洋中に發見して信仰を弘めねばならない。——これは理論でもなければ、單に教へ込まれた觀念でもない。正に人生の凡ゆるものに優つた最高の義務であるとキロスは考へたのである。

キロスは航海中に受けるであらう苦しみについては充分覺悟してゐた。——瘧血病、渴苦惱、それらこそはやがて勝利の冠をもたらしめるものであると。苦惱を覺悟し、それに堪へ得るかやうな人々に對しては、普通人の夢想し得ざるほどの餌を與へねば駄目である。

しかしその頃歐洲は混亂のさなかにあつた。オランダは一五八一年獨立を宣言したが

ポルトガルとスペインの統治者たるフィリップ二世の權威は最高に達し、地上の如何なる富もまゝならぬものはないやうに思へた。オランダ人の勢力は未だ大したことはないし、エリザベス並にその部下の海賊共を打ち破ることも容易に出来たであらう。しかしフィリップ二世が一五九八年死ぬと共に、その無敵艦隊も打ち破られた。フィリップ三世は恐らくもつとおとなしい人であつたのだらう。

ペルールの總督は、太平洋大陸發見の如き巨大なる事業の費用を自費で賄ふことは出来なかつた。そこでキロスに直接スペインに行つて主權者の前で彼の野心を開陳するやう勧め、フィリップ三世あてに紹介状を書いた。キロスは東航路を通つてスペインに着いた。時正にキリスト教が勝利を博したかの記念すべき年一六〇〇年である。彼は先づローマに巡禮して太平洋の大事業を後援してくれるやう嘆願することに決心した。そこで有るだけの金で巡禮の服装をととのへ、杖を作り、イタリーの海岸まで船で行つて、そこからローマまで歩いた。そこで彼はスペインの使節のセサ公爵(Sessa)に親書を捧呈した。セサ公爵はキロスの誠のこもつた熱心な手紙に感動して早速地理學者、數學者、水先案内人等を召集してキロスの計畫を検討せしめた。

みすばらしい服装をしたキロスを取圍んだローマのこれらの碩學等も、彼の大雄辯に動かされて、身自ら鏡のごとき海を渡つて、この世の天國ソロモン島に赴き、未知の西半球、未だ發見せられざる謎の大陸、異教徒の住む暗黒世界を目前に見たやうな思ひがした。キロス

は辯じた。凡て物には陰と陽がある、自然は海と陸と半分づゝ作つたに違ひないと。學者等はこの論理に心を打たれた。公爵は、そこでキロスが特別に法王クレメント(Clement)に目通り出来るやうに計つた。傳道航海者は、そこで再び彼の考へを述べ、クレメントから祝福を受けた。そしてローマにおいて二年間に亘る周到なる調査と祈禱の後、キロスはスペインに舞ひ戻つた。——本物の十字架と法王の親書と、セサ公爵から王宛の手紙と、そして學者等の尨大なる報告書を背負つて。

しかしスペインでは、彼について疑をもつものがあつた。この貧乏くさい狂信者キロスは一體そのやうな重大な使命を託されるほどに偉大なる人物であるであらうか、彼は實際に航海して来たのかも、もしさうだとすれば、何故彼はそんなに貧乏なのだらうか、スペインの王立委員會は彼を支持し、有名なインド委員會はそれに反對した。結局、王はペルールの侯爵に對して彼のことを照會した。その結果、王室の財政收入の中から、二隻の船の裝備費が支辨され、澤山のフランシスカ派の僧侶が隨行することとなつた。キロスは全權を與へられたが、手紙のほかは一文なしであつた。そしてアメリカに向けて出發したが、西印度諸島で難船してしまつた。結局ヴェネズエラのグアイラ(Guayra)に到着し、そこで八ヶ月間滞在せざるを得なかつた。

王の親書は植民地の役人等を驚かしたが、彼等の心を動かすことは出来なかつた。しかしキロスは、債權者達から借金を取立て追ひ廻され、彼の取者からも金を拂ふやうわめき散

らされたが、これらの苦難の中にあつても、彼は孤兒になつた二人の甥を引取り面倒を見た。パナマでキロスは救貧院の宗教的儀式に参列した。しかし雑沓のため建物の床が崩れ落ちて、そのために怪我をし十週間ほど床に臥した。そのうちに少しよくなつたので、小舟に乗つてベルーに赴いたが、食糧と水の不足のためカラオに甥と共に上陸し、リマまで歩いて行つた。リマでも一文なしのために慈悲深い陶器屋の情けで宿をとつた。

それから数々の苦心の末、キロスはやつと總督邸に手紙を届けることに成功した。總督ドン・ルイス・デ・ヴェラスコ (Don Luis de Velasco) は、その嘆願者の雄辯と熱意に動かされた。就中フィリップ王の親書にはキロス自ら「これらの謎の海の彼方に遠征隊を率ゐて渡り、迷へる魂を救ひ、スペイン王室の領土を作る」べしとの王の命令が記載されてあつた。奔放なドナ・イサベルにそのかされて、彼女の夫ドン・フェルナンド・デ・カストロは、キロスの企てに反対して、ゾロモン群島におけるメンダニャの権利を守らんとした。しかし、何ものもこの火のやうに熱したキロスを押し止めることは出来なかつた。僧侶共は集つて彼を支持した。六人のフランシスカ派の僧侶と聖ジョン派に屬する四人の乳兄弟が彼に隨行することになつた。三百人の船員——スペイン人あり、ポルトガル人あり、フレミング人あり——と三隻の船、即ち六十噸のサン・ペドロ・イ・パウラ號 (San Pedro y Paula) 四十噸のサン・ペドロ號 (San Pedro) と一隻の小船が集められ、又總督の命により、一年分の食糧が甲板に積まれた。ビスケットの罐と數百壺の清水——樽詰の水は腐敗する惧れがあるので壺に詰

めた——も積込まれた。また新しい大陸で飼育する積りで積込まれた山羊、豚、雞、牛等の家畜が狭い甲板の上で騒ぎ廻つた。鐵製の農具、交換用の品物、果樹、種子、彌撒用の蠟燭等も積荷の中に入つてゐた。カラオの港はじまつて以來の壯大な企てである。小さな癖に沈みんばかりに荷を積んだ船。雑沓する甲板。大事業を控へて港は湧きかへつた。

キロスはその艦隊をロレット女王に獻呈し、士官全部と共に自らもフランシスカ派の僧侶の服裝を着た。そして奪回八年の甲斐あつて、一六〇五年十二月二十一日——時正に南半球の夏至である——灣の南にある黄色い岩島のサン・ロレンソ島 (San Lorenzo) に別れを告げて出帆した。埠頭はもとより港の船家の屋根、展望臺は黒山のやうな人ばかりである。満船に大旗小旗を張りめぐらした艦隊はリマの後の山から吹き降す陸風に帆を膨らましなから、鳴り響く喇叭、轟き渡る禮砲、萬歳の歡呼に包まれて出發した。「われ／＼は神に奉仕し、信仰を弘め、わが君の名譽を高めるといふ善き意圖を以て出帆した。われ／＼にとつては困難なことは何一つないやうに思へた」と水先案内の一人ゴンサレス・デ・レサ (González de Leza) は書す (p. 29)。

有頂天になつた司令長官キロスは、段々自分を使徒の如く想ひ出した。彼は唯、方向書をもつてゐるだけである。彼は航海と救世とを混同してしまつた。上級士官にして旗艦の艦長たるドン・ディエゴ・デ・プラド・イトヴァル (Don Diego de Prado y Torva) は、直ちに彼の激しき敵手となつた。ルイス・ヴァエズ・デ・トルレス (Luis Vaez de Torres) は副旗艦の艦長であり、

ルナール・セルメノ (Bernal Cermeño) は小艇——艦隊中では最も航海に適した船であつたらしい——の艦長であつた。水先案内長フアン・オチョア・デ・ビルボア (Juan Ochoa de Bilboa) はキロスの希望に反してベルーの總督が一行中に加へたものであるが、この男までが紛糾に一枚つけ加はつた。——その前にも後にも滅多に見られないほどの大紛糾に。

キロスは病氣に襲はれてゐる時でも、その命令は嚴格を極めた。狭く閉ぢ込められた船中、雞や豚や牛の騒がしい鳴き聲、汚物の悪臭、熱帯の夏の熱さ、羽のはえた毒虫、風にはためく帆の音や柱の軋る音、その苦勞は想像に餘りあつた。水先案内は司令長官の命じたコースをとつてゐたが、船員の仲間が餘りに多すぎたため、怠けるものが生じ、悪い遊びをするものが出来た。キロスは賭博臺やカードや骰子を一切海中に捨てるやう命じた。彼の命令は彼の忠實なる祕書にして長き苦しみと共にして來た詩人ベルモンテ・ベルムデス (Bernate Bernudez) が寫し取つたが、それは一卷の書をなすほどに澤山ある。例へば一六〇六年一月八日の命令の中には島影を認めたことに關するものと並んで、神様のこと、徳義に關すること、食事についての注意、土人の取扱ひ方に就ての訓戒、航海についての注意等が雜然と見られるのである。

彼等は南回歸線附近の珊瑚礁の海を横切つた。鎖の如くつゞいてゐる無人島の群を認めた時には、海は飽まで緑青色をしてゐたが、彼等の飲料水は缺乏して來た。そこで海水を蒸發させて清水をとる機械を用ひて五十壺ばかりの水を得たが、——これが海上で海水を

蒸發させた一番最初の試みの一つである——今度は燃料が不足して來た。

一六〇六年二月十日の朝、橋上の見張人は前方に陸地が見えると報告した。段々上つて來た太陽の光でよく見るとそれは山であつた。接近して行くにつれ、歓迎の合圖か警戒の合圖か分らないが、煙が環になつて立上つてゐるのが見えて來た。艦隊は停つた。キロスは一隻のボートを降ろして使ひに出した。海岸では岩蔭に百人ばかりの土人が集つてゐた。

それは現在アナア島 (Anaa) 若くは連鎖島 (Chain Island) と呼ばれてゐる島である。キロスが太平洋中で認めたり、上陸したり、發見したり、再發見したりした一聯の珊瑚礁や小島や岩礁の中で主なものは、ラ・エンカルナシオン島 (La Encarnacion 化身島) 即ちデュシー島 (Ducie Island 譯註、南太平洋上にある島)、サン・フアン・パウティスタ島 (San Juan Bautista) 即ちヘンダーソン島 (Henderson Island)、聖エルモ島 (St. Elmo) 即ちマルテア島 (Martea)、ラス・クアトロ・コロナダス島 (Las Cuatro Coronadas 四人の僧正島) 即ちアクタエオン群島 (Acræon Group 譯註、ツファモツ群島中の一島)、サン・ミグエル島 (San Miguel) 即ちネンゴネンゴ島 (Nengonengo) である。

かくして五月一日には彼等は、ペレグリーノ (Peregrino 巡禮島) またの名ヘンテ・エルモサ島 (Gente Hermosa 美人島) に着いた。性に飢えた船員等は土人の小屋に押し寄せた。しかし侵入しようとした一人の船員は棍棒でなぐられた。そこで今一人の船員は土人を劍で突き刺し、更に火繩銃の口火を切つたので、土人等は死體をそのままにして遁走した。「彼等は

殆どキリスト教の信仰をもつてゐるに等しいから……」といつてキロスは彼等を葬つてやつた。

一方トレスに率ゐられた一隊は長さ六十呎、幅六呎もある大きな丸木舟を何隻も発見した。おとなしい土人等は、綺麗な席や織物や貝殻で作つた道具や、或はいろんなもので作つた魚釣針を捨て、逃げて行つた。その他スペイン人達は乾した牡蠣や眞珠貝等も発見した。しかしボートは寄波で顛覆してゐたし、水壺も大分失はれてゐたので、トレスは何も持ち歸らなかつた。一行は水不足のまま再び航海を續けて行つたが、乗組員の不平は益々募つて來た。滿々と水を擁して笑つてゐる大洋のさなかで、彼等は苦しみ、死に瀕したが、キロスは「これら小島の母島」を探し求めて止まなかつた。

再び賭博が始まつた。キロスは止めさせようとしたが結局煉獄の苦しみをなめてゐる人々からそれを奪ふことは出来なかつた。キロスは皆がもつと上品な仕事、即ち訓練とか體操とか讀書とか、地球や航海術の研究とかに熱中するやうにいつて聞かせた。

キロスのこの奇怪な航海を誰が解明し得よう。彼の動機は色々に説明がつくが、進路がはつきりしないことは帝國の本當の由來が専門家の間でも分らないこと以上である。彼は大陸を發見しようとしてゐたのか、それとも單に水中に没した大陸の僅かに残つてゐる頂きだけを見ようと思つたのか、彼は未發見の島々を次々に發見したが、満足しなかつた。海の側まで出て來て多くのほかの島々を指さして教へる土人の酋長も澤山ゐた。多くの

緑の山や火山の嶺や環狀の珊瑚礁などは船員等をまごつかせた。彼等はチョコピア島 (Chopin) や、ヌエストロ・ロ・セニョラ・デ・ラルス島 (Nuestro Señora de la Luz 後光さす處女マリア島) をも見た。

四月二十六日遂に彼は神秘的な大陸を少くとも認めるだけは認めたと確信し、それにテイエラ・アウストリアリア・デル・エスピリツ・サント (Tierra Australia del Espiritu Santo 聖心の南大陸) といふ名を付けた。一世紀半の後、ド・ブーゲンヴィル (De Bougainville) はその同じ陸地を見たが、それは全く島の集りで、それに「大群島」(Grandes Cyclades) といふ名を與へた。更にジェームス・クック船長 (James Cook) は、それをニュー・ヘブライツ島と呼んだ。キロスはそれにアウストリアリアといふ名をつけたが、それはアウストリア大公を兼ねてゐたフィリップ三世に因んだのである。

その所謂アウストリアリアでキロスはトレスに別れを告げ、赤道を横切つて北緯四十度の附近まで行つた。それは全く信じられない位の孤獨と困難との大旅行であつた。ニュー・スペイン海岸のアカブルコに到着した時は船艙は殆ど空っぽだつた。

キロスは歸國して後、國王に新陸地の住民は賢くて、すなほで、文明を受け入れる能力をもつてゐると報告した。木の上にパンがなつてをり、青い椰子は見るも壯觀である。棕櫚からは酒や醋や蜜や乳精や汁がとれる。不思議な椰子はまた朝鮮蕨の代りにもなり、熟すると肉やクリームもたべられる。また熟するまでの間には、油脂や蠟や香液がとれるし、その

穀はコップや壺の代りになり、繊維は最上の絹具になる。粗い繊維は大砲の火を遅らせるものに役立ち、葉は帆になつたり、家を葺くのに用ひられる。この南の大陸こそは天國であり、その富には限りがない。庭からはかぼちやや人蔘や「そら豆らしきもの」が取れる。しかも單に野菜の樂園であるのみでなく、椰子の實で丸々太つた豚や食用豚や、或は雞去勢雞、鸚鵡、鷺、七面鳥、珠數掛鳩、野羊等も豊富にゐる。恐らく「牛や水牛もゐる事と思はれる」。金、銀、眞珠の寶物もあり、香料としては肉蔻、荳蔻、胡椒、生姜があり「肉桂、丁香の類もあるらしい」。夜明の空氣は數千の小鳥——鶯、鶇、鶇、鶇、鶇、鶇——の交響樂で慄へてをり、蟋蟀の輕快な鳴聲も聞える。もつと詩人にならなければ朝のことは説明出来ない。オレンヂやメバウキの花の香のしてゐる朝露の景色を詩人ならぬ余に如何にして説明出来よう……と。

キロスは美しいアウストリアリアで彼や部下達が喰つてひどい目に遭つたあの熱帯魚のことにについては述べるのを忘れた。或はまたかの貝殼喇叭を鳴らし、毒矢を射つて襲つて來たインディアンのことについても觸れなかつた。なほまた自己として最善の道を盡すため、小船サン・ペドロコ號(San Pedro)に乗つて行つたルイス・ダ・エス・デ・トレスと別れた顛末についても話さなかつたし、壞血病で仆れたり、切り殺されたり、溺死したりした人のことも餘り觸れなかつた。アウストリアリア・デル・エスピリツ・サントの大陸について彼が想ひ出し得たものは、天國そのものゝ如き岸を持つたジョルダン河やサルヴァドル河のことだけであつた。

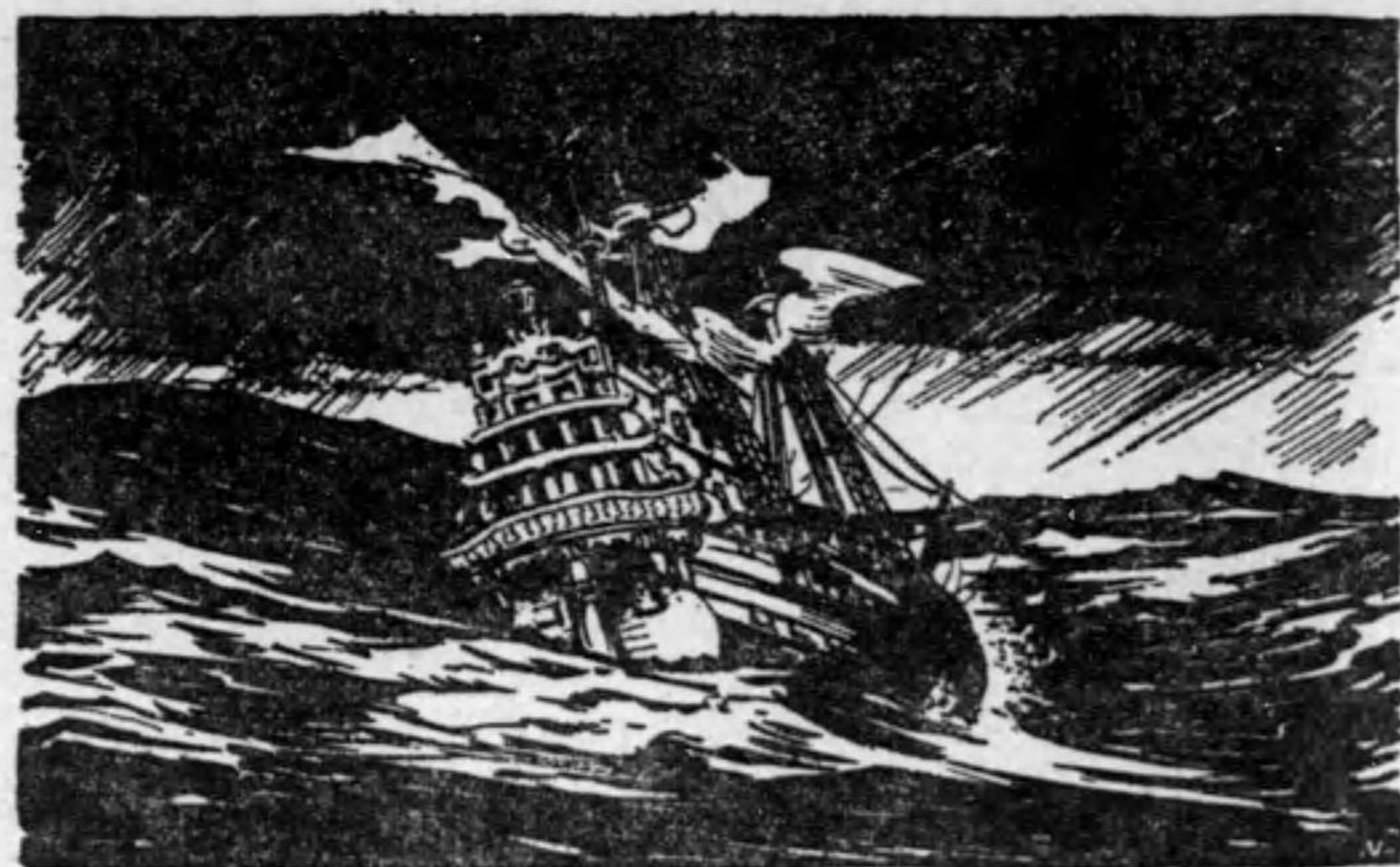
キロスは造船材料の黒檀や堅い木材のことについても話しながら、「私はこの大陸は現在でも二十萬人のスペイン人を收容し、扶養し得ることを數學者の席でも證明してお目にかけてよう。われ／＼の部下のうち誰一人として過勞や苦役や濕氣のために病氣になつたものはない。魚や水は二日以上とつておいても大丈夫である。私は沙漠や蘆や刺のある木や、マングローブの生えた沼、或は雪を頂いた山頂や鰐のゐる河や蟻のはつてゐる塵や蚊の喰つてゐる夜などは一度も見なかつた」と書いて、かゝる航海が相次いで企てられるやう力説した。

老いたりとも雖もキロスの眼光は烈々として人を射るものがあつた。坐食してゐる王や柔弱な大宮人等を壓倒するに充分であつた。しかしキロス自身もリニウマチで弱つてゐたし、齒も朽ちてをり、ゴツゴツした髭は少しも手入れしてなかつた。おまけに彼の着てゐる外套は、巡禮者の着る安つばいものであり、ピカピカ光る黄金も持ち歸つてゐなかつた。これに反して、マニラの貿易港に到達して大海峽即ちトレス海峡を通り、大陸の北端を横切つたかのトレスからは、數々の報告が宮廷に達して來た。キロスの無軌道振りが彼の指揮が無茶で出たらめなことや、彼の部下が土人に暴行を加へたり、賭博をしたり、棕櫚酒をのんだり、長いこと白人を惑はしそゝのかしてゐた極樂島に汚點を残したこと等も宮廷に聞えて來た。

キロスはフィリッポ三世の不興を蒙り、新しいペルー總督の隨行員としてペルー行き

船にのせられた。總督はこの老人を看視しておくやうにとの指令を受けてみた。キロスはバナマで死んだが、それはバルボアが「南の海」を発見してより百一年目の一六一四年である。キロスをスペイン最後の英雄的航海者であると評する昔の歴史家も多い。

船ンオレガ・ラニマ



マニラ・ガレオン船

スペインの太平洋発展の年代史所謂太平洋の発見、キリスト教の布教、海外貿易の促進、征服せる土地におけるこれら諸活躍の顛末及び植民地諸國の建設等々を一度に物語することは到底出来ない。それは丁度骰子の目を一度に出さうと試みるに等しい。一方ではメンダニヤ、サルミエント、キロス其他の人々が航海を續けてゐる時、フィリッピン植民地はレガスベの支配下にあつたのである。

赤道の北方所謂ハワイ諸島（當時同島はまだ詳細に互つて発見されてゐなかつた）の北方は地球上における最も廣大にして際限なき大海原が現在もなほ波打つてゐるところである。強力な暴風圏に屬するこの邊りの巨大な

海は、また北東貿易風に奔弄され、或は南からの逆貿易風によつて荒れ狂つてゐる。そしてこの邊りは現在でも東西の交通の要路であるが、往時においても約二世紀半に互つて、スペイン母國とその東方植民地との間を結ぶに役立ち得た。フィリッピンとメキシコの間を通ふガレオン船は實にこの歴史的な海を通つて、マニラ、ナヴィダド(Navidad)及びアカブルコの諸港を繋いでゐたのである。これらの港のうちアカブルコ港は現在も残つて繁榮してゐるが、その北方に位したナヴィダドは最早地圖に残つてゐない。

多少の缺點を持つてゐたとはいへ、それでもなほ數時代に互つて現並に航路の名パイロットとして、その名聲を謳はれたアンドレス・デ・ウルグネタ(Andrés de Urdaneta)といふアウガスチン派の托鉢僧が、サン・パブロ號(San Pablo)といふ古い船を指揮して東の方に來たのが、ガレオン船の太平洋に現はれた最初であつた。この水路探査船は、レガスベの孫フィリッポ・デ・サルセド(Felipe de Salcedo)の命によつて一五六五年セブを出帆したが國王の財的援助を受ける企業に有り勝ちな浪費と無能力を暴露してしまつた。しかし逆貿易風、所謂優勢なる西風を發見したことはウルグネタの功績である。サン・パブロ號は王室のために、かなりの量の肉桂をミンダナオで積込んだ後、三ヶ月半の短時間でアカブルコに到着した。

老アンドレ・デ・ウルグネタは、マゼランの發見した香料諸島から東方に向ふ最良の水路を發見した。そしてフィリッポ王、印度協會及びニュー・スペインの總督に宛てた報告書と地圖並に航海に關する深切な注意書は、その後二百五十年間に互つて航海せる千に餘る諸船

船のコースを開拓した譯である。即ち、彼等のコースは北緯二十度乃至十度の間の貿易風帯を西に向ひ、歸途は四十度の線すれすれまでに北上し、フィリッピンからカリフォルニア沿岸に至る大圓コースを通つて歸つた。そして四十度乃至三十五度の間で陸地を見ながら海岸傳ひに南下してアカブルコに到着したのである。

ガレオン船は、一五七一年、老レガスベがマニラ灣の海岸にスペインの統治地を確立し、マニラ市を創立した時以來、はじめてその重要性が認められて來た。彼は好戰的なモロ族の住むスルー島(Sulu)並にミンダナオ島を除き、残りのフィリッピン群島をスペインの領土として確保した後、同年末この世を去つた。——スルー、ミンダナオの諸島は、スペインの統治が終結するまで、否その後アメリカ合衆國の支配下になつてからも數年間は常に反亂を起してゐた。

支那との貿易は、セブからマニラに政府を移轉してから進展したのである。ジャンクは黄海、東支那海を横斷して航下し、また南支の諸港から或は廣東から東方の南支那海を渡つてやつて來た。そしてある時、ミンダナオ附近で難破した一隻の大ジャンク船の旅客と水夫達がスペイン人に救はれた時以來、支那の商人達はこれを大いに多として、翌年一五七二年早々にはこの助けられた商人達が、ジャンクに高價な品を満載してマニラ灣に入港した。そして彼等がこの新しい港にも市場の設備のあるのを發見して以來、他のジャンク船も彼

等の跡を追つて來ることゝなつた。メキシコは銀や洋紅を送つて支那の商品と交換し始めた。數世紀間に互つてメキシコの銀貨は交換手段となつたが特に支那においてさうであつた。マニラガレオン船が西に輸送したメキシコの銀は殆どベルギーで鑄造されたものであり、洋紅、カカオ及び銅は、大體メキシコの産物で、アカブルコから積載されたのである。ニュー・スペイン居住のスペイン人は、熱心に支那絹布とコロマンデルの高價な商品を買ひこんでマニラに集り、そこから大ガレオン船にのせて大洋を輸送した。象牙造りの扇子、白檀の箱、碧玉硬玉の寶石、彫刻したテーブルや箱、磁器、花瓶、唐金及び婦人用の裝飾櫛、そして一時禁止されたとはいへ東洋の寶石珠玉類——即ち大眞珠、高價なルビーやダイヤモンド、耳飾り、指輪、首飾り等がアカブルコに運搬されて來た。そのほかまたガレオン船は異教國の技工の手になる宗教的家具、十字架像、珠數、聖骨匣を持ち歸つた。加工されない寶石もアカブルコに運ばれたが、積荷の大部分を占めるものは生絲であつた。

絹布、金絲銀絲の刺繍、廣東縮緬及び見事な緞子等の支那製品の充滿した箱といふ箱は、全部番號が打たれ、積荷目録が作られて、ガレオン船の廣き船艙に押し込まれた。スペイン製の輕滑車のきしり、騾馬の貨物引揚げ、柵や大箱の双繫柱からの引き卸し、——それを荷役方や船荷監督達が叱咤し合圖し監視してゐた。絹やベルベットのボレロ服、スカート、寢臺掛け、緞子のテーブル掛け、衣裳類、外套、婦人服、其他華美な衣裳等がこれらの積荷の中味であつた。

香料や芳香高き藥草も廣き船艙に積込まれてゐた。ジャバ、セイロン及びモルッカスの諸島もその産物を送つて來た。藥品、樟腦、麝香、珊瑚も積み込まれた。グアヤキル (Guayaquil) 譯註、南米西岸エクアドルにあり) からはチヨコレイトを入れた荷物が澤山西方に輸出され、チク材、更に後年に到つては有名なマニラ製の煙草が歸りの船に積まれた。奴隸も頻繁に輸送されたが、アフリカの奴隸貿易ほどではなかつた。これらの奴隸は大部分召使としてフィリッピンから運ばれ、ニュー・スペインにおいて鎖に繋がれたまゝ賣買された。——尤もこれは一七〇〇年に禁止されたが。

この海上貿易は自然に起つたものである。太平洋を挟む兩岸の人々は、これらの商品の賣買により相互にその必要とするものを補充しあつてゐた。貿易の擴張に伴つて新しい慾望が生ずる。最古の文化が最新の土地と商業により接觸する。かくしてマニラは東洋の豊富な商品の倉庫となり、メキシコから貿易商人達を西方に吸引した。そしてスペインの統治者等は益々その権力と富を増して行き、遂には城壁を巡らした街を建設して、その城壁の中にアウガステン派、フランシスコ派、ドミニカン派の僧院を建てるに至つた。更にマニラにはサン・アンドレ (San Andrés) とサンタ・ポテンシアナ (Santa Potenciana) の立派な修道院が建築され、尼院長、尼僧、同宗の姉妹達は、海港の婦人や少女達を救つて有名になつた。ジェズイット派 (Jesuits) の居留地も作られ、且つマゼランが先鞭をつけた救濟事業は、その後數世紀の間續けられた。

太平洋貿易の隆盛は、フィリッピン人の他の活動をにぶらせてしまった。ガレオン船からの儲けは富裕者を奢侈にし、官公吏達も別の生活方法を考へるものは少なかつた。ガレオン船貿易を除いては、造船業即ち段々に大きくなつて行く船舶の建造業がフィリッピンの唯一の重要産業となつて行つた。

トーマス・カヴェンディッシュ (Thomas Cavendish) — 折々 Cavendish とも綴られる) に随行した一紳士フランシス・プレティ船長 (Master Francis Pretty) は、第三回目の世界一周航海において偶々遭遇したマニラ貿易に關係ある事件を誌してゐる。「一五八七年八月二十四日に司令官以下われ／＼三十名はプエルト・デ・ナティヴィダート (Puerto de Nativity) と呼ばれてゐるある港に行つた。……そこに白人と黒人との混血兒が一人寝てゐたので、われ／＼はそれをつかへた。彼はわれ／＼に關する警告の手紙を持つてネウヴァ・ガリシア (Nueva Galicia) の沿海から使ひに出されてゐたのであつた。われ／＼は彼の馬を殺し、彼の手紙を奪ひ、家々に火をつけ、造船臺の上で建造中の二百噸の新造船二隻を燃やし、彼を後に残してわれ／＼の船に引上げて來た。」と。カヴェンディッシュのデザイヤ號 (Desire) は積載量百二十噸、コンテンツ (Content) は六十噸、ヒュー・ガラント號 (Hugh Gallant) は四十噸であるから、それに比べればナヴィダートで建造されてゐた船は比較的大きな船で、また恐らくは大部分がマニラ貿易に充てられるはずのガレオン船であつたことだらう。しかし太平洋岸のメキシコ側で建造された船はどんな船でも、フィリッピンで進水した大船に比較すれば遙かに小さかつた。

太平洋横断者達が颱風圏内を通過し、日本の沿岸より離れる頃から、強風がアリゾーナ列島に近い大圓路に沿つて東に吹荒れ、そのため通行税として船や人命や貴重な積荷を取られることが多かつた。それで堅牢無比にして航海に耐へ得る船を建造しなければならぬといふのが彼等の結論であつた。そのためにアジアの良質にして且つ耐久力のあつた木材が容易に手に入るマニラとその附近が造船の中心地となつたらしい。

造船所の中心はマニラ灣のカヴィテ (Cavite) にあつた。フィリッピンで産する堅い木は造船に最適の材料であつたらしい。耐久力のあるチーク材は屢々龍骨の骨組、船首材、櫓等に使用された。スペインの海軍工廠から來た老練な船大工はこれらの大きなチークの梁材を加工したり、船全體を組立てる腕木を造つたりした。龍骨は注意深く磨かれた巨大な角材で作られた。船首肋材を支へる添材、副船首材、船首肘材、大きな肋材をとりつけた内龍骨等は皆手斧によつて造られ、大きな鍊鐵の金具で締められた。そのほか數百人の土人職工や支那人の鍛冶工が備はれた。

船首における船首屈曲部前材、船首材の部分は障礙物と接觸するため、恐らく特に堅い材木が用ひられたらしい。船尾における力材、添材、船尾肘材も同様に堅牢な木材が用ひられた。舵柱は堅牢なチーク材が用ひられ、鐵の壺金 (譯註、舵針の受金) は最も強靱な鍛造物で作られてゐた。舵針にかけられた舵は選り抜きのチーク材で海水に腐蝕しない鍊鐵で結びつけたものらしく、また甲板を支へる船梁もチーク材であつた。

外皮板は普通ラナン材であつた。ラナン材は割れない木材で、小銃弾位はねかへし、また大きな砲弾を受けても貫通させずに止めておくことが出来た。外皮板は皆蒸氣で曲げられ、カーベル型(譯註、往時スペインで用ひられた帆船)に定着させられ接ぎ目には二重に填接が施され、その上に瀝青が塗られた。かくして厚い幅廣の木材を用ひて建造されるガレオン船は決して毀れることなく、まるで海上に浮ぶ堅固な城塞のやうであつた。安全第一で速力に重きをおかなかつた。そのために強風をうけても船の速力が半減されることは屢々あつた。特に進水してから一年も経つと海藻やフチツボが附着して廣大な大洋を横断することは難澁であつた。

マニラ麻は丈夫なスベ／＼したアバカで、今もなほ世界における最良の綱具として有名であるが、カヴィテの製綱所で製造されてゐた。帆布は東洋の麻で織られ特に丈夫で柔かであつた。二重の外皮板のある大ガレオン船中には、水面に接してゐるタンブルホーム(譯註、舷側が吃水線上で内へ曲つた部分)から大舷牆に至る屈曲部が三呎乃至四呎の厚みを持つて作られる大きな船も澤山あつた。その仕事は非常に月日を要し、數年に及ぶことさへあつた。船尾樓の高い上檣司令塔、船首樓及び深い中部甲板は、これらの怪物ガレオン船に如何なる大洋上でもめつたに見られないほどの堅牢無比の威容を與へてゐた。

多くの船室は指揮官と彼の部下士官のために設備されてゐた。官吏や地位のある船客用の船室や、商人や下級士官のためには寢室の設備もあつた。他の者はハンモックかマツ

トにくるまつて寝た。この歴史的船舶の船型一覽表が、ウァリアム・ライテル・シュルツ(Wilhelm Lytle Schurz)の秀れた歴史書、「マニラガレオン船(The Manila Galleon)」に載つてゐる。

噸 數	甲板の長さ	龍骨の長さ	船 梁	船艙の深さ	大砲の數
一五三四・二五噸	一七四呎	一四五呎	四九呎	二五呎	八〇
一〇九五・〇〇噸	一五六呎	一三〇呎	四三呎	二二呎	七〇
九九〇・七五噸	一四〇呎	一二六呎	四二呎	二二呎	六〇
四八八・五〇噸	一二〇呎	一〇〇呎	三四呎	一七呎	五〇
四一〇・五〇噸	一一二呎	七三呎	三一呎	一五呎	四〇
三〇三・五〇噸	一〇二呎	八五呎	二九呎	一五呎	三〇
一九九・五〇噸	八八呎	七三呎	二五呎	一三呎	二〇
一四四・五〇噸	七八呎	六五呎	二二呎	一一呎	一〇

ガレオン船は大體において吃水線の約三分の一の船幅を有し、船艙の深さは船幅の半分位であつたやうだ。これによつて、ガレオン船は堅牢第一主義で、速力や運轉の便宜などは無視して建造されたことが解る。支索帆は、マニラガレオン船による貿易開設以後一世紀の間は海上で使用されるに至らなかつた。そのために初期のガレオン船は、絶好の追風を利用しても五ノット以上の速力が出なかつた。また逆風の時には一直線に進むことは殆

んど不可能で斜航横航後航のほかなく、前進することが出来なかつた。

一七五五年の五月、六月の二ヶ月掛りで、大ガレオン船サンティシマ・トリニダット號(Santa Isma Trinidad) は、カヴィテの王立造船所で修理されてゐた。同船は六ヶ月間放置された後、やつと船底の修理や隙間の補填を了へ、瀝青が塗られた。この修繕には手癖の悪い市長や官吏に相當の金を捲き上げられ、航海の準備に五十萬ペソの金が消費されてゐる。マス・トは綺麗に磨かれ、帆桁も取り附けられ、丈夫な麻製の綱具が張られて、タールが塗られ、重い絞轆には黄金色の黄麻製の綱具が喰ひこんでゐた。そして黄褐色の帆布が縛りつけられてゐた。船腹は新しく濃綠色に塗り更へられ、船尾樓の彫刻と船首の裝飾が鍍金せられて高價な金箔は赤や黄色の飾りと共にキラ／＼光つてゐた。ジャンクや舢板(譯註、支那の小舟)に取り囲まれた同船は、その儘數週間繋留されてゐたが、その間、箱や樽が船内に運ばれ、船艙に積み込まれた。水槽は満たされ、食糧保管室は食糧品の詰め込みを終り、各船室は綺麗に裝飾せられた。鹽漬の肉の入つた樽はマットで包まれて腐敗しない貨物の上にぎつしり列べられてゐた。

積載噸數二千噸の大船サンティシマ・トリニダット號は、最大限度の積荷を終つて船口は固く閉ざされ、盜難を防ぐために封印されてゐた。船長や副官達の命令で兵士達がこれらの積荷や食糧保管室、酒類保管室、水槽其他重要な雜貨の見張りをして立つてゐた。後甲板

と最上後甲板への侵入を警戒して監視が船尾にも配置された。太平洋の水路に慣れた白髪まじりの水先案内長は、配下の水先案内達に最後の指令を與へ、老いた舵手には注意を與へてゐた。水先案内長が舵柄の轆轤や生皮のロープが喰ひこんでゐる萬力滑車の調整に注意してゐる時、重い舵が右(右舷)に動かされてゐた。水先案内達は大きな舵がゆつくり滑らかに動かされるのを船尾樓の下に浮んでゐる監視舟からちつと注視してゐた。舵頭の上の眞暗な半甲板——ここに舵柄が収まつてゐる——には索環の中で凸出した轆轤がぶら下つてゐて、いつでも使用できるやうに準備されてゐた。ガレオン船の方向を定めるこの機械は最も重要なものであつた。

青銅製の觀象儀と英國製の新式十字型の測量竿は、水先案内長自ら船内において取扱つた。彼はセヴィラ(Seville 譯註、スペインの西南部にある町)から送られた方位表と月蝕表の最新版と、東方諸港の地圖並に太平洋の航海書最新版を持つてゐた。巨大な後部最上甲板の一室にある操縦室のパイロット・テーブルの上には、マニラ灣からボカ・グランデ(Boca Grande)を通り南支那海に至る航路を記した大海圖が擲けてあつた。サンティシマ・トリニダット號は大きな複式舵輪でその舵を動かした。二つの航海用羅針箱は船の前部ではなく、側面に備へられ、大航海用羅針盤は後部最上甲板の階上に据ゑ付けてあつた。

水先案内長ドン・マリア・アイサントステバン(Don Maria y Santestevan)は、アカブルコに歸る最後の航海につかんとしてゐた。彼はガレオン船貿易の水先案内として十指に餘る航海を

してゐる爲に一財産を築き上げた。好運も不運もあつたが、兎も角彼は四十年に亙り海上生活を送つて来た。しかし遂に彼の隠退する時が来た。といふのは、海上における重任のために白髪が増え、リュウマチの固疾にとりつかれたためである。しかし彼はまだ六十歳にならないなかゝの氣丈者であつた。なほ一航海で莫大な財産を築いたに違ひない司令官バルサントレド侯爵(Marquís de Balsan Toledo)は、勿論船乗りではなかつた。彼も彼の部下も船乗りになる理由はなかつたのだ。といふのは彼は王様と植民地總督の恩恵を多分に受けてゐたからである。大船と航海による莫大な利益が當時の堂々たる都マニラの繁榮を十分に維持してゐた。

水夫長と船乗りは、シーヤポールの上に充分に引き上げられた網具のもつれをといひてゐた。タガールの積荷人夫は早や海岸に降ろされ、前橋下桁においては滑車で家畜が引き揚げられてゐた。羊、豚、箱詰めの鶏が運び込まれ、炊事室の近くに積まれ、注意されてゐた。牝鶏が卵を生んでクッククックと知らせると、司令官の召使は長官室の會食用にそれらの卵をとりに行つた。船尾においては左舷の絞轆からは司令官や随員のための特別上等の葡萄酒や果物が引き揚げられてゐた。司令官の女共はヴェールを被つて夜の中に船に乗込んでゐたが、何處に行くとも知らずに監督婦に監視されながら、船尾樓に佇んで港の向ふを眺めてゐたし、總督の奴隸達が彼女達の世話をしてゐた。大きな笑ひ聲、樂器をかきならす音、

盃のぶつかる音で騒然たる中を、後部最上甲板では下の部屋の女の叫聲も知らぬ顔に貴婦人達が立つてゐた。しかし大部分の人々は旗で飾られた城壁の都に歸つて行くはずであつた。

ガレオン船所屬の大快速艇が引き揚げられて中部甲板の帆柱に載せられ、小ボートも積みこまれた。小舟や總督用特別仕立の大艇其他多くのパンカ舟は帆柱の下或は船側をよろ／＼してゐた。女達が互ひに大きな聲で何遍もサヨウナラを取りかはしてゐた。

船には四百人の士官と部下が乗込んだ。百人に餘る船員、マスト班或は新參の船員達はそれ／＼彼等の持場につき、砲手は既に禮砲の用意をしてゐた。多量の貨物を積めるやうに武装も半分には減らし、四十門の大砲は既に海岸に陸揚げされてゐた。このやうな大船には危険はなかつたのだが、なほ海戦に備へてまだ四十門の砲が積まれてゐた。後部甲板のカロネイド砲(譯註、一種の短砲)の準備も出來上り、キャプテン達は各自火繩銃を持つて立つてゐた。

水先案内長は船の中程にある揚錨機側に立つてゐた。揚錨機に捲きつけられてゐた錨綱は甲板上の圓い穴から軋つてゐる錨綱收納所に運び込まれた。牽引用の絞轆には鈎がかけられ、圓い蜘蛛の脚のやうな澤山の横木は綱をかけて引上げられた。船員達は拔錨の用意をして立つてゐた。まだ降りて行かない濱人夫の一團は、既に途中迄引き上げられた大錨を引き上げる手傳ひをしてゐた。船長は第一斜檣と第二斜檣との間の檣頭に立つ

てをり、總司令官は傳令の報告を開きながら、「よしよし」と頷いてゐた。その時、水先案内長は拔錨の命令を下した。重い鐵の錨がマニラ灣の泥土をかきあげてゐる間に、第一接橋帆が張られ、帆桁が揚げられた。

總司令官が一度頷いたと思ふや、禮砲の響がサンティシマ・トリニダット號を打ち震はした。そして總督はトランベットとドラムの勇ましく奏せられてゐる中を下船して行つた。城塞からも禮砲に答へる大砲を打ち、港からも街からも煙がひろがつて行つた。旗や裝飾を棚引かせてガレオン船は今や出帆したのである。

南西の季節風が吹いてゐたために船はボカ (Boa) から難航を續けた。しかし、風に注意して小錨で方向をとりながらコレジドール (Corregidor) を廻つた。そして孕網を一杯にはり、上手廻しに船首を一轉させながら、(譯註、逆風に對し船を左または右へ斜に向けて進むことを上手廻しといふ) バリントン海峡 (Ballingang Channel) を通過して太平洋に出た。これはガレオン船としては最初に通る新航路で、これによつてその昔、島と島の間を縫つてエムボカデロ (Emboacadero) を通り大洋に出た南方航路よりもかなり距離を短縮することが出来た。見たところ船内はどうにも手のつけようがないほど混乱してゐた。豚のブー／＼いふ叫び、鶏の鳴き聲、鋭い叱咤の聲、水夫長の呼子の音、子供の泣き聲、船に酔つた人のうめき聲——海はまるで生きもののやうに荒れてゐたので、さすがの大きなガレオン船も激しく揺れてゐた——等等。

汚物は甲板から海中に流され、怒濤は舷側を越して排水口に流れ込んだ。多くの人はこの頑丈な船内で、彼等の陸上に残して来た愛する者のことを想ひ、彼等の希望を考へて胸を痛めてゐた。しかし、この船はアカブルコで建造されるどの船よりも安全であつた。十年前にアンソン (Anson 譯註、一六九七—一七六二年イギリスの海軍士官にして太平洋に出没し、スペイン艦隊を盛に掠奪して廻つた。後出) が死んでからは、海上では海賊以外に何も恐ろしいものはなかつたし、この船は海賊からも身を守ることが出来たのである。普通のカノン砲の彈丸では、この船の船腹を打ち貫くことが出来なかつた。

船は強烈な季節風の追風を受け、波高き大洋をかき分けて進んだ。そして高い船尾樓が夕陽に輝いて三日目も正に暮れんとしてゐた時、水先案内長のドン・マリアは上空に叫び聲を聞いた。彼等は既にルソン島の北方海岸ボイカドル岬 (Cape Bojador) を過ぎて、夜の帳が彼等を包みはじめてゐた。彼等は後帆を縮めて、前檣帆を畳み、斜杠をとり降した。既に多くの旅客達は船酔いから覺めて甲板に出てをり、侯爵の一行も上つて来た。船員やボーイ達が船尾上甲板から眺め下ろした頃には、既に幾人かの貴婦人や女達も船尾觀望臺に集まつてゐた。今夜は何か不吉なことがあるやうな豫感がする。——風に逆らつてうねつて来る太平洋の大波のために船は激しく揺れて、老練な船乗り達は互ひに首をかしげた。船はバリントン島 (Ballingang) の北とバタン島 (Batun) の南との間を通つて、曉にはバリントン島がハッキリ見えるはずであつた。航海案内書には、この附近に多數の暗礁や岩礁がある旨

記載されてゐた。

船が横波を喰つて舷側は海水に洗はれた。一度現はれた宵の明星も突然に姿を消してしまつた。雷鳴がなつたが稲妻は見えなかつた。船中の僧侶達は敬虔な態度で十字を切つて、聖水を大船客室の四方の入口に撒いた。「ドン・マリアさん、しけるでせうかナー」と水先案内の一人が聞いた。

「わしは前にも一度こんなことに遭つたことがある。サクラファミリア號(Sacca Familia)に乗つてマリアナ群島(Marianas)に碇泊してゐた時だつたが、その時は横断するのに九ヶ月もかゝつたよ。」と水先案内長は答へた。

真夜中に當番が交替となる頃、風は落着いたが、雷鳴の音は相變らず續いてゐた。海はだん／＼深さを加へ、燐光を發して來た。バケツが投ぜられて、海上に浮いてゐる灰色の輕石が甲板に引きあげられた。空氣は硫黄臭くなつて來て、船は動搖し、帆は夜半から音をたてつゞけてゐた。後部最上甲板の大きな羅針盤が搖れはじめ、橋頭は眞黒な雲で蔽はれて來た。船室はあかあかと明りが點されて、誰も眠る者はなかつた。疲れ切つた見張番でさへ眠らなかつた。何が起るのだらうか？

しかし夜が白むにつれ、東洋の海の脅威、即ち南東の烈風が荒れはじめて來た。サンティシマ・トリニダット號は帆を縮め、舵手を倍にしたが、強風の爲に傾いて、甲板は山なす大波に洗はれ、船は雲のやうな霧飛沫霧飛沫に包まれた。船は既に輕石の浮いた海を通り過ぎ、危険なラ

ザ島 (Rana Island) の側を滑走してゐた。しかし船は大きく頭丈で建造も立派であり、乗組員も老巧であつた。既に數週間、船は東北へ押し流され続け、觀象儀と測定器は目を追うて高い緯度を示して來た。寒さは日に増し激しくなつて來たが、部厚な船艙のうちは、なほ數週間の間マニラから持つて來た熱さを保つてゐた。船内は毎日同じ生活を繰返してゐた。司令官は漸次海に慣れて來た。大洋の新奇は依然感興をそゝるに充分であつたが、船内の仕事は毎日同じことを繰返してゐた。日數が經つたこと、目印しとなるものは、たゞ新鮮な肉が日毎に減少して行き、雞も豚も殺され盡したことの位のものであつた。水も段々槽の味がするやうになり、且つ減少して行くので、水先案内長の嚴重な監督の下におかれるやうになつた。食糧保管室には監視の兵が立ち、その使用には船長の命令を受けねばならなくなつた。

日曜日に一人の子供が最初の死人として死んだ。マストの前で葬式が行はれ、死骸は水葬に付された。アカブルコ行きアカブルコのやうな長い航海には附きものであるが、仆れる者が相次いで生じた。葬式は日の出直後の早朝行はれた。北は悪天候のために、彼等は緯度五度だけ、暖い南の方を走つた。そして再び西風が吹いて來た時、ドン・マリアは風がなくならないうちにと北へ向きをかへた。といふのは、大西洋と同様にこの靜かな廣漠たる海にも貿易風帯と逆貿易風帯との中間には無風帯があるからである。

氣まぐれな風に悩まされながらも、日本の沿岸の沖を流れる黒潮には随分彼等も助けら

れることが多かつた。しかしマニラを出帆してから三ヶ月にして、大ガレオン船の運轉士達は再び彼岸嵐の前兆に氣付いて來た。中部マストの帆は降され、帆桁は舷橋に縛りつけられた。桁端には豫防用の縛りがあてがはれた。大帆は縮められ、英語でスペンサー(Spencer)譯註、前橋または大橋の從帆)と呼ぶ新しい帆はメイシマストに縛りつけられた。重い舵柄の滑車には補助滑車をつけて滑らかにされた。昇降口は人間の通る本甲板への通路昇降口を除いては皆閉ざされ、昇降口の大きな蓋は綱具で結へられ、ボートは二重に固く縛りつけられた。そして壁のやうな船首に波の沫しほを受けて上下左右に揺れながらもサンティシマ・トリニダット號はだん／＼北へ北へと流されて行つた。甲板まで打寄する波沫しほ最後まで張られてゐる帆布を弄する烈風を受けながらも、船は雷鳴轟きわたる海を疾走して行く——裸の檣と高い船尾樓を烈風中にさし伸しつゝ。當時既に建艦術はかなりの程度まで進んでゐたのである。船尾觀望臺の火は消され、船底からは濁水の臭氣が上つて來てそれが船中にしみ渡つたが乗船の人々は航海に慣れて來て氣にしなかつた。たゞ司令官だけは船酔ひから回復することが出来なかつた。今や彼等は遂に太平洋の半ばを横斷し水先案内達は占めたといひ合つた。

凡べてのものに終りがあるやうに、大暴風も遂に終りに近づいた。水先案内長は都合のよい風の角度を利用して東進する前に今一度南下した。彼は霧を避けて良風を得たかつたのである。船艙にばかりゐた人々は青白くなり、甲板にゐた船員等は鹽水のため腫物が

出来はじめた。東方向航海に詳しい船乗り達は航海中の最大難所が未だ先にあることを知つてゐた。

しかしガレオン船貿易は萬事がかんり進歩してゐた。年長者達は自分等の聞いた話を若いものに語り傳へて行つた。初期のガレオン船中には一航海に十六回以上の暴風に遭遇したのもあり、殊にサン・アンドレ號(San Andres)の水先案内トールザル(Torral)と勇敢なエステバン・カリロ神父(Father Esteban Carrillo)は巧みに大船を操り、病に倒れた多くの人々を永い間激勵して、十數回も相次いで襲來して來た北太平洋の颶風を切り抜けたこともあつた。かうした暴風に遭遇した後には、ガレオン船の守護神に感謝の獻げ物をするのが習慣であつた。しかしこれらのことは既に一世紀前の古い話である。また巨大なサンタ・ドミンゴ號(Santa Domingo)が十六回の暴風を切抜けてニュー・スペインの沿岸の港に到着し、二月に揚陸されたことがあつた。その時は船の甲板が割れて水漏りが激しく、全員がポンプで汲み出すのかゝり切りとなつたほどで、後部最上甲板と上部作業場は強風のために破損し、マストは折れ、丁度海上で沈没するばかりのところをやつとこのことで入港したのであるが、これも十年前のことである。

フィリッピンからの南方航路が作られた頃の初期のガレオン船には、ラドロン群島(Ladrões 譯註、マリアナ群島)に漂着したり、大破したり或は沈没したりした船も多かつたといふ話も語り傳へられてゐる。しかしサンティシマ・トリニダット號は堅牢であつた。天候は

だん／＼回復して来るにつれ船中の人々は食糧の缺乏にも拘らず、上甲板に集り、月光を浴びながら歌を唄つて陽気な夜を送つた。船上生活に關する禁則も大部分除去されてゐた。司令官側近の女達でさへ戯談の仲間入りをした。水は少くなつたとはいへ、酒はまだ然るべき人達には豊富であつた。

當の大サンティシマ・トリニダット號は、カリフォルニアの沿岸に沿うてファラロネス (Farallones) を過ぎ更に南に向つた。サンフランシスコの大きな灣は當時未だ知られてゐなかつたのである。かくしてその昔多くの小さな船が航行したやうにナヴィグアイドを通過し、アカブルコに無事に入港した。

同じ航路を同じ方法によつて商業の大行列が続いて渡つたことは、マニラ・アカブルコ間航海の船舶の以前にもなければ以後にもない。同航路の船はスペインの國旗を翻してをり王室の御用船であつた。歴史家のアントニオ・デ・メルゴ (Antonio de Morgo) は述べてゐる。「これらの船は、フィリッピンからニュー・スペインに渡る途中において幾多の危険と困難とを冒して來た。——距離は遠いし暴風は多いし、且つ氣候の變化も激しかつたから」と。モルゴ自身この水路に關しては遺詣が深かつたのである。

しかし、ガレオン船の水先案内をやつたことのあるイギリス人フィリップ・トンプソン (Philip Thompson) が自分の経験から書いてゐるやうに、「……この航路はどこまでも謎に包

まれ、且つ危険多き」にも拘らず、沈没した船は比較的少い——大貿易船としてガレオン船が存続した二世紀半の間において沈没した船は三十隻そこ／＼位であつた。

敵に拿捕されることもまた稀であつた。カヴェンディッシュが一五八七年にサンクアーナ號 (Santa Anna) を海賊ウイード・ロージャス (Woodes Rogers) が一七〇九年にエンカルナシオン號 (Encarnacion) を共にカリフォルニア沿岸にて拿捕したことがあり、一七四三年にアンソン司令官がセンチリオン號 (Centurion) にイギリスの海軍旗をなびかせながら、フィリッピン沖で大ガレオン船コヴ・ドンガ號 (Covadonga) を拿捕したことがある。最後に一七六二年嵐で損害を蒙りマニラに引返へしつゝあつた大サンティシマ・トリニダット號がイギリス船に捕獲されたことがある。その當時の行方不明と拿捕とのパーセンテージには現代の海上保険業者は餘り關心を有しないであらう。

かやうにしてこれらの強大なる船舶は、他の多くの太平洋航海者のことにも氣付かず、或はまた遙か南方に横たはる豊穡なる未発見の諸島のことをも忘れて、せつせと往復し續けてゐたのである。



ドレークの登場

運命の女神はいつまでも廣大なる「南の海」をスペインの征服者等の手に委ねておかなかつた。即ち太平洋、就中南緯五十度から赤道に至る山岳多き海岸地方とニュー・スペインの西北の海岸地方に沿ふ大地點に闖入者が現はれて來たのである。既にコルテス (Cortés) やピザロ (Pizarro) の徒は四五十年前から活躍してゐた。スペインの支配は充分確立せられ、インカ地方への進出は流通性に富んだ富、即ち金を豊富に齎らしてゐた。大部分の船舶は無武裝のまま、前代未聞の寶物を安全に輸送してゐた。餘りにも遠隔なるため、大洋には未だ敵の姿一つだに出現しなかつたのである。メンダニャがペドロ・デ・サルミエントを副指揮官としてソ

ロモン群島に渡り、ニュー・スペインに歸つて來たのは——その航海については餘り詳しいことは知られてゐない——既に一五六九年のことであつた。扱つてその後二十五ヶ年の間、スペイン人による西方への航海で有名なのは一つもなかつた。それはメンダニャの數年に互る第二回目の不運な遠征隊やキロスの出現以前のことである。廣漠たる神秘の太平洋は依然として地球の果まで、太陽の没する地點までひろがつてゐた。しかし南アメリカ西海岸の都市、即ちスペインの沿岸航路にある寶の港だけは、貿易港として開放されてゐたが無事平穩であつた。その地方は甚だ遠隔の地であり、スペインの確保してゐたパナマ地峽を横断せずには、マゼランの他誰も行くことが出来なかつたのである。スペインはその近づき難きことがその地の永遠の統治を保證するものであることを充分知つてゐた。

一五七八年九月六日、三隻の英國船がマゼラン海峡を通つて太平洋に現はれた。——大エリザベス女王の旗を太平洋にひるがへした最初の船である。彼等は司令官フランシス・ドレーク (Francis Drake) の乗れる旗艦ペリカン號 (Pelican) ——百二十噸のカラック船 (譯註、昔スペイン人やポルトガル人の用ひた圓形の大船) ——を先導として、勇敢に北西に向つて進んだ。ペリカン號の後にエリザベス號 (Elizabeth) と小帆艇マリゴールド號 (Marygold) が續いた。最初の掠奪船が東太平洋上に登場したことに氣付いた人は廣漠たる海に接した海岸——南北に走る地球上最長の海岸に住む人達のうちに、一人もなかつた。メンダニャは空想家で實行

力がなく、船乗りとしては大した男でなかつたが、それに反してこのドレークは、世界有数の経験ある船乗りの一人であり、無情冷酷なる海の戦士であつた。そして異常な才能、腕力、性格の上に信仰心をも併せ有し、海洋史上稀に見る多様な性質の持主であつた。彼がこの歴史の闖入において何をなしたかは、掠奪品目録中に書き込まれてゐる。そしてその掠奪の影響並にその成果こそは、一世紀以上に亘つて世界史上に波瀾を捲き起し、遂にはスペインの没落と、今一つは今日なほ生存してゐる海洋帝國の確立といふ二つの歴史的事件を招來したのである。

實在の人物にしる小説中の人物にしる、凡ゆる海賊共もドレークに比較すると巾着切位にししか見えない。彼ドレークは彼の共犯者たる破門されたエリザベス女王の委任状を有してをり、金銀財寶に富む太平洋こそ彼の寶物倉であつた。これはつくり話でなく本當のことである。

フランシス・ドレークの色々な掠奪振り、即ち高く聳えたつアンデス山麓の沿岸諸港の光景や、或は強奪されたスペイン人の悲鳴、悪漢やインディアンの怒號、或は更に八門の大砲を引き揚げたり照準を合はせたりすることを物語る前に、先づ彼の生ひ立ちを、次に勇猛果敢にして油の乗り切つた三十八歳の時の彼を語らう。

彼は一五四〇年頃、南イングランド、デボン州の一寒村タビストック (Tavistock) で十二人

兄妹の長男として生れた。父の名はレベレンド・エドモンド・ドレーク (Reverend Edmund Drake) といつた。テイ川 (Tay) がプリマス海港 (Plymouth) に注ぐところ、即ち霧深きデボンの片田舎が彼の生長した所である。彼は早くから親戚のジョン・ホーキンス卿 (Sir John Hawkins) —— 當時はまだナイトを授けられてゐなかつた —— につれられて海に親しんでゐた。ホーキンス船長は、アフリカのビアフラ灣 (Bight of Biafra 譯註、アフリカ西岸、ニゲリアとカメルンに包まれる灣) から西印度へ奴隷を輸送して高賣してゐた。ホーキンスがスペインの紳士達に對抗して冒險事業を始めたのもこの前歴から見れば極めて當然なことである。フランシス・ドレークも彼に加つて海上掠奪の惨酷無情な實戦に永い経験を重ねて來た。彼はホーキンスと共にメキシコ灣を巡航したが、この時は殆んど獲物はなかつた。

エリザベス女王の時代は、舊教と新教との反目が頂點に達し、その後お互に和解し合ふまでに數世紀を要したほど激しく憎合つてゐた時代である。スペインとポルトガルは法皇の手によつて地球を兩分し、世界の富を専有し、イギリス並に後世のオランダは所謂持たざる國としてその教義を撃破するには、議論によつてでなく、暴力に訴へねばならなかつたのである。大エリザベスは、ローマ教會から非合法なりと宣告せられても —— イギリスの船長達にとつてはそれは忘却することの出来ない侮辱である —— なほ一層強く新教の信仰を固守した。女王に忠誠を誓つた船乗り仲間 —— フランシス・ドレークもその一員であつたが —— エリザベス女王のために幾度か生命を賭しての襲撃をやつた。それは本物の

大砲の弾と短剣とを以て演ぜられた大掛りな喜劇のやうなものであつた。舷側は粉々に碎かれ、死者は海中に落下し、甲板は血の海と化する大活劇が行はれた。

ドレークのスペイン船襲撃は、はじめのうちは一向捗々しくなかつたが、遂にノンブルデディオス(Nombre de Dios)の小港の港外で大掠奪に成功した。獲物を捕へると彼は黄金だけを奪つた。山の如く積まれた銀は餘りにも重すぎて持ち運ぶことは出来なかつたのである。その直後、一五七二年にはドレークはパナマの山に登つて、高い木の上から太平洋を見下しながら、この廣大なる大洋にイギリス人として最初の船を浮べようと誓つた。

顔に矢傷をうけ、脚にはスペイン式火銃の弾丸をうけながらも、勇猛果敢なるドレークは、寶物を山と積んでイギリスへ歸つて來た。女王直屬の勇敢にして老練なる船長たる彼は、自費を以てフレガット艦(譯註、十七世紀から十九世紀にかけて用ひられた船で、上下の甲板に二十四乃至五十の大砲を備へてゐる)三隻を武装し、反逆せるアイルランド人鎮壓に向つた。そして彼はこの航海の間に、エリザベス女王の後援を得て、太平洋に遠征しようといふ野心を抱くに至つた。女王附宮内次官にしてのちに國爾尙書となつたクリストフ・ハットン卿(Sir Christopher Hatton)の後援の下に計畫が進められた。ドレーク船長が、五隻の艦船と小帆船とからなる強力な一艦隊を組織することを得たのは、彼の武勇についての輝々たる名聲もさることながら、この貴族の有力なる後援が與つて力あつた。艦隊はプリマス港で準備された。名譽慾に燃えた多くの紳士達がこの冒険に志願して來た。ドレークは彼の殆ど全財産をこの

冒険事業につき込んだが、なほ大部分の費用はエリザベス女王が支出した。

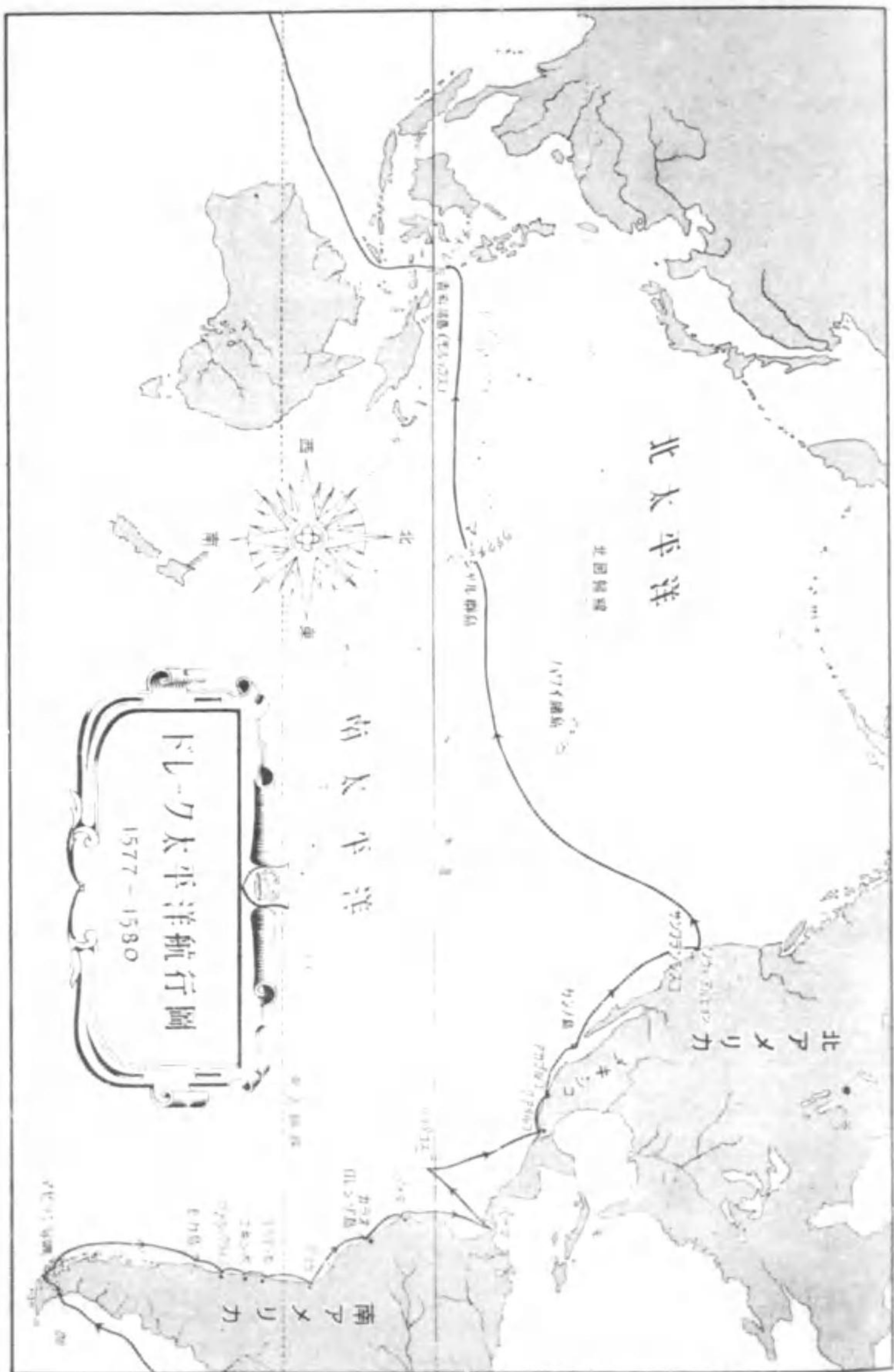
彼の旗艦ペリカン號(Pelican)は舷側の上部が内側に傾いてゐるフランス型の船で、船底の板は二重張りになつてをり、豪華な設備が施されてゐた。非常に高い船尾樓と三段檣を有し、船首近くの船首樓からは直立してゐる前檣の下に圓柱が伸びてゐた。長い第一斜檣の先には尖つた板が斜上についてをり、その下に帆を垂れる桁が揺れてゐる。船尾のマストには角帆はないが大三角帆のうしろの後檣桁から帆が垂れてゐた。當時の船と同様、吃水線以下の船腹は瀝青を塗るほかに何等防備装置が施されてゐなかつた。そして板と板との接目は鉛で埋められ、釘で接ぎ合はされてゐた。

この旗艦は世界一周の後、テムズ河のデットフォード(Depford)に廟として永年保存せられてゐたが、遂に腐朽してしまつた。唯その材料たる材木で造られた椅子がオックスフォード大學に保存されてゐる。

ドレークの航海の計畫は秘密にされてゐた。彼は地中海を周航してアレクサンドリアに行く豫定であるといふ一般には報ぜられてゐた。船員達は計畫中の冒険が、どれだけ遠い距離を行くものかなどは全然知らなかつた。一五七七年十二月三十日、ペリカン號は僚艦四隻を従へてプリマス灣を出帆した。先づ最初に旗艦について話を進め、他の僚艦並にその數奇なる運命についてはその後述しよう。十五噸の快走船クリストフ・ハットン號(Christopher)と五十噸の快速帆前船スワン號(Swan)——補給船——には荷物を積まず、他の船がそれ

を分載した。ケープヴェルデ群島(Cape Verde Islands 譯註、アフリカ西海岸に在リ)で拿捕された快
速船マリア號(Maria)も積荷を降ろされたが、これら三隻はバタゴニア (Patagonia 譯註、南米の
南部)の沖で火災を起した。結局三十噸の小帆船マリゴールド號と八十噸の副艦エリザベ
ス號が、ベリカン號について太平洋に突入して行つた譯である。

ドレーク一行は太平洋に入るや否や嵐に見舞はれた。そのため旗艦は僚艦と別れく
となつて南極近くに吹き流され、南緯五十七度、西經七十四度の地點において偶然にも一つ
の島を発見した。唯一隻になつたベリカン號は、その島に足掛け四日碇泊し、そのため彼の
部下達は、一五七八年の十二月二十五日、二十六日、二十七日の三日間に互り、その海岸に上陸
することが出来た。古い海圖には随分永い間その島はやゝ西寄りに描かれてあつた。し
かしその後、その地點には深い水があるのみで何等の島影も発見されず、古い海圖に「サ!
フランシス・ドレーク」灣と記してあつた地點も全く忘れられてしまつた。一方暴風雨を
うまく切り抜けたエリザベス號は、マゼラン海峡に吹き返へされた。彼等は、司令官等は難
航したものと思ひ込み、マゼラン海峡を通過してイギリス本國へ歸り、不運なニュースを報じ
た。またマリゴールド號は、二隻の僚艦と離れくとなり、大暴風のため南緯五十七度邊り
で本當に難破してしまひ、再び現れなかつた。しかし幸にもドレークは、沈没もせず、何等の
損害も蒙らなかつた。そして好天候を求めながら、チリーの岬々たる沿岸に沿つて北に進
んだ。この時彼は、チリーが北西から東南へでなくて、北から南に走つてゐることを発見し



ドレーク太平洋航行圖

1577-1580

た。このことは當時未だ地圖には書かれてゐず、マゼランがはじめて発見したのである。

ドレークはその當時としては最良の航海器具を用意してゐた。精巧な細工になる銀や青銅の観象儀も持つてゐた。彼の記録してゐる緯度が驚くべき正確なことは、それら道具の優秀さと、また舟乗りとしての彼の熟練さとを證明するものである。彼は航海に關する二、三の書物を携へて行つたが、そのうちの一冊は英語で、他の一冊は佛語で書かれたものであつた。更にいま一冊の書物は案内書といふべきもので、マゼランの發見當時の經緯を記したものであり、どうもアントニオ・ピガフエッタの物語りの寫しらしかつた。そのほか、赤道の南北における太陽との角度や日蝕その他のことなどを示してあるその當時の方位表をも手許に持つてをり、それを頼りに海岸に沿つて北を指して進んで行つた。

一五七八年十一月二十九日にベリカン號は、南緯三十八度四十五分、南米の海岸から約三十哩距つたチリー沖合のモカ島 (Mocha) に着いた。「そこで我々の司令官は、端艇をおろし十人の乗組員を連れて岸へ出掛けた。この島にはスペイン人の殘忍刻薄な待遇に堪へかねて、身の安全と自由とをはかるために、陸から逃亡してきた人達が立籠つてゐたのである。」

ドレークの乗つた船が、その十一月にモカ島に近づいた時、見張りの者は、北の方に青雲のやうに浮んでゐる陸を見付けたのである。その島に近づく五十哩の間といふものは、この島はおぼろげながらだん／＼に大きく見えてきて、遂には千三百呎の高さもあるやうに思

へた。幅が僅かに七哩しかない狭い土地なので、こんな風に見えたのである。島は南の端が断崖絶壁となつてをり、北の方はなだらかな傾斜をなしてをり、まるで獅子のやうな恰好をしてチリ海岸の沖に横はつてゐた。空が晴れて遙か東方の山々の背後から太陽が上ると、その山々の頂は影繪のやうに見えた。ペリカン號が帆を少し縮めて注意深く島の方へ進んで行くと、暗礁が海へ向つて突き出してゐるのが見えて來た。船が七尋位の深さの邊りに錨を下ろすと、全く北風には當らなかつた。一年以上前にプリマス港を出帆した頑丈な五隻の船のうちで残つてゐるのはドレークの乗込んだ船だけであつた。

ドレークすらこの時は疲れ切つてゐた。戦ひを交へないで餘儀なく度々逃げた行動でも分る通り、彼等の力は衰へてゐた。戦はないで逃げることも、尠くとも彼には輕蔑すべきことに思へたに違ひない。幸ひ暫く好天氣が続いたので、乗組員達は元氣を回復して、艙装をやつたり新しい廻轉ギアに索具を通したりして、海上で出来るだけの修理を施した。火藥桶は濕りを免かれたが食物は少く、眞水に至つては殆んどなくなつてゐた。

端艇の乗組員の先頭に立つたドレークは、磯波を小急ぎに通り抜けて、モカ島にやつたことで上陸すると、島人達に話しかけた。「……この人達は非常に慇懃な態度で、水邊のわれわれの許へ玉蜀黍や木の根や二匹の大層肥つた羊など持つて來た。われわれの司令官はこれを受取つて、その代りに他の品物をこの人達に與へた。」

彼等は眞水が是非共欲しかつたので、次の日二人の船員が桶を昇いで上陸したが、泉を探

してゐる時に襲撃された。インディアンがこの者たちをスペイン人と見誤つたのである。「……インディアンはスペイン人を捕へると片鱗の容赦もしないで、常に暴虐を振ふのが癖であるから、われわれの考へ通り二人の男は殺されたに違ひない。われわれの司令官はこれを見て、最早やこゝには止まらずに、錨を捲き、チリーの海岸へ向けて帆を上げた。」

この味氣ない親切氣もない島が、スペインの支配下にある「南の海」へのドレークの初見參であつたのである。古今多數の探検家と違つて、彼は無理もない誤認をした。これらインディアンに對して、何ら復讐を加へなかつた。インディアンもまたスペイン人殺しをしてゐたので、或る意味では彼の友であつた。しかし、ドレークがこの時考へたやうに、前途は大變わびしいものであつた。

陸に近づく、丸木舟に乗つて一人のインディアンがやつて來た。土人はペリカン號をスペインの船であると考えて、サン・イヤーゴ (St. Iago) と呼ばれる場所を教へ、そこには一艘の大きなスペイン船が、ペルー王國からの荷物を積んで碇泊してゐると告げた。いつでもインディアンに對して親切であつたドレークは、この土人に幾らかの飾物をやり、水先案内として働くやうに船に連れ歸つた。時は南半球の夏季のことで、ペリカン號にとつて好都合な風である南西の温い微風がペルーの青黄色の海岸を吹いてゐた。頭健な船乗り達も日光を浴び穩かな天候を歡んでゐた。彼等がエンゼル岬 (Angels Point) を廻る頃から新鮮

な緑色の地面が見えて来た。いゝ匂ひのするこの土地は、廣い平和な灣を——冬の北風以外には全然風のない灣を擴げて待つてゐた。港はこの暑い十二月の太陽を浴びて眠つてゐるやうであつた。

重さうに荷物を満載した大きな船が錨を下ろしてユツタリと碇泊してゐた。乗組員といつては八人のスペイン人とギリシヤ人が一人、それに黒人が三人ゐるきりで、單に錨の番をしてゐるに過ぎない人達であつた。物珍らしさうに舷壁に寄り掛つてゐたこの男たちは、いま一艘の船が入つてくるのを熱心に待ち構へてゐた。彼等は、堂々たる様子の船が、上檣帆を下ろし斜桁帆を畳み、擡げた横帆を風に當てながら、水路を直角に切つてグルリと間近に廻つてくるのを見てゐた。——それは滅多に見物されないやうな見事な帆走振りであつた。その船の大檣帆が垂れると、一艘の端艇が外へ吊り出された。錨はザンプと灣に跳ね落ちた。

多分遠くスペインのカディス(Cadix)からカサンルカル(San Lúcar)から何かの知らせを持つてきてくれたのだ！いま入つてきた船は、正體の分らない大洋の渡航船で、沿海貿易船でもなければマニラ航路の不恰好なガレオン船でもなかつた。船長や商人及び大部分の水夫達も上陸してゐて、だるいやうな夏の日の灣の中で舷壁から眺めてゐた男たちはすつかり興奮したのであらう。彼等は太鼓を叩いて近寄つてくる端艇を歓迎したのである。彼等は歡聲を擧げて端艇に挨拶し「われ／＼を祝福するためにチリー酒の壺」を用意した。

スペイン船の尾部の下でブラ／＼揺れてゐるドレークの船から挺身隊が攀ぢ登つたと見る間に、張出し帆板に飛び移り、舷壁を越えて船中へ躍り込んだ。先頭に立つて登つたトーマス・ムーン端艇長(Master Thomas Moon)は邊りにゐる奴を打倒しにかゝつた。「……彼はスペイン人の一人を殴りつけてアバクソ・ペロー(Abaxo, Perro)と怒鳴つた。この言葉は畜生！行つちまへ！といふ意味なのである。」

相手は全然敵意がなかつた。そのうちの一人は、杯を手から落すと、十字を切つて海中に飛び込んだ。そしてサンイヤーゴの小さな部落を目がけて素早く拔手を切つて行つた。彼は泳ぎ着くと、海賊の襲來を警告して廻つた。一方ムーンと彼の部下とは、居残つたスペイン人や黒人を昇降口の下へ叩きこんだ。

ドレークはいま一つの端艇を指揮して岸に向ひ、この小さな町を襲つてみたが、こゝには家が九戸、小會堂が一つ、倉庫が一つあるきりで、既に住民は風を喰らつて逃げてゐた。イギリス人達はこのさびれた場所を劫奪した。小會堂の中には、銀の聖餐杯と、聖體を受けた時に祝ふ酒を入れた二つの小瓶と、祭壇掛布が一枚あつた。「この掠奪品をわれ／＼の司令官は自分の牧師さんであるフレッチャ(Fletcher)に贈つた。」

こゝで行はれたのは浅ましい掠奪であつた。追従する坊さんのフレッチャに劫奪した品物をやつたのは輕蔑の印である。倉庫を開けて見ると、何とそこにはチリー酒やヒマラヤ杉の板材が多數蓄へられてゐたので、一行はこの板材をベリカン號に持ち歸り、薪を作る

ために裂き割つた。ドレークの組の收穫はそんなものに過ぎなかつたが、トーマスマーンの拿捕したスペイン船には獲物が豊富にあつた。スペイン人達は陸に追放されたが一人の男だけが船と共に引留められた。ハクリュート(Helicut)の記述によれば、この男はジョン・グリーゴ(John Griego)といふ名前のギリシヤ人で、後にドレークの手紙の一通に「サン・ジョン・アントン(Sant John de Anton)」として書きとめられてゐるのがこの男である。定めしトーマスマーンの指揮の下であらうが、荒らし廻つた水夫等は、拿捕した船に乗り込んで、ベリカン號と共に急いで沖に航路をとつた。古くから開けて天國の谷(the Vale of Paradise)といふ意味のヴァルパライソ(Valparaiso)灣は、その時既に騒然となつて来て、岸に並べられた多数の端艇には續々と兵士が乗り込んでゐた。兵士達が駆け廻つたり、彼等の持つ火繩銃や石弓が陽の光を受けてキラ／＼と輝いたりしてゐるのが見えた。こゝは踏み止まつて戦ふには都合のいゝ場所ではなかつた。

海岸を去つて餘程北に進んでから、大檣帆を裏帆にして船をとめ、明るい海に軽くすぐられてゐる二艘の船を並べて、ドレークは掠奪品の檢分にかゝつた。箱や袋がベリカン號の舷を越えて運び込まれながら勘定された。先づ第一にバルディヴァ金(Baldiva Gold)の入つた革囊が目についた。火のやうにピカ／＼光つてゐる純金の額は二萬五千ペソ、スペインの金に換算すれば三萬七千デカカの價のものである。拿捕船には相當多量のチリー酒が貯蔵されてあるのも分つた。一同の者が水に不足するとしても、少くともこゝには舌

觸りのやはらかな味でもつて氣力を振ひ立たせてくれる飲料が豊かにあるのであつた。だが司令官フランシス・ドレークに統率された船の中では、泥酔とか醜行とか信仰を忘れた神聖冒瀆などといふものは見受けられなかつた。ドレークは自分の船室で、彼の事業の最初の貴重な成果を英國女王に贈ることを考へてゐた。その夜、彼は息子のジョン・ドレークを傍らに呼んで、船員のうちの主だつた連中と夕餐を共にした。ヴィオラの樂の音は大船室から流れ出て、甲板中に響き渡つた。會食者達は、スペイン船で見つけ出されたローレイ卿御持参にかゝるところの葉巻煙草を燃らせてゐた。おまけにチリー酒にありつけたので、一同の氣分は一層浮き立ち、捕獲賞金や大獵などに就いての歡談が賑やかに交された。恐らくクリスマス・イヴだと思はれる十二月のこの夜、宴がこの邊りまで進んだ頃、ドレーク司令官は乗組員に對して一場の辭を述べた。そして雄々しくも嵐と戦つてきたベリカン號は、今後「黄金牝鹿」號(Golden Hind)と稱する旨を傳へた。一同は船のこの改名のために乾杯して喝采を送つた。次いで、主人ドレークにギロリと睨まれて、フレッチャ牧師は「神よ、女王に祝福を垂れ給へ」といつた。

こんな譯で船はゴールドン・ハインド號となつたのであるが、最初に黄金の寶を積んで航海を成功させるといふ着想でつけられたこの船名は、幾世紀も通じて傳はつてきてゐるのである。けれども、中にはこの船名は、ドレークの有力なる保護者であつたクリストファ・ハットン卿(Sir Christopher Hatton)の工夫した金色の牝鹿に示唆されてつけられたものだとい

ふ人もある。

これら二艘の船は北方コキムボ(セレナ)(Coquimbo)へ向つて航行を續けた。拿捕されたスペイン船は恐らく間違ひないところ、トーマス・ムーンが統率してゐたのであらう。ドレークは非常に大切な眞水を手に入れるために、コキムボへ船を馳せたのである。コキムボは西海岸にある一番綺麗な入江の一つだとジョン・デ・アントンが話してきかせてゐたからである。その後三百年経つて、このコキムボは英國海軍船舶にとつて南太平洋上の恰好な碇泊地となつた。入江に入るとドレークは、十四人の者に水を詰めるための樽を持たせて上陸させた。

彼等のことは既に早使ひにより海岸に沿つた北の方まで傳はつてゐた。足の早い使ひの者たちは、海賊船の現はれた恐しい知らせを運んでゐたのだ。五百人のスペイン人が海邊の小丘の背後に集合してゐた。そのうち三百人は馬に乗つてゐた。舟乗りたちが上陸して、扱ひにくい樽をゴロ／＼磯で轉がしてゐると、スペインの兵隊等が襲撃して来て、船乗りの一人は火繩銃で撃たれて殺されてしまつた。そこで後の男たちは、やられた仲間を昇いで端艇へ引返した。その翌日ドレークは自分の船を着弾距離内に引入れて、銃を構へさせておいてから、自らは甲冑に身を固め、亡くなつた仲間を埋めるために上陸を強行した。スペイン人は旗を送つて休戦を申入れてきたが、ドレークは船に乗り、まだ水が不足してゐるのに構はずそのまゝ去つた。彼は随分長い間スペイン人と戦つてきてゐるので、今更和

議などの話ではなかつた。

それこそ懸命になつて眞水を求めてゐた時なので、そこから十リグ約三十哩進むと、ドレークは再び船をとめ、幾らかの樽に水を詰めてくるやうに數人の部下を海岸へ遣つた。ところが騎馬の男がゐたので、彼等は直ぐに船へ歸つた。そこで例のギリシヤ人の案内人ジョンは、船をトラバザ(Tarapaká)——タラバカ(Tarapaká)とも呼ばれる——へ連れて行つた。この頃では、船はもうどんなに岸邊傳ひに早く走る使ひの者をも遠く引離した地點まで來てゐた。何しろドレーク配下の二艘の船は氣持のいゝほどの順風を受けて、帆がバタ／＼と鳴る始末だつたので、三日あまりに緯度の十度も経過したのである。如何なる走者でも騎士でも、そんなに早く行くことは出来はしないのだ。これに加へて、アンデス山脈が氣高いほどの險しさで、そゝり立ち、山麓の小山は海にまで達してゐるので、道と名のつくものはみな通過が困難であつた。一寸見たところ、天空に届いてゐるやうに思はれる陸地にはこれらイギリス人達が嘗つて見たことのないやうな高い山々が聳えてゐて、誠に壯大な眺めであつた。この山脈の眺望は丁度インカ帝國の富源を背後に守るべく難攻不落の石壘が屹立してゐるかのやうであつた。ところで、どうしたらもつと多くの金が手に入るだらうか？ タラバザは將來榮える見込みもないやうなところであつた。活氣のない小つぽけな入江に錨を下ろして、ドレークの一行が物しづかな海邊を歩いてゐると、叢の蔭に眠りこけてゐるスペイン人の前に出た。彼の傍らには、「スペインの貨幣で四千デューカもする!!」銀

の延棒が十三本入つてゐる革囊が置いてあつた。彼等はこれを奪つて寝ばけ面をしたスペイン人を立去らせた。

「眞水を求めてこゝから先へまた歩いて行くうちに暫くすると驢馬ほども大きさのあるペルー産のラマか羊かを八匹追つてくるスペイン人とインディアンの少年とに出會つた。どの羊も背に二個の皮袋をつけられてゐたが、そのどの袋にも五十ポンドの目方の純銀が入れてあつた。そこで荷物をつけたまゝで羊を船まで連れて行つて銀の目方を秤つたところ、全部で八百ポンドあつた。」

サンジョン・デ・アントンは——愉快好きなドレークがつけた名前と呼ばばグリーク(譯註)ギリシャ人を指すグリークといふ字は英語で快男子といふ意味をもつ)は、海岸に立ちはだかる巨大な石壘に沿つてやゝ北に進み、一層爽快な静かな海へ一行を導いて行つた。今ではチリーの領土になつてゐるアрика(Arica)に着いたのである。そこは海拔七百呎もある屏風のやうな絶壁が小灣を作つてゐた。かうした絶壁のために灣内の船は小つばけに見え、船の上に暗い影が蔽ひかぶさつてゐるやうに思はれた。アンデス山脈はこゝで雪を戴いて銀色にきらめいてゐるタイタニック山(Titanic)の峰を凸起させてゐた。しかもこの峰の銀色は、日が沈む時には溶けた金のやうに赤く一面に擴がつて見えるのであつた。ドレークは朝と夕とに一回づゝ跪いて、彼の事業にお恵みを給へと神に祈つた。ア리카では三本マストの帆船を三隻見付けたので素早く掠奪をやつた。一艘には一つ二十ポンドづゝの目方のかゝる銀

の塊が五十七本あつた。三艘のうちに残つてゐた人間といつてはたゞ一人だつた。他の連中はイギリス帆船の近づくのを見て逸早く遁れてしまつてゐた。船には酒壺が二百壺あつた。ドレークは火繩銃や石弓で武装した三十七人の手勢を従へて上陸の——記録には「岸に躍り上がる」と書いある——準備をしてゐたところ、此方へ向つて砂煙を蹴立てゝ物凄い勢で駆け下りてくる騎兵の一軍が目に入つた。そこで一艘の船艙の中に隠れたまゝ眠つてゐた黒人を見付け出して引捕へ一同は本船へ返つた。そして生捕つた船員を引きつれ、拿捕した二艘の船を従へてア리카を後に帆を上げた。その分捕船のうち一艘は途中で焼き拂ひ、他の一艘は一行に加へて行つた。

銀を積んだラマや分捕品を山と積んだ側で、太平の夢に耽つてゐたスペイン人のゐる海岸一帯——驚くほど財寶に富んだこの海岸にも今や警戒の氣配が生じた。彼等は情報を得ようと必死の努力をしはじめた。ドレークは、自分の帆船を岸から三哩離れて航行させ自分は小さくて速力の早い快速船に乗り込み、激浪の碎ける一寸手前を陸に並行して駛つた。ダシルヴァ(Da Silva)がかう書してゐる。「こんな船の進行體形で約四十五リーグ(百三十五哩)ほど進んだ時、ドレーク一行は港に碇泊してゐる船を見付けた。だがこの船はイギリスの海賊船に就いて既に二時間ほど前に注意を受けてゐたので、スペイン王のものである銀の棒八百本を船體から吐き出して陸に隠匿してしまつてゐた。」

ドレークは失望した。彼はこの船から奪ふ幾噸もの銀でもつてゴールドン・ハインド號

の底荷を積まうとしてゐたのだから。船には水を入れた樽三個があるのみであつた。この樽を取つてから、その船の錨鎖を断ち切り帆を上げておいて、一行は沖へ向つて去つた。つまりこの船は一人の乗組員もなしに、ゴロ／＼と唸りを立てゝゐる岩だらけの岸へ向つて「走り行くに任」されたのだ。ドレークは、アリカで分捕つた船をも棄てたので、この船もまた前と同じやうに漂ふまゝに打つちやられた。少数の捕虜はヴァルバライソで拿捕した船に移された。

ゴールドン・ハインド號は、そよそよと吹く南風を受けながら、星の燃える空の下を靜かに進んで行つた。ドレークの乗つた船は、帆を縮めて上檣帆をギアにかけ、大檣帆と前檣の三角帆とを帆綱でもつと掲げ、斜杠と横帆とで操り、眞横に風を當てながら險しい形の島サン・ロレンゾ (San Lorenzo) の間近を通り、岸へ向つてドンドン進んで行つた。その岸の向ふの方には遠山が大きな堡壘のやうに聳え、星屑のボーツと白んだ東の空がこれら堡壘を隈取つてゐた。船中ではすべてがヒツソリとしてゐた。何故なら、若干の軍隊を率ゐたフランシスコ・デ・トレド總督 (Viceroi Francisco de Toledo) の住んでゐるベルーの首府に近づきつゝあつたからだ。リマック河 (Rio Rimac) の河口にあるカラオデリマ (Callao de Lyma) 灣は繁華なところであつた。ピサロ (Pizarro) は、その僅か四十三年前に海から三リーダ (九哩) 入つた内陸に一つの町を建設したのであるが、暗殺された年である一五四一年以後は、彼の造つた「王の街」であるリマ (Lima) に彼は眠つてゐたのであつた。こゝはドレークの司令

官の率ゐるやうな微力な軍隊によつて襲撃するには餘りに強い町であつた。灣の碇泊地には軍艦がうろついてゐるかも知らなかつた。

それにも拘らず海賊船は燈を消してヒツソリと音も立てないで岸に近づき、未知の碇泊地へ進入した。ドレークと部下達は甲冑を身にまとつた。一人残らず部署についた。兩側の吃水線上の舷側は、大砲を構へて砲壘と化した。人々は手に舟矛を持ち短劍を握り、マツチに火を點け、吊網を縛つたり錨を引揚げたりなどして準備を整へた。兩方の舷側にある測深係は、水の深度を低い聲で傳へてゐた。こんなに暗い夜はないと思はれる位あたりは眞暗であつた。水先案内人ダシルヴァは次のやうに書いてゐる。「夜に入つてから三時間の間、そこらに碇泊してゐる十七艘の船の間を通つて進んで行つた。」

一五七九年二月十三日の夜、この未知の灣に侵入したドレーク司令官の大膽不敵さに匹敵するほどの非凡な海軍指揮者は減多にない。ドレークは一刻の猶豫もせず、端艇を下ろして、カラオにゐる船に就いて調べさせた。軍艦はゐなかつた。財寶を積んでゐる船を探したが既にその船は岸に陸上げされてしまつてゐることであつた。丁度この時、スペインの貨物を積んでパナマからやつてきた一艘の商船が、明りをつけて幽靈のやうに現はれ、ゴールドン・ハインド號の直ぐ側に投錨した。その時、岸の税關から臨檢の端艇が進んできたが、海賊船を見付けたのでこれに聲をかけた。船からは一人のスペイン人の捕虜が（この男はドレークに忠實なダシルヴァにほかならないと思はれるが）答へて、「ミチャエ

ル・アンヘロ (Michael Angelo) の持船でチリから来たものです。」といった。

税關艇から檢閲官がゴールドン・ハインド號に乗込んだ。船中に入るや否や、役人は疑惑を抱いたが、船内の武裝に驚愕して、ソソクサと艇に戻つた。危険を感じた商船は沖へ向けて疾走し出した。ドレークは直ちに數人の部下を快走船に乗込ませて追跡させた。快走船からは商船に對して止まるやうに合圖をしたが、相手はこれを拒んだばかりか、火繩銃を撃つて、イギリス人の一人を殺した。

一方ドレークは、大急ぎで碇泊中の船を探索したが、鹵獲品が見付からないので、それらの船の錨鎖と、一番大きい船のマストを二本切断してしまつた。——それらの船は軍隊を乗せて追跡してくるかも知らなかつた——からである。かうしておいて自船に返ると急いで錨を捲き全部の帆を張つて、パナマから來た商船を追跡した。途中で殺された船員を積んだ快走船を拾ひ上げながら。

夜明け方、カラオ港外で岸に沿つて走つてゐた商船に追ひついた。スペイン人は周章狼狽して端艇を船から下ろすと轉げるやうにその中に飛び込み、太平洋の山のやうな激浪の唸り轟く中を手早く漕ぎながら磯に乗り上げた。追跡船の方からは挺身隊が商船の中へ跳り込み、舵を向け直し帆を張つてからグルリと方向轉換して追跡して來た旗艦と一緒になつた。

またもや海岸は驚きで色めき立つた。帆を張つた大きな船がドレーク等の方へ向つて

航行してくるのが見られた。彼等はそれを偵察船であると判断したが、その理由は程なく二艘の大船が、恰も武裝して戦を挑むかのやうに南方海面に浮き上つてこちらへ向けて急ぎつゝあつたからである。ドレークはギリシヤ人ジョンとカラオで捕へた二人のスペイン人とを先刻の商船に乗せて、これを航して行かせた。しかしギリシヤ人の身を氣遣つてやらない譯ではなかつた。それが證據には、エリザベス號に捉つてもいゝ取計らひをして貰へるやうに手紙を持たしてやつたのである。ドレークは其の後のエリザベス號の消息については全然知らなかつた。

サン・ジョン・デ・アントンの乗つた人不足の船がどうなつたかは分らない。十中の八、九までは追跡するスペイン人に捉つて、ギリシヤ人ジョンはひどい目に遭はされたことだらう。ドレークの手紙が書かれた時には、エリザベス號は面目も榮譽もなく、故國イギリスへの航路を餘程進んでゐたのである。——唯持ち歸つたものといへば、女王の勇敢な家來であるフランシス・ドレーク司令官の運命も今や分らないといふたよりだけである。

はじめドレークがあればほど心配した眞水の問題は、船を分捕ることによつて解決されたから、このことは扱ておくとしても、海岸には豊富に新鮮な肉や果物や壺に入つたバターや蜂蜜などがあり、更に土地に産する種々雑多な蔬菜類があつたので、一同は食糧には堪能した。その上健康にいゝチリ酒がいつでも多量にあつた。リマでの冒險の暫く後、バイタ

(Paya)といふ港に立ち寄つた際に分捕つたパナマ船などは、魚を積んでゐた。その船内にはそのほかに銀の棒四十本と八十ポンドの目方の金もあつた。二人の坊さんも含めてその船の船客は、端艇に乗せて岸へ送りとゞけた。拿捕した船にゐた一人の船員が金の皿を二枚盗んだがなかく、白状しようとはしなかつた。しかしドレークは、その男が隠してゐることを發見すると、時を移さずこの悪漢を桁端で絞殺し、獲物を全部奪つてから船を流れるまゝに打棄てた。

情報が入つた。財寶を積んだ船がバイタへ向けて出帆したといふのである。しかし探して見たが見付からなかつたので、グアヤキル灣を横切つて北方へ追跡した。寶船はパナマを指して進航してゐた。こゝで積荷を地峡の向ふの大西洋岸にゐる船に積み替へてスペイン母國へ送らうとするのだ。これが當時行はれてゐた一般の輸送方法であつた。ゴールドン・ハインド號は北の方に追つて行くうちに、綱や索具を積んだ檣帆船に追ひついたので、これを分捕つたが、船内にはなほ八十ポンドもある金と「相當に大きなエメラルドの嵌め込まれてゐる」金のキリスト磔像とがあつた。かうした掘出し物と同時に、綱具も多數に得たので自船用に使つた。ところで寶のガレオン船はまだ視界に入つて來ない。船は眞鍮色の空の下を帆走して赤道に近づきかゝつてゐた。いまま少しの間に見付けることが出來なければ、獲物はパナマ灣へ逃げ込んでしまふだらう。ゴールドン・ハインド號では水を湛へた壺を幾つも艦にぶらさげて船體の釣合をよくしたと、グシルヴァが書いてゐる。

金銀の重さで船首の方があまり下がつてゐたので、思ふやうに走ることが出來なかつたのだ。見張りの男たちは油断なく見張つてゐたが、ドレークの次の言葉を聞いて一層緊張した。

「船を最初に見付けた奴に俺の金鎖をやるぞ！」と彼がいひ出したのだ。それから後といふものは、赤道間近の濃い海面を晝夜を分たず泡立て突き切つて進む間に、ゴールドン・ハインド號の船上では誰が眞先に先に行く船を見付けるかといふ大競技が続けられた。白い泡が舳で飛び散るので、暗がりの中で見ると火のやうな色の海面を船が二つに切り割いて行くやうに見えた。さうかうしてゐるうちに、或る日の午後三時、大櫓の頂點にくつゝいてゐたドレークの息子ジョン・ドレークが、「ホー!!船だ!船が見えるぞ!」と下へ向つて叫びかけた。

全速力で追跡したので、六時頃には獲物の船と並ぶところまで來た。ドレークは降参するやうに命じたがいふことをきかなかつたので、「では、やつゝけろ!」と叫んだ。砲長オリヴァ(Oliver)が相手の船の後帆に砲弾をぶち込んだので帆は叩き落された。「でかした、オリヴァ!でかしたぞ!」とドレークが大聲を擧げた。つゞいて射手が一齊に矢を射かけて寶船の船長を傷つけた。船が降参したのでトーマス・ムーンが挺身隊を引連れて行つた。ところはエクアドルの海岸サン・フランシスコ岬の近くで、遠く離れてはゐるがガラパゴス群島(Galápagos Islands)の並びに當つてゐた。追跡されることを氣遣つたドレークは、その夜

と翌日の晝と夜とを帆をいつばいに張つて西へ向つて全速力で航行しつゝけた。——ヨ
 ールドン・ハインド號よりもろくて故障を生じたガレオン船のために、速力を制限される
 にはされてゐたが。

三日目になると静かな熱帯の海上へ出たので、分捕品の検分を始めた。ダシルヴァは「八
 つの聖餐杯と金の入つてゐる」函を十四個數へた。ハクリュートはこの時のことを「薄
 い金屬で出来た聖餐杯と八十ポンドの目方の金と二十六噸の銀との入つてゐた十三個の
 函」と書いてゐる。ダシルヴァの記載したところによれば、銀の棒が千三百本あつて、その
 うちの三百本がスペイン王の所有に屬してゐたとのことである。

捕獲された船の名はカカフエゴ(Cacafuego)、英語のスピット・ファイアであつた。雪崩打
 つて来る波が陽を受けて躍ると、その度に船は水に漬つて横揺れに揺れた。今や一同は金
 満家になつたのだ。勝利の昂奮と復讐心の満足とで一同は上機嫌であつた。自分の持場
 をなくした男たちまでも樂しさうに見えた。寶船に乗つてゐた少年がドレークに、「この
 船はもうカカフエゴ(火を吐くもの)ではなくカカプラタ(銀を吐くもの)です。」といつた。
 水先案内人の息子のこの洒落た言葉に、われ／＼はワツと笑つたが、その後もづつとこれが
 笑ひの種になつた。ドレークはこの少年を可愛がつた。自分に反抗さへしなれば、大人
 子供を問はず誰にも彼はやさしかつたのである。

寶船の水先案内人ドン・フランシスコ(Don Francisco)は、彼の持物の中に「二個の素晴しく

立派な鍍金した銀杯」を持つてゐた。ドレークが「水先案内人の親方君は銀杯を二つ持つ
 てゐるね。俺も一つ入用なんだがね。」と切り出した。水先案内人は賢しくも要求に従つ
 たのみか、利巧な男だつたので、いま一つの杯をも贈物としてドレークに差出した。

ニュー・スペインの海岸へ向つて走つてゐたので、萬一の場合に備へて少數の人質を抑留
 してから、ドレークは空になつた寶船を棄てた。航行中に支那の絹と皿とを積んだもう一
 艘の船に出會つたが、ドレークは船に乗つてゐたスペインの一紳士から「眞中に大きなエ
 メラルドの嵌つた金の容器」を奪ひ、この紳士と船の水先案内人とを抑留して、漂ふまゝに船
 を後に残して行つた。

この時、一行はメキシコ海岸に近い北太平洋にあつた。いま捨てた船から連れ込んだ水
 先案内は、ガレオン船の着くアカブルコ港から東へ寄つたテワンテベック(Tehuantepec)河
 口にあるグアタルコ(Guatalco)港へ一行を導いた。こゝには僅か十七人のスペイン人が住
 んでゐるきりだとドレークは案内人から聞かされた。

「港へ入るとすぐにわれ／＼は上陸して、程なく町役場を訪ねた。そこでは裁判官が、他の
 三人の警吏と共同して、グアタルコの町を焼き拂ふ陰謀を廻らしたといふ嫌疑で起訴され
 た三人の黒人に對して宣告を下してゐるところであつた。」

ドレークはふざけてみるのが好きだつたので、裁判官達と囚人達との兩方を捉へて、イ
 ギリス女王の名において審理の延期を命じた。そして仰天してゐる人々を船へ連れ込み

船上で主席判事に、町民に訴へる布告を一本書かせた。その内容は、イギリス人が安全に水を汲めるやうにするために、町民全部直ちに町を退去すべしといふのである。布告が書き終られると、黒人達はお褒めの言葉を頂戴して解放されたが、法廷の役人達は不愛想な取扱ひで岸へ送り返された。乗組員は上陸して水を汲んだが、引き上げる前にグアタルコの町を掠奪した。一軒の家では「一ブッシュェルも入る壺にリアル銀貨(註釋、リアルは約六シリング)三ペンス」の潰したのが一杯詰まつてゐたので、これを船中へ運んだ。」

わが勇敢なトーマス・ムーニン氏は埃だらけの通を走りながら、町から運げてゆくスペイン紳士を追跡して捕へた。衣服を探すと、「金の鎖や色々な寶石類を携へてゐたので、これらを奪ひ取つてから解放した。」

グアタルコを發つ前に、ドレークは乗組員の編成を變へた。この編成上の變化は歴史上非常に興味あるものである。アフリカ西岸のケープ・ヴェルデ群島で乗船マリア號と共に捕へられてから、忠實にドレーク司令官に仕へてきたポルトガル人の水先案内人であると共に練達な航海者であるニコノング・シルヴァは岸へ降ろされた。海岸傳ひに北航中拾ひ上げられて人質となつた多くの捕虜も彼と行を共にさせられた。そのために、莫大な戦利品を積んだこれからのゴールドン・ハインド號の乗組員は、イギリス人だけによつて占められたのである。

ドレークは、ダシルヴァ及びその他の人を後にして、西方指して出帆した。彼等はほどなくスペイン官憲に逮捕されてしまつた。

ドレークは、イギリス人の船員と共にカンノ(Canno)の島へ進んだ。これは多分メキシコ海岸の西方沖合、およそ北緯二十一度半にあるラストレス・マリアス島(Las Tres Marias)のことであらう。この島ではゴールドン・ハインド號を濱邊に着けて磯に天幕を張つた。積載貨物は全部卸して財寶を勘定した。船腹を傾けて修理を施し、大樽には水を詰めた。それが済むと、充分の薪炭を船に貯藏した。船が準備をすつかり整へたと思はれる頃合、こちらへ向つてやつてくる一艘の船が認められたので、出掛けて行つて引つ捕へた。船内を搜索すると、スペイン總督と二人の水先案内人とが乗り合せてゐた。それは道にはぐれたマニラ渡航船で、財寶は積んでゐなかつた。ドレークは商品若干奪つて船を釋放した。商品を奪つたといつても、彼自身の船の積荷が既に相當な額に上つてゐたので、澤山は奪らなかつた。ところが彼が奪つた品物の中に極東航路を示した海圖があつたのだ。これこそは數多い海上の襲撃の中でも、信じられないほど大きな利益のある歴史的な掠奪である。ドレークは考へ抜いた末、結論に到達した。ハクリュートはこれに關し忠實に次のやうに書いてゐる。

「われ／＼の司令官は、スペイン人から受けた個人的な害惡に就いても、また母國及び女王に對して加へられた侮辱蔑視の點に就いて考へてみても、充分満足すべき程度に報復をし

終つたといふことを、この地で、この瞬間思ひついたのである。そして國へ歸れば、女王は自分のためになされた功績を知つて満足し安心されるであらうから、もうこの上スペイン人の海岸を航行することはよさうと考へて、最良の歸國航路を探すべく志し、その思案を始めたのである。」

ドレークの侵略は、露々たる抗議や對策を惹起した。快走帆船や櫓船によつて、チリやペルーから續々と海難報知がパナマ地峡へ持ち込まれた。各地の總督から送られた早船が只事ならぬ急書を携へてスペインへ急航しつゝあつた。ニュースペインは憤激で騒然としてゐた。アカブルコからマゼラン海峽に至るまで太平洋東岸一帯は恐怖の色に包まれた。一帆船にしてなほこのやうな災害を與へ得るならば、一艦隊をもつてすればどのやうな禍害が齎らされることだらう！ドレークこそは人々に加へられる「天罰」であるといふ専らの評判であつた。時の英國駐劄スペイン大使ベルナルディノ・デ・メンドーサ(Bernardino de Mendoza)がエリザベス女王に提出した抗議文の中では、ドレークのことを「未知の世界の大盜賊」と書いてあつた。

スペイン王は植民地總督に對し峻嚴な態度で、彼等の怠慢の廉を責めたことであらう。フィリップ二世は事態を重大視した。大掠奪の行はれた年、一五七九年の十月に、ペルー總督ドン・フランシスコ・ド・トレドは、ドレーク追及のために最も有能な司令官を派遣した。即ち嘗つてメングニャと航海したことのある餘人ならぬドン・ペドロ・ロドリゲス・サルミエント・イ・ガン

ボアを司令官に任命した。サルミエントは兵員武器を満載した二艘の船を従へて出發した。ドレークはメキシコ海岸から姿を消してしまつてゐたので、スペイン人は屹度彼は再びマゼラン海峽を通過して歸つてくるものと考へた。サルミエントは部下に向つてかう命令した。「萬一イギリス海賊フランシスコ・ドレークの乗る船に遭遇するか、或ひはその船に就いて情報を得た場合には、如何なる犠牲を拂ふとも、最善の努力を拂つて、彼を擒にするか、さもなくば、戦ひて殺すか、不具にせよ」と。

サルミエントが他の襲撃者にも備へてマゼラン海峽を固めると共に、かのいまましいドレークを捕へようとして南へ進んでゐる間に、ドレークは大膽にも太平洋を横断しようとして決心をした。「彼は二つの特別の理由によつて、海峽を通過して歸ることはよくないと考へた。一つはスペイン人が海峽附近に待機して非常な軍勢でもつて立ち向つてくるに違ひない。ところが彼の方では一艘の船しか残つてゐないのだから、どんなにしても運れることは出来ないだらうといふことである。いま一つの理由は、この「南の海」にある海峽の入口が天候上危険なことである。彼自ら體驗したやうに、こゝでは海岸近くにある淺瀬や砂岩のほかに、絶えず嵐が吹き荒れてゐる。であるから、彼はこの航路を危険を冒して進むことはよくないと考へたのである。彼はかうした危険を避けて、モルッカス群島へ進み、そこからブエナ・エスペランサ岬(Buena Esperanza)の側を通つてポルトガル人の開いた航路を辿らうと心に決めた。

ドレークの太平洋の横断冒険はいま一つの目的を持つてゐた。即ち太平洋から北東に航路をとつて北アメリカを廻り大西洋に出て國へ歸らうといふ長い間求められた海路を見付け出さうといふのであつた。彼は北へ進んで傳説的なアミアン海峡 (Strait of Anian) を確かめてから國へ歸るつもりであつた。ドレーク以後二百年間このアメリカを迂廻する北方航路の夢想は世の中から消えなかつた。

ドレークは「北極へ向けて」航した。六月の五日のこと、「われ／＼は空氣がヒヤリとして大變冷いことを感じた。船員たちは痛ましい位この寒冷な空氣に苦しめられて、もう我慢がならないといつて悲鳴をあげた。先へ進めば進むほど一層寒氣が増してきた。そこでわれ／＼はその場を切り抜けるために陸地を探さうと考へた。探してみると見付かつたが、山が殆どなくて低地のみであつた。われ／＼は赤道に向つて北緯三十八度以内の地點にまで下つて來てゐた。この高さの緯度へ差し掛ると有難いことに神様の御蔭で、いゝ風が吹いてきて、われ／＼は見事な灣に送り込まれた。」

往時の航海談は最も正直な記録である。無知な者から長い間嘘吐きであると見られてきたマルコ・ポロは、實に眞理の源泉となつてゐたし、ピガフェッタは、若干の誤解の點を除いては、彼の觀た事柄を述べるに甚だ忠實であつた。ドレークの航海談は恐らくリチャード・ハクリュート (Richard Hakluyt) の口述によるものであるし、老教師フレッチャーの書いた話も

本當である。ハクリュートの述べた緯度のあらゆる箇所は、現在の緯度の位置と著しく合致してゐるのである。

サンフランシスコの金門灣 (the Golden Gate at San Francisco) のすぐ北にある「見事な灣」に入ると、ドレークはこゝをニューブリテン (Nova Albion) と名づけた。これは正に一つの発見であつた。「スペイン人は、これまで一度もこゝへ來たことはなく、またこゝから南に當る地方だとしてあまり廣くは発見してゐないらしく思はれた。」

この土地には人好きのするインディア人が住んでゐて、鹿の群が満ちてゐた。國中が「奇妙な種類の家兎の飼養場の觀を呈してゐて、この動物といつたら、大きさは北アフリカ沿岸の家兎と同じやうで、頭はわれ／＼の頭ぐらひ、足は土龍のやうにツングリして、尾は鼠のやうに長かつた。」

ニューブリテンの住民は、「この家兎のやうな動物」を食べ、その毛皮で外套を作つて着てゐた。いまでもカリフォルニアの海岸に海へ向つて突出してゐるあの白堊の突堤と絶壁とが、ドレークに大ブリテンを想ひ起させたのだ。「わが國は時々ブリテンと呼ばれてゐるが、この地もわが國と類似の名稱であつてもよささうに思へたから……」

一行は七月にこゝへ到着した。その月の半ば頃に、つまり一五七九年七月半ばに、次のやうな事柄が航海談に載つてゐる。「何處の土を一握りとしてみても、大抵金銀が出てきた。」と。うまくいひ當てたものだ。——一八四九年の黄金狂時代から遡ること二百七十年の

この時代に遂にドレークは統治者要求の主張を正式に持ち出して、貢物を受けとり、土地の王と贈物を交換するや、真鍮の板金を用意するやうに命じた。

「出發に際して、われ／＼の司令官は、われ／＼がこの地へ来たといふしるしとしての、また同時に王のこの領土に對する主權の表示としての記念碑、即ち真鍮板をかなり大きな足場の上に釘付けにして建てた。碑には女王の稱號、われ／＼の到着月日、女王に對する土地人民の自發的な讓渡などの箇條が刻みこまれ、その下方には、表面に女王の肖像と武器とが表されてゐる六ペンスのイギリス通貨が嵌められ、更に下にはわれ／＼司令官の名前が記された。」

一九三八年にこの碑が発見された。中に六ペンス貨幣が嵌められたと思はれる穴のある真鍮板で、全く上に記述されてゐる通りであつた。この記念物はいまカリフォルニア大學に藏されてゐる。記録された數多い航海史の中で幾世紀も経た後に直接その確證が現れたものはこの真鍮板を以て初めとする。

ドレークは「フィリピン行き」の船から取上げた海圖を頼りにして、灣を出て北東の貿易風の吹く太平洋を西へ向つた。金門灣を通過する時は、この発見した土地と別れることを残念がつた。時は六月の半ばに近かつた。一五七九年十月十三日、四ヶ月も横断航路を進んだ後で、ゴールドン・ハインド號は初めて陸を見た。糧食は豊富にあつて瘧血病の惧

もなかつたので、航海はことなきを得た。多分南方に進路を取つてゐたからであらう——最初の陸は北緯八度の地點で、ハワイ諸島は見落してしまつた。緯度によれば初めて見た陸地とはラダック列島(Radak Chain)即ちマーシャル群島であつた。島には人口が多くココ椰子や種々の果物の産物があつた。土人の使用する速い丸木舟には、船員一同讚嘆の眼を瞪つた。

新しく積込んだ食糧、厳格な規律、優れた航海術などのお蔭で、ドレークは無事に珊瑚礁の散在してゐる海上を航することが出来た。一ヶ月後にはモルッカス群島に至り、更にティドール島へと船を進めた。航海日誌にはかう書いてゐる。「われ／＼はポルトガル人と親交のある島々、タグラダ(Tagulada)、ゼロン(Zelon)、ゼワラ(Zewara)などを通つて進んで行つた。タグラダ島には肉桂の大樹林があつた。」一行は糧食を蓄へ、また所有の銀と島の香料とを交換した。

ドレークは三ヶ年の歳月を経て一五八〇年十一月三日に英國へ歸つた。ドレークこそ自分がはじめから號令した船に乗つて世界を周航した最初の司令官である。

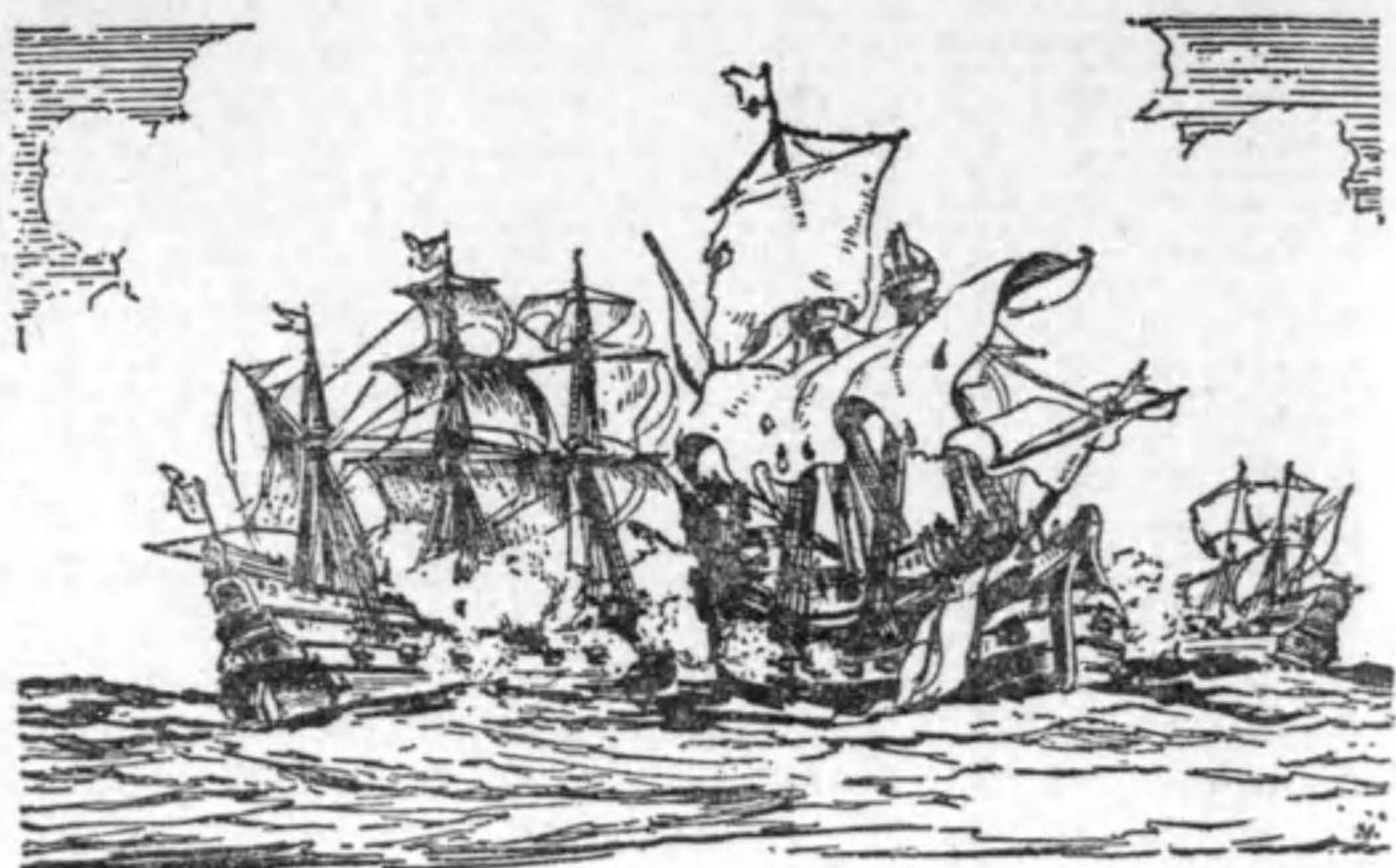
多くの冒険の後で——冒険の一つにはかの有名なスペイン無敵艦隊の撃滅もあるのだが——ドレークは彼の最後の航海となつた一五九五年の航海を行つた。この度は老ジョーン・ホーキンス卿(Sir John Hawkins)の副官として、今迄の幸運と名聲とに更に華を添へるべく西印度諸島へ行つたのであるが、ジョン・ホーキンス卿は、十一月にポルトリコ(Puerto Rico)

の沖で死に、それから幾許もなくして太平洋の偉大な航海者フランシス・ドレークの生涯も終つた。彼は一五九六年一月二十九日の朝七時、五十六歳を一期としてポルトベロ (Porte Bello) の沖に逝いた。死因は赤痢である。

その翌日、指揮者の役を繼いだトーマス・バッシュヴィル卿 (Sir Thomas Baskerville) はドレークの遺骸を島から三哩の地點に運んで、彼をカリブ海に葬つた。

サンタ・アンナ號の捕獲

サンタ・アンナ號の捕獲



ドレークの死後十年たつて——十年といつても太平洋にとつては一瞬の時に過ぎない——三番目の世界周航者がドレークのとつた航路を進んだ。ハクリニートはこれを次のやうに書いてゐる。「サフォーク州のトリムリーの領主にして信仰厚きトーマス・カンディッシュ (Thomas Candish) 殿の「南の海」を経て世界を周廻したる、見事にして幸運多き航海 (一五八六——一五八八)。この行に雇はれたる一紳士最近イリー町に居住するフランシス・ブリッティ殿がサフォーク州にてこれを記す。」

書名は内容を語る。そこで、この華やかな部分には、カンディッシュ、つまり今の綴りでカヴェンディッシュ (Cavendish) が最初のマニラ航路のガ

レオン船を拿捕したことを指すのである。カヴェンディッシュは三艘の船を従へたが、大將艦は百二十噸のデザイア號 (Destie)、中將艦は六十噸のコンテンツ號 (Content)、少將艦は四十噸の三橋帆船ヒューギャラント號 (Hugh Gallant) である。この三船は、ドレークの航路に略並行して、チリーやペルーの海岸に沿つて北方へ進んだ。しかし、岸での冒險の數々は別として、カヴェンディッシュは、ドレークの場合の如くに無防備船の船艙にバルデイヴィア金を發見することも殆どなかつたし、銀の入つた囊の側で居眠りしてゐるスペイン人や白金を積んだペルー羊をも目にすることが出来なかつた。西に擴がつてゐる大洋を横斷して、ニュースペインへ年に一回やつてくるガレオン船、つまりマニラからの情報を得て、カヴェンディッシュは、アカブルコや古いナヴィダドやマザットラン (Mazatlan) などの諸港へも入つてみた。カヴェンディッシュは、約八ヶ月間の巡航の後、マゼラン海峡から海岸に沿つて北上して來たが、一五八七年十月十四日に下カリフォルニアの南端にあるサンルカ岬のところへ出た。この岬はワイト島 (the Isle of Wight) の西端にある一團の白堊岩 (Needles) のことを彼に想もひ出させた。小競合ひや病氣などのために死傷者が出て、人數が不足してゐたので、少將艦ヒューギャラント號は數ヶ月前既に故意に沈没させられてゐた。そこでデザイア號とコンテンツ號とはヒュー・ギャラント號の殘留者を收容して、マニラ渡航船の航路を横に行きつ戻りつして待ち受けてゐた。ところが十一月四日の午前七時と八時の間のことだ。海上偵察のためにデザイア號のマストの上に乗つてゐた見張

役が、サンルカ岬へ進んで行く一帆船を見付けたのである。マニラ航路のガレオン船はこれまで一艘と雖ども襲はれたことがなかつた。長い航海で海藻の纏ひついでゐるこの巨船も、順風を受けて前へのめるやうな恰好で進みながらも、その大航海の終りに近づいてゐた。

見張役が「船だ！船だ！」と叫んだ。これを聞いたサファーク州イブスウィッチ町 (Ibawit) の親方トーマス・フラー (Thomas Fuller) はじめその他の男たちも帆桁へ駆け上つて見た。さうして、一同は上から大きな聲を揃へて彼等の大將トーマス・カヴェンディッシュにこの吉報を傳へたのである。

近づいてくるガレオン船は、多量の貨物を積載した少くとも七百噸はある大船で、積荷が多いのに舷側は水面から高く抜き出てゐた。海藻が船底に食ひ付いてゐるので、速力が弱くのろかつた。デザイア號と可愛いコンテンツ號とは、鯨を追ふ海豚のやうな勢ひで素早く追ひかけた。司令官は準備をすつかり整へるやうに命じた。大砲には火藥彈丸が新しく詰められた。火繩銃は舷壁に据ゑられ、マストの上には矢を背負つて射手が上つた。船矛や短剣が手近な場所に並べられ、敵船に引つかける小錨がいつでも投げられるやうに用意された。船側の釣網は引揚げられた。帆桁の上でも副張索の繫索や轉桁索が準備された。かうして、考へられる限りの準備がなされたのである。甲板には砂を撒き、海水の入つた桶を幾つも昇降口のところに置いた。

海賊船の船内には凄まじい昂奮が湧き起つた。大きなマニラ船の舷側は厚く出来てゐるので固い砲弾が的つても容易に損ぜられなかつた。その上四百人から五百人以上の兵員が乗船してゐるので、如何なる攻撃もまだ嘗て一度も蒙つたことがないのである。

「フラ―親方、追跡の具合はどうかね？」と髯を剃つて鎧を着かゝつてゐたカヴェンディッシュが大船室から聲をかけた。経験も浅く若くて昂奮はしてゐたが、それでも彼は斷乎としてゐた。

「前へ眞直ぐに進んでゐますよ、司令官。間もなくとつ捉へますよ。」

「何？用はすつかり出来てゐるな？」

「大丈夫です、司令官。すつかり手配が出来てをります。」とフラ―は答へたが、舵手に向つて怒鳴つた。「船を眞風に向けるやうに氣を付けろ！眞つ直ぐに行くんだ！」

風の吹いてくる方向に向つて小さな二艘の船は寄り添つた。カヴェンディッシュは甲冑を身に着けて船尾樓に上り、「おうい。スペインの船！何處から来たんだ！」と大聲で呼び掛けた。

カステイラ領とアラゴン領の徽章の着いた旗が、ゴロ／＼と水を掻いて進むガレオン船の後帆のところへ風に翻つてゐた。緑色の海藻の食ひ付いた船腹が船の横揺れの度にせり上つた。ガレオン船の乗組員は、舷牆の背後に伏せてゐた。デザイア號とコンテント號でも、それより遙かに少い乗組員を吊網や防塞の下に控へさせた。カヴェンディッシュは耳

を傾けて先方の應答を聴かうとしてゐた。

「進撃砲を撃て！」と、彼は砲手に命じた。ドカンと一發轟いた。「フラ―親方、あの船の前へ程よく出ろ！」

「えゝ、えゝ！おい、船の前だ！しつかり、そこだ、舵！眞つ直ぐだ！おい！火繩に火を付けろ！銃や弓はいゝか！」

彼等はガレオン船に對して小銃の一齊射撃を見舞つた。「さあ、砲手、撃て！」雷鳴が轟いたと見るまに、偏舷から大ガレオン船サンタ・アナ (Santa Anna) 號目掛けて集中射撃がなされた。サンタ・アナ號こそ財寶や貴重な商品を積んでマニラからアカプルコへ歸航の途にあつたのだ。弾丸は舷側に的つて海中に落ちたが、小弾は索具を貫いて裂き帆を斷つた。

「フラ―親方、手ごたへがないぞ！」

「駄目です、カンディッシュ司令官。距離が遠過ぎるんですよ。」

「横附けだ！みんな用意しろ！」

午後の海に兩方の船は接近した。荒い太平洋の大波の上、ガレオン船は強大な堡壘のやうに聳えてゐた。合圖と共に司令官の乗つた船はガレオン船の舷側に近寄つた。「聖ジョーシよ、英國を護り給へ」と喚きながら、デザイア號は小錨を敵の船に投げ掛けた。一方船のマストや帆桁の上では矢や不恰好な火繩銃の弾が雨となつて打ち交されてゐた。

五十人の兵士が敵船に乗り込んだとの事である。コンテント號は方向轉換して射撃するだけで挺身隊は送しなかつた。大損害を蒙つて撃退された場合にすぐに側にゐてやるためであつた。

ワツといふ叫び、太鼓をはげしく打つ音、喇叭の高い響などが一緒になつて、イギリス人たちの頭上に聞えて來た。頭上のガレオン船では、多數の兵士が武器を手にして待ち構へてゐた。石が海賊たち目掛けて降つて來た。後甲板前甲板、中甲板などの背後にスペイン人たちは防塞を築いてゐた。敵の姿は見えないが、ツル／＼した腰板や錨鎖につかまつて攀じ登らうとするイギリス人たちが、槍や投箭が飛んで來た。間もなく、彼等は血に塗れ乍ら廣い甲板に踏み込んで取組み合ひを始めた。小剣がきらめく。とかくするうちにイギリス人は二人の死者と四、五人の負傷者とを、残して撃退された。サンタアンナ號からは高い冷かしの彌次を浴びせてきた。

「われ／＼は風に合つて具合のいゝやうに帆を張り直し、皆んな自分に必要な武器を再び手にした。さうしてから改めて敵を攻撃にかゝつた。われ／＼は大砲や小銃を敵船のあらゆる箇所へ撃ち込んだ。向ふの人間を多く殺傷するために、徹底的に打ち捲くつたのである。」こんな具合に二艘の海賊船が撃ち續けたが、ガレオン船にはこれを禦ぐ大砲がなかつたのである。

大サンタアンナ號では、ゴツタ返しの大騒ぎが持ち上つた。この船はフィリップピンを出

てから半年にもなるので、船内には病人も多かつた。女たちは恐怖のために金切聲を擧げ、死人を覗いては泣いてゐた。兵士の間には團結がなくなつてゐた。船にある數の少い大砲さへも下の積荷の中へ藏かくひこまれてゐる有様であつた。

デザイア號は勢ひを新たに、大きな獲物に打ちかゝつた。この獲物の防備といつては、船體の上部の舷壁が堅固なだけである。「われ／＼の司令官は更に部下を激勵して耳を劈やぶかんばかりに吹き鳴らす喇叭の音と共に、第三回目の攻撃に移つた。そして砲弾や小銃弾を敵船に限かぎなく撃ちこんだので、向ふでは多數の人間が死んだり不具になつたりした。敵船は大狼狽に陥つた。」

戦闘は既に六時間つゞいてゐた。幾つかの砲弾はガレオン船の水線部に穴を開けてゐた。海賊たちは益々大膽になつて行くのに反し、サンタアンナ號の方では大砲で打ち返すことも出來ず、夜になれば船は沈没するか或ひは敵の侵入を受けるか知れない懸念があつたので、遂にサンタアンナ號は休戦の旗、白い旗をブラ／＼になつた。索具の間に掲げた。カヴェンディッシュは船を敵船近く並行させて砲撃を停止させた。スペイン人の船長は慈悲を乞うて彼等の命だけ助けてくれと哀願した。品物は取つてもいゝ、直ぐに提供するからといつた。

「降ろせ！降ろせ！」とこちらから叫んだ。直ちにスペイン國旗がスル／＼と降ろされた。「われ／＼の司令官は——」とブリッティ船長が書いてゐる。「親切にも助けてやらうと

彼等に約束をした。そして帆を下ろし端艇を出して自分の船へ来るように彼等に命じた。この知らせを聞いて彼等は大喜んだ。間もなく帆を下ろし端艇を出すと商人の首領の一人が司令官の許へやつて来た。その男は司令官の膝に崩れかゝると、足に接吻をしましたからといつて助命を嘆願した。」

デザイア號の小さな甲板では、素晴らしい光景が現出したに違ひない。——火薬の粉がついて眞黒になつてゐる船員たちは、ツボンが裂けて足を露出してゐるし、負傷者は痛々しく糊帯で傷を巻いてゐる。しやれ者のカヴェンディッシュは、勝利と莫大な財寶の眺めとで昂奮して顔を赤くしてゐる。——日が暮れかゝつてゐた。夜に紛れてサンク・アンナ號が逃げないやうに警戒しなければならなかつた。

ブリッティは彼の記述に一言かう附け加へてゐる。「司令官は、その男（商人）及びその他の者に、自分たちと眞面目に協力して、ガレオン船の莫大な財寶を處分するといふ誓ひをさせた上で、彼等全部を親切な態度で許してやつた。船長と水先案内人と呼びに遣つたので二人はやつて来たが、船に上ると先程の商人と同じ所作で恭敬の意を示した。司令官は大層人情に厚かつたので、彼等の命を助けた上、待遇の點でも悪くはしない旨を約束した。デザイア號とコンテント號とから水夫が拿捕船操縦のためにガレオン船に乗り込んだ。一方船長と水先案内人及びマニラ商人の首領とは、人質として船に留めおかれた。その夜イギリス人の大工たちは捕獲船上で危険な弾孔の孔蓋ぎをやつた。船員たちは横断索を

下ろして切れた索具を修理し、新しい廻轉ギアに綱を通した。武器を携帯した見張人が船客たちを昇降口の下へ降ろし、死體を海中へ抛りこんでしまつた。負傷者は出来るだけ厚く看護された。小銃、船矛、投箭その他に使用される武器はすべて、火薬、彈丸、石などと共に端艇に積んでこちらの船へ送られるか、或ひは海中へ抛られた。二艘の海賊船がサンク・アンナ號の兩側に並んで付き添ひ、脱走を防ぐために、サンク・アンナ號には燈りをつけた。三艘とも帆を縮めて停船したまゝでゐたのだ。

その夜商人頭が積荷目録を持つてきた。すぐ隣りの船の積んでゐる戦利品の山が、デザイア號の船室で繰り擲げられた。これこそ彼等の長い遊弋の最初のそして唯一の大獲であつたのだ。だが驚いたことには、その目録ときたら、東洋の貴重な品物の入つた箱や櫃が數へ切れないほど長くつゞいてゐるのだつた。夥しい數に上る絹の入つた櫃、繻子や緞子の包、また樽に詰められた澤山の麝香の包!!その他にも、象牙だとか祭壇に供へる特別上等な品物なども含まれてゐた。ブリッティは、「食用にするあらゆる種類の多くの糖菓や、非常に味のいゝ色々な種類の酒などの極上品で一杯の食料品大貯藏物」をガレオン船が積んでゐたと書いてゐる。

しかし、戦利品の中で一番大切な項目は黄金である。これに就いては「十二萬二千ペソの金貨」（金塊八個）があつたと記されてゐる。

しかしこの計算は史上多少の疑惑をもつて見られてゐる。カヴェンディッシュの保護者

である樞密顧問官ハンスドン卿(Lord Hunsdon)に宛てた手紙が公開されたが、これはこの戦と掠奪品に關し説明しながらも財寶商品の價格については全然觸れてゐないのである。手紙に曰く。

「樞密顧問閣下。——小生チリー、ペルー及びニュースペインの海岸を航行仕り多大の掠奪を致し候。即ち、大小合せて十九艘の帆船を焼却沈没仕候のみならず、着陸致せしあらゆる町村はこれを燒棄強奪仕候。もし海岸において發見さるゝこと無之候はゞ、更に莫大なる財寶を取得したるものと考へる次第に御座候。小生にとりて至極利益ありしことはフィリッピンより航し來れるスペイン王所有の大船をカリフォルニアにおいて捕獲致せし一事に候。右は曾つて太平洋を航したる船舶のうち最も豊富なる商品を積載せる船の一つにして、王室記録係の報告及び商人の提示せる目録より見ても、上の事實は明白なる次第に候。メキシコにて賣却の豫定に有之候商品の總價格は……に達し候。かゝる次第にて候へば小生配下の二艘の船には、その商品の最小分量をも積載不可能なりし有様にて候。小生に出來得る限りの御奉公は相勤むべく候へども、こゝに小生は恐れ多くも女王陛下の御前に跪伏し、神がわれらの間に女王の支配を永久に存続せしめられんことを祈願する次第にて候。蓋し女王こそ今日世界において最も名望と戦勝とに輝ける大君にてましまし候へば。

何卒小生の冗漫なる筆を御寛容被下度候。

閣下に神のお恵みの豊かなることを。

一五八八年十一月九日 プリマスにて

閣下の従僕なる

トーマス・カンディッシュ

事を有利に運ぶために、カヴェンディッシュは戦闘のあつた翌日、メキシコ海岸に至り、スペイン人がアグアダ・セグラ(Aguada Segura)と呼んでゐる南カリフォルニアの最尖端にある港に入つた。サンルカ港のことであるが、その頃は住民もゐない荒廢した場所であつた。デザイア號のフラー親方は「水深十二尋のところに錨を下ろした」書いてゐる。

残存したスペイン人がガレオン船から降ろされたが、男女合せて百九十人であつた。はじめにゐた人員の半数は殺されたに違ひない。彼等は岸へ着けられたが、その大陸には清水の小河があり、新鮮な魚、禽、木材などが多く、それに野兎、家兎なども澤山ゐた。われ／＼の司令官は、彼等に非常に豊富な食料品、(ガルアンソ豌豆)を與へ、それに幾らかの酒も附け加へてやつた。また彼等は、ガレオン船から帆をみんなとつてきて岸に天幕を張ることも出來た。同様に船に積まれ、ゐた多數の木材も貰へたので、三檣帆船を作るにはそれで充分であつた。」

捕虜になつた人間の始末を附けたので、八十人の奇妙な海賊たち——全く彼等は變な連中であつた——は「戦利品をガレオン船から卸して、各人にその分前である財寶を分配する」仕事にとりかゝつた。

カヴェンディッシュは海賊船の船員としては幾らか素人で、ドレークのやうな舟乗りには遙かに及ばなかつた。さういふ譯で、しつかりした指揮力といふものを持たなかつた。彼は賞金の分配を海軍裁判所に委任したのである。他のある場合にもさうであつたやうにこの時も彼の決定力は薄弱であつた。「この月の八日、掠奪品の分配に關して多數の乗組員がわれ／＼の司令官に向つて反亂を企てた。特にコンテント號の乗組員に多かつた。しかし、その場はどうにか鎮められた。」

カヴェンディッシュの船は幾日間かサンルカに碇泊してゐた。その期間に船を傾けて船腹を修理した。船に積める最大限度まで財寶をガレオン船から移すためであつた。スペイン人は天幕生活をしてゐるし、婦人は多いし、氣候は温かいし、土地には獲物が多いといつた譯なので、海に嫌氣のさしたガレオン船の乗組員や俄成金の海賊たちはお互に實に愉快な日を過した。その年、即ち一五八七年の十一月十七日には「女王の目出度い戴冠式」を祝つた。「われ／＼の司令官は自らデザイア號まで赴いてありつただけの大砲と小銃とを撃たせた。中將艦であるコンテント號でも同じことをやらせた。これが済むと、その晩われわれは花火を澤山にあげ、更に大砲をも撃つた。これは、そこに居合せたスペイン人はみんな非常に感嘆してしまつた。それといふのも、彼等の多くはいまゝでこんなものを見たことがなかつたのである。」

デザイア號もコンテント號も充分に修復なつて、何時でも海へ出られる準備が出来上つ

たので、海賊たちは最後の祝賀をやつた。カヴェンディッシュはロンドン社交會の選り抜き
の廷臣であつた關係上、おしやれであつた。彼は商人と上流階級の少數の貴婦人とを自分
の小さな船に招いて饗應した。その夜サンルカでは、財寶を積んだ二艘の船が昇降口から
はみ出さうになつた積荷に當て木をあてゝ、今にも出帆するばかりになつてゐた。乗組員
は、友人となつた連中に向つて別れを告げた。スペイン人の貴婦人と殿御達の中には、別れ
の辛さで泣いてゐる者も見受けられた。しかも海賊はサンタアナ號から一部分財寶を
取つただけであるから、後に澤山残したまゝで立ち去るであらう。さうスペインの船長は
考へてゐた。

翌日になると、カヴェンディッシュは船長に氣前よくお禮をやつた。——古い記録にはさう
書いてある。インディアンの襲來を防ぐために、二本の劍と楯とのほかに幾挺かの銃や火
薬彈丸をも與へたので、船長はこの上なく満足した。それから、カヴェンディッシュはサンタ
アナ號から「日本生まれ」の二人の若者を連れ出した。年齢は二十歳でクリストパー
(Christopher)といひ、年下は十七歳でコスムス(Cosmus)といつた。「二人とも大變利巧であつ
た。」

彼はまたマニラの島々で生れた三人の少年を連れ出した。約十五歳に十三歳、一番若い
のが九歳であつた。名前は最年長者アルフォンソ(Alphonso)、次がアントニーデグシイ
(Antony de Dasi)で、一番下の子供は名前がついてゐなかつた。この子供はロンドンへ連れ

て行かれて、「有名なテュードル時代に可愛いレットイス (Lettice) の綽名があつたエセツクス伯爵夫人 (Countess of Essex) に貰はれた。」

情報を得る目的で、カヴェンディッシュは更にニコラス・ロドリゴ (Nicholas Rodrigo) とシムポルトガル人を手許におくことにした。この男は支那の廣東並びにその他の土地へ行ったことがあるばかりでなく、銀山に富む日本の諸島も知つてゐた。またフィリッピンにも行つたことがあるのである。

彼はまたトーマス・エルソラ (Thomas de Esola) といふスペイン人を連れ出した。この男はアカブルコヤ・ニュー・スペインの海岸からラドロ群島へ行くのには打つてつけの案内人であつた。

十一月十九日二艘の海賊船が出帆しようといふ時になつて、スペイン人が全く慌てたことには、サンタ・アンナ號にカヴェンディッシュが火をつけたのである。かうして僅に五百噸の貴重な商品が炎上した。

「われ／＼はサンタ・アンナ號が水面のあたりまで焼けてきたのを見ると、これに大砲を一發お見舞ひした。これが終ると、丁度その頃東北東から吹いて來てゐた順風に乗り、イギリス指して楽しい船路に就いた。夜が迫つてゐた。われ／＼の乗つたデザイア號は、まだ沖の碇泊所から走り出さないので、たコンテント號を後に残して出發した。コンテント號はわれ／＼の船に追ひ付くだらうと思ひながら進んでゐるうちに、たう／＼影を見失つてし

まつて、二度と逢ふことが出来なかつた。」

六十噸の小さなコンテント號は、スペイン人達に乗り込まれたのだらうか。あのお伽話のやうに美しい濱邊でもう一晚過すために引き返したのだらうか。それとも、戦利品の持前を積んで渺茫たる太平洋を直航してゐるうちに沈んだか、或ひは未知の多くの島の一つにでも辿りついたのであらうか。かうして神秘の立ち籠めた無邊大の大海にまた一艘の船が消息を絶つてしまつたのである。前にもこんな事件があつた。さうして、航海の初期から現代に至るまでかうしたことは繰返されてきてゐるし、また將來に於いても繰返されることであらう。——海の水が鹽辛い限りは。

デザイア號はラドロ群島に着いた。「風に恵まれて四十五日間で着いたが、大體千七百リーダ乃至千八百リーダ (五千百哩乃至五千四百哩) の間の距離を航行してきたやうに考へられた。一月三日の午前六時頃になつてラドロ群島の中の一島を發見したが、これはグアム島といつて北緯十三度四十分位に位してゐた。彼等は驚くほど早く太平洋横斷の航海をやつたのである。マゼランがトリニダダ號で難澁を重ねながら「盜賊群島」に達した時から僅か六十七年後のことであつた。カヴェンディッシュは噪々しい土人の住んでゐるグアム島を後にして進んだ。

一月十四日デザイア號は物凄しい暴風雨に遭遇したので、帆を畳み舵柄を風下の方向に縛りつけて一晩中錨泊してゐた。夜明け方になると大きな岬の前へ出てゐた。これがフィ

リップインのスピリト・サント岬(Cabo del spirito Santo)であつた。遂に太平洋を横断してしまつたのである。

未知の東洋には数知れないほど種々の珍奇なものがあつた。一行がモルツカス群島に碇泊してゐた一月十五日の夜のこと、ポルトガル人ニコラス・ロドリゴがカヴェンディッシュ船長にコツソリ會ひたいといつてきた。ロドリゴは、陰謀と財寶とに満ちた小さな船の窮屈な船尾樓の下を通つて、眞暗な中を抜けて船尾に出て來た。

船の人々に對する誠實を誓つた後で、ロドリゴは船長に向ひ、サンタ・アンナ號から連れ出した案内人トーマ・デ・エルソラが、中甲板でマニラ總督に宛てた書狀を作つて、密かにそれを封印し胸の衣囊に藏ひこんだといふことを耳にしたと語つた。ロドリゴが言葉をつゞけていふには、エルソラは機會があり次第にその書狀をスペイン人の手に渡したい考へてゐること、書狀には二艘のイギリス船とチリ、ペルー、ニュー・スペインの海岸に互る彼等の掠奪行爲とその品物とが記されてゐること、總督所有の二艘の撓船の舷壁を堅固にして出来るだけ準備をなすやうに注告してゐること、またマニラ島の端のカブル(Cabul)といふ島にデザイア號が碇泊してゐること、更にデザイア號は一艘きりで兵力も少い旨を知らせてゐる——といふことであつた。

そこでその晩、イギリス船員はエルソラを捕へて船尾の大船室へ引つ張つてきた。銀のランプに照らされた蒸し暑い部屋で彼は難詰され調べられた。例の書狀が出てきたので可哀さうにトーマ・デ・エルソラは二重に足枷を嵌めて監禁された。カヴェンディッシュ船長は翌朝彼を處刑するやうに命じた。そこで翌十六日エルソラはカブル島で刑を受けた。左舷の前檣桁端に、太鼓の鳴る音と同時に吊されたのである。彼の死體は海中に切り落されたので、鯨が寄つてきてすつかり食つてしまつた。

サフォーク州のトリムリーの紳士が巡航してゐる間に、ヨーロッパでは種々の事件が起つてゐた。航海で傷んでゐたが、なほ積荷を満載し凍々しい様子をしてゐるデザイア號は歴史上有名なプリマス港に入港した。イギリスの空にかゝる太陽の光にきらめく重い絹の一揃への帆を張りながら、スペイン無敵艦隊の敗れた年一五八八年の九月九日にはデザイア號はプリマス海峡を走つてゐた。しかしカヴェンディッシュが船にスペイン金貨を積み、話を山ほどもつて歸つてきた時には、無敵艦隊は既に撃滅されてをり、イギリスでは國を擧げて祝つてゐたのである。彼は世界で三番目の周航者であり、イギリス人で掠奪品を携へて歸國した世界周航者の二番目の人であつた。デザイア號が絹の帆をかけてゐたのは見せびらかすためでは全くなくて、アフリカの尖端ブエナ・エスベランサ岬(喜望峯)を廻つての歸航中、暴風雨に出逢つて使ひ古した帆を臺なしにしてしまつたためであつた。カヴェンディッシュは戦利品を部下に平等に分けてやつてゐた。彼は伯爵領を買つたほど巨萬の富を自分で持つてゐた上に、年も若く派手好きだつたので、エリザベス女王の宮廷で異彩を放つた。スペイン金貨が彼の所有になつたのは當然のことである。女王は直ち

に彼に騎士の位を授けられた。國中が彼に媚態を示した。しかしそんなことはどうであらうと、トーマス・カヴェンディッシュ卿はサー・フランシス・ドレーク卿といふ男の單なる影に過ぎなかつた。

カヴェンディッシュは太平洋で得た自分の名聲に有終の美をあらしめようとして、見る間に所有のスペイン金貨をバラ撒いた。三年後の一五九一年八月、彼はジョン・デヴィス(John Davis)船長に従つて再びプリマス港を出發したが、南大西洋に聳えるアセンション島(Land of Ascension)で落魄のうちに死んでしまつた。

太平洋争覇戦

第一次太平洋發見の輝かしい時代は、一四〇〇年から一六〇〇年に亘つて繰展げられた。この勇壯な二世紀は、先づアフリカ西岸を経てコンゴ河の河口にあるディエゴ・カム(Diego Cam)の建てた境界標を更に南下して行つたかのバートロミウ・ディアス(Bartolomeu Dias)の航海にはじまり、ついでコロンブスの新世界を目指しての西への挑戦、更にヴァスコ・ダ・ガマのアフリカ廻航へと續いて行つた。かくて、その中で最も偉大な航海者であるマゼランは、彼の名に因んだ新世界最南端の海峡を通過し、世界で最も強力な大洋太平洋を初めて横斷した人であるが、またそのマゼランの太平洋横斷はキロスの夢をよび、勇敢なる掠奪船長フランシス・ド



レーク卿を咬かし、遂には幾世紀かの發見時代は掠奪の時代と化して幕を閉じたのである。しかしながら、發見は常に領有を伴ふものであることは過去の歴史の示すところである。白色人種は一種の自己欺瞞によつて、地球は全部自分達のものであると獨斷し、幾百乃至幾千年の間その地に住んでゐた人々の土地や財産を併呑しては、その所有權を擴張して行つた。しかし未開民族を追拂つたユカタン人のことや、またそのマヤ人を中米に追拂つたアズテカ人のことを考へると白色人種がやつた事も他の人種のやつたことゝ大して變りはないやうである。われ／＼は白人がその土地を奪つたからといつて、その未開な民族に同情を寄せるが、未開な民族はその敵から土地を奪つたことに關して何等良心の呵責を感ずることはなかつた。白人といひ黒人といひ黄色人といふも、これはこの廿世紀になつてから唱へられたことにすぎないのであつて、この區別の方法が果してキリストの、或はアラアの、或はまた他の神々の承認し給ふものであるかどうかは分らない。

太平洋の歴史も、この點は少しも變りはない。恐らくポリネシア人の前には絶滅した他の人種がゐたであらうし、一部のポリネシア人が、その隣に領地を持つてゐた人種と戰を交へたことは疑ひないところである。そして、白人が太平洋に侵入したとき、白人もまた戰つたのである。たとへば、オランダ人は初期のスペイン人と、イギリス人はスペインの大帆船と戰ひ、彼等は皆ポリネシア人も戰つた。そして最後に、アメリカ人はスペイン人、フィリッピン人と戰ひ——かくて戰は様々な形で今日もなほ續けられてゐる。しかし、恐らく一奇

劇的なのは、遙か昔、オランダ人、スペイン人、イギリス人及び少數の海賊共が、この大洋の周邊にある黄金を産する地方に獲物を捜し求めた時代であらう。といふのは、人が後になつて何をしようとも、すべて新しい地方といふものは物資豊かなところであるからである。

西洋諸國中、太平洋で發見したのは、最初はカソリックの諸強國、スペインとポルトガル、即ち航海術の發達した國に限られてゐた。この兩國が協力してゐた間は、太平洋は閉鎖された大洋であつたが、その後イギリス人の、更にまた一層激しくオランダ人の挑戰を受けるに及び、この太平洋は一世紀半に互つて海岸といはず荒海のさ中といはず、争鬭の舞臺と化したのである。しかしその間小さな發見や再發見もあるにはあつた。といふのは、數多くの島のうちには最初位置を誤り傳へられ、後になつて再び發見されることがあるのも、かゝる渺茫たる大海にあつては少しも不思議なことではないのであつて、今日もなほ見失つた幾つかの島を捜してゐる人もゐるといふ有様なのである。

富裕な、さすがの世界的スペイン帝國も徐々に衰退して行き、十六世紀の終近くになると、オランダ人の挑戰を受けることとなつた。そしてオランダ人は、僅かの間に數多くのスペインの堡壘に彈痕を與へたけれども、間もなくその戰を打切つた。嘗てイギリス海峡を制壓し、エニシダを橋頭につけてその海峡を游弋し、イギリスを見下してゐたこの強靱な小國オランダがスペインに脅威を感ずるなどといふことは勿論あり得ないことであつた。オランダがスペインを徹底的にやならかつたのは、澤山の黄金を藏してゐるといふので、ロッテ

ルダムの商人が垂涎してゐた極東及び南米西海岸への足場を得ればよかつたからであつた。ヤコブ・マフ(Jacob Mafu)の艦隊が、一五九八年に南米の海岸沖に到着した時、事實はそれほど大した利益もなかつたのであるが、それでもインカ帝國の富の話は、その時なほ傳へられてゐたのである。

ユトレヒトの住人、オリヴァ・ファン・ノールト(Oliver van Noort)は、海上生活を離れて旅籠屋の主人となつたが、ある史家の言によれば、「……その活躍期には榮華慾にとりつかれて」ゐた男である。彼は二艘の大きな船モーリス號(Maurice)とヘンリ・フレデリック號(Henry Frederick)及び小船コンコルド號(Concord)とホープ號(Hope)の二船を従へて航海に出かけた。彼は、マフがオランダのグーリー(Goree)を出帆した年、一五九八年の九月にテキセル(The Texel) オランダの北部にある島を出發し、途中フェゴ島の土人を殺したり、副提督のジャコブ・クリース(Jacob Claes)を孤島に棄てたりしながら、マゼラン海峡を越えて西に進んだ。

このファン・ノールトは、厳格な規律主義者であつた。一般に軍隊には、下士官上りの上級士官は最も頑固であるといふ傳統があるが、彼が嚴格なのも恐らくは以前に宿屋の主人をしてゐたからであらう。彼は南米チリーのヴァルハライソの沖合で、ブエン・ヘズス號(Buen Jesus)に遭遇し、この船を捕獲したのであるが、その船艙は空だつた。が、實はブエン・ヘズス號は非常に莫大な寶物を——三噸もある金塊を積んでゐたのであるが、彼が捕まると

へに逸早く海の中に投じてしまつたのである。ファン・ノールトは、くりかへしブエン・ヘズス號を臨檢したが何物も得ず、仕様ことなしに水先案内を探した。彼は結局水先案内のボケットに一封度の金塊の入つた大きな皮袋を見付けただけであつたので、赫ら顔の提督、ファン・ノールトは、すっかり腐り切つて、モーリス號上の自分の船室に戻り、オランダヂン酒を命じ、テーブルの上のその小つぽけな金塊の袋を肴に酔拂つた。海洋史上これほどにみぢめなことは恐らくなかつたであらう。また、もしファン・ノールトがあの大金塊を全部わがものとしたならば、オランダ人は南米征服の大壯舉を敢行したことであらうと思はれる。

とはいふものゝ、彼はこんなにも不運であつたにも拘らず、海戦にかけては第一流の船乗りだつた。——尤も第一流といつても彼如き人達が海賊であつたやうな時代の話であるが。先ブラドロロン群島(Ladrones—マリアナ群島)へ向けて航海し、ついでフィリッピンはマニラ市のあるカワイテ灣——かの提督デューイ(Dewey)がスペインの艦隊を打破り、合衆國のために國際政治上の頭痛の種をまいたあのカワイテ灣へ航行したのである。

一六〇〇年十二月十四日の朝、マニラ沖合でモーリス號とコンコルド號は、自分達の方を指して進んで来る二艘のガレオン船を認めた。その時、ファン・ノールトの率ゐてゐた船はこの二隻だけになつてしまひ、その部下も兩船合せて八十人しかゐなかつたが、スペイン側は一隻に百人づゝ乗組んでゐた。オランダ人は風上に頭張つてゐたが、微風であつたため、その風蔭の左舷の窓を閉めきつておかねばならず、思ふやうに使ふことができなかつた。

そこでスペイン人は、風上のオランダ船に向つて突進し、甲板に乗り込んで来たのである。モリス號の乗組員は甲板から船艙に追ひ込まれ、コンコルド號は提督の船が降参したのを見て逃走しようとした。ファンノールトは、スペイン人に甲板を奪はれても屈しなかつた。そして彼の部下に命じた。

「あがれ！ 奴等を追驅けろ。追驅けなければ火薬庫に火を放けるぞ。すりやみんな無理心中だ。こん畜生！」

そこで一同は甲板に上り、スペイン人を船外に追拂つた。そしてそのガレオン船を沈め、またボートを降して泳いでゐるスペイン人を刺殺したのであつた。もちろん酷たらしく見られたものではないが、それが當時の太平洋でのやり方である。その復讐にスペイン人は、分捕つたコンコルド號の乗組員を海岸に連れてゆき、一人残らず首くりにした。ファンノールトは、この海を離れて故郷に歸り、自分の旅館で空の皮袋をつくぐぐと眺めては手に入れ損ねた數噸の金塊を想起すのだつた。それは全くうつつの語草だつたし、恐らく何度もくたをまくだけの値打はあつたに違ひない。

オランダ人は結局、旅籠屋提督に飽きてしまひ、また國家の威嚴を少しも高めなかつたマフの如き人々にも飽きてきた。かくて、例の東印度會社が登揚して、その後も依然オランダ領土であるジャヴァやボルネオを支配することとなつたのである。この會社は結局、東洋において、一大帝國を支配し、幾百萬の人民に従へ、兵士を城砦と實質的には軍艦である商船

隊とを以てそれらを統治した。ヨリス・スピルベルゲン(Joris Spilbergen)は東印度諸島で外國人の艦隊と戦つて功をたて、後に司令官に任ぜられた人であるが、一かどの人物であつた。或る日のこと六隻の帆船に武装を施し食糧を積込んで待機すべしとの命令が發せられた。この艦隊の一部は當時の最大級の船であり、大砲も五十門有し、當時としては最大の裝備をしてゐた。六隻の船の名はアムステルダム州の船旗艦太陽號(Great Sun)、副旗艦新月號(Full Moon)、獵人號(Huntsman)、鷲號(Sea Mew)及びジールランド州の船旗艦神號(Aeolus)及びロッテルダム州の曉星號(Morning Star)である。スピルベルゲン提督は、勇敢な腕の確かな者のみを部下の士官として揀び、旗艦上には特にローランド・フィリップス(Rowland Phillips)大佐とフランシス・ド・シェーム(Francis de Chene)中尉の率ゐる海陸兵の大部隊を載せてゐた。今日までその名の傳はつてゐるのは右の二人だけである。艦隊はマゼラン海峡を通過し、一六一五年四月六日に「南の海」へと乗り出した。が程なくスペインの一艦隊が待構へてゐるといふことを——スペイン人が物が物と思込んでゐる海へ侵入して来るオランダ人は片づ端から撃退しようとしてゐるといふことを耳にしたのである。

このスペインの艦隊は、ロドリゴ・デ・メンドサ(Rodrigo de Mendoza)提督の指揮下にあり、物凄しい武装をしてゐた。メンドサは二十四門の眞鍮のキャノン砲と四百六十人の兵士を載せたヘスマリア號(Jesu Maria)に乗つてゐたが、この船は王室費のうちから十五萬八千ダカットも出して作られたのである。サンタ・アンナ號(Santa Anna)は副旗艦で、やゝ裝備は劣る

が三百人の兵を載せてゐた。この兩大艦のほかに、八門の眞鍮キャノン砲と二百人の兵士を載せたカルメリテ號 (Carnelite)、セント・ジェームス號 (St. James)、裝備はしてゐないが七十人の小銃兵を載せたセント・フランシス號 (St. Francis) 及び八十人の小銃兵を載せたセント・アンドルー號 (St. Andrew) があり、他に裝備の不明な船が一隻あつた。

メンドサ提督は危く逃げ歸つて來た商船からオランダ人が大きな船をもつて大舉してこの灣に近づきつゝあることを聞くや、これらの艦隊を率ゐてカラオ灣を出帆した。メンドサは出發に際し廣言して曰く、「自分の船が二隻あれば、全イングランドを取ることができる。まして長い航海でへとへとになつてゐるオランダ人の臆病者奴を捕へることなんか朝飯前の仕事である」と。

「ロドリゴ君、お前のいふことに間違ひはあるまいな」と總督は微笑しながら答へた。かくして王室遠洋海軍の勇敢な艦隊は、カラオ灣を船出したのである。

一六一五年七月十七日の夕刻、スペイン人は、オランダ船の四角な上檣帆を見付け、滿帆の風を孕んでこれに取組んで行つた。双方は互に火をかゝけて彼等の旗印を示し合ふ位のところまで近づいて行つた。

スピルベルゲン提督は、生粋のオランダ人で正規軍の軍人であり、元氣潑刺として闘争力に富んでゐたので、このスペイン人を歡呼をあげて迎へ撃つた。

「もしお望みなら、スペインの諸君、夜明けまで攻撃を待つてやつてもよい」と、その大きな

眞鍮の喇叭を手にして彼は吹き鳴らした。

「夜明けまでまつ？ オランダ人の臆病者奴が！ さあすぐ戦はう！」と、ロドリゴ・メンドサはヘスマリア號の舷側から挑戦に應じ、十二の眞鍮のキャノン砲の火蓋を切つて太陽號の舳近くへ彈丸を打込んで來た。

スピルベルゲンは、その時恰度うまく風上にゐて、その射程を外したのであつた。砲煙がスペイン軍の索具から立ちのぼつた。そして副旗艦も戦列に加はつたが、他の小さな船は時が來るまで戦に加はるのを避けてゐた。スペイン軍は大砲の筒を通すと再び彈薬をつめこんだ。「何！ オランダ人の臆病者！」とヨリス・スピルベルゲンは激怒して蒼くなり、その無禮にこらへかねて後部の上甲板を足音高く上つたり下りたりした。一方乗組員は、火繩に火をつけて大砲の側に齒をむいて立つてゐた。太陽號は帆を廻して風を一杯に受け、赤い信號を掲げて、續く滿月號と共にスペインの大船と取組み、最初の一斉射撃を喰はさんとしてゐた。と突然衝擊が船を震撼させた。と思ふ間もなく二度目の大砲の音が太平洋中に響き渡つた。

まるで噴火山上のやうな夜であつた。十時頃には、大砲は赤熱し、大艦ヘスマリア號は太陽號の舷側に横づけとなつた。兩旗艦は接近したまゝ、射角零で偏舷射を應酬しあひ、彈は双方の木製の舷側を貫き合つた。砲聲の響の合間々々には喇叭の音が高らかになり渡つた。向ふ見すのセント・フランシス號が続いて戦列に加はり、貧弱な武器を以てオランダ

の旗艦を攻撃したが結局尾を巻いて避けなければならなかつた。その大戦の最中に鷗號はセント・フランシス號の側に近寄り、唯一回の偏舷齊射で海底に打ち沈めた。——船材は飛び散り、小銃兵は喚き叫んだ。するとメンドサは風上に向ひ、ヘスマリア號に命じ小さな鷗號に向けて物凄く偏舷齊射を浴びせかけた。スピルベルゲンは鷗號の危急を見て、一隻のボートを派して僅かに生き残つてゐる者を救ひ出し、満月號にも同じことをするやう信號で命令した。

獵人號は太陽號からのボートが砲火に照らし出されながら砲煙の下をくゞつて漕いでゐるのを闇のために見誤り、敵船と考へた。そして大砲を構へてそのボートを砲撃し撃沈してしまつた。僅かに逃れ助かつたものは唯一人であつた。戦は既に夜半過ぎまで續いてゐたため、砲煙は濃くたちこめ、もはや敵味方も見分け難くなつた。そこで双方の船は後退したが、下甲板は戦死者の屍山をなし、帆は破れ、索は切れ、また舷側は穴だらけになつてゐた。

砲撃を受けた軍艦は、山のやうな太平洋のうねりの中で木の葉のやうに浮いてゐた。翌朝早く、裝備のある味方の船が僅か五隻しか残つてゐないのを見て、スペイン人達は逃走しよとメンドサに信號で合圖した。しかし、この時、オランダの旗艦と副旗艦は、再びスペインの旗艦と副旗艦とを攻撃しはじめ、この四隻は死闘を開始したのである。やがて風神號も戦闘に加はり、その偏舷齊射をスペインの旗艦に浴びせた。

その戦は陽が上つてからもなほ續き、力戦苦闘したスペイン軍の旗艦と副旗艦は、ともに傷つきその舷側は粉々になつて、荒れ狂ふ海上に木切れなどと共に漂つてゐた。上橋はすべて撃破され、下の橋も毀れたものが多かつた。横静索はもつれた糸屑のやうな残骸をさらし、鎖でつながつてゐる帆桁は、操桁索が切れて揺れてゐた。船大工は弾丸の穴を埋めてゐたが大砲は焼けつくほど熱くなつてゐた。水を汲みあげては大砲を冷やしたり、火を消したり血糊を洗ひ落したりしてゐた。手足を失つた不気味な死體が海中に投棄てられた。かういつた情景がオランダ船といはすスペイン船といはす至るところで繰り展げられた。しかし、國旗は絶えず掲げられてゐた。嘲罵の聲は終日熄むことなく、苦悶の呻めきや輕侮の叫び、またはかすかな歡聲が風に吹き送られて響き渡つたが、遙か東の方の大アンデス山脈(譯註、南米西岸の山脈)の青々とした嶺は冷やかにその光景を見下してゐた。鯨があたりに水音をたて、泳ぎ、煙は褐色や青すんだ雲となつて橋頭のあたりに漂つた。帆布の燃える臭麻やタールの燃える臭が、火薬の硝煙の中に一層刺戟的な臭をさせてゐる。

ヨリス・スピルベルゲンは、その恐ろしい戦の間、まるで海驢のやうであつた。彼の水兵は絶えず正確に發砲した。「オランダ人が臆病だといふ彼は偏舷齊射がうまくゆく度ごとに繰返しスペイン人に嘲弄を浴びせ返し、乗組員もまたそのあとをつけて叫んだ。その侮辱はロドリゴ・デ・メンドサをいきりたゝせ、その部下の多くを失はせるに役立つた。

オランダ人は、戦をする氣になつて立上るまでは遲鈍な國民である。しかし一度立上る